求道

第四卷
第六號

明治四十年十一月一日發行（每月一回一日發行）

明治四十年十一月二十日　第三種郵便物認可

求道第四卷第六號目次

◎信仰問題の樞軸　求道
感謝
◎天下何の處か感謝なからん◎秋思◎嗚呼島田蕃根翁◎嗚呼陸實居士◎嗚呼綱島梁川君◎義なきを義とす◎嵯峨詣　講演
◎觀佛本願力　告白　近角常觀
◎大悲の善巧終に我を攝取し給ふ　有田廣
◎感思　感話　後藤龍緣
◎於戲綱島梁川師　歎咏　塚本大愚
◎磯の月草（短歌）　左千夫
◎秋の海（同上）　時報　增田甚
◎求道學舍紀念日◎若松求道會◎佛敎青年聯合會
◎暑中傳道日記　旭村生

附錄

眞宗慶嘆　近角常觀

序言　眞宗慶嘆
一　如來本願
二　一佛名號
三　招喚勅命
四　父母因緣
五　利他願海
（未完）

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛敎倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋區殼町敎所》

求道　第四卷第六號

信仰問題の樞軸

道は邇きに在り、然るに之を遠きに求むは道を求むるものゝ常に服膺するの格言なり、然れども睫毛のあまりに近くして見へ難きが如く、吾人の眼前に常に轉じたまふ一大法輪はあまりに絶大にして却て其大なるを知らざることあり、眞宗の緇素口を開けば本願と言ひ、廻向といふ、之を眞宗常套語の如く思念して其威德廣大なる意義を感ずること少きが如し、近時信仰問題大に起るに及び、深く佛陀の慈悲を仰ぎ如來の光明を喜ぶもの益々多きを加ふるは末代の不思議と謂つべしと雖、未だ正面より如來本願力の廻向の眞意義を稱へたてまつらざるは大に遺憾と謂つべし、而して吾人自ら亦久しき已前より慈悲と云ひ、光明といひ、念佛といふも、本願若くは廻向の文字に多大の意義を見出し來れるは最後の事に屬す、いでや吾人は其胸臆を披瀝せずして止むべけんや。

抑々近時青年道を求むるもの、人生百般の出來事によりて覺醒し來りて、眞摯の態度を以て、如來の救濟を仰ぎ佛陀の光明に觸れんことを憧憬するもの多し、其求むるや切實、敬虔にして其情亦悲憫に堪へざるものありと雖、眞箇に中心の滿足を得るもの少きものは何ぞや、畢竟是れ吾人の求めにより て慈悲を得べしと考ふるが故也、吾人の攫むことによりて光に達すべしと豫想するが故也、抑々佛陀の慈悲は永劫の昔より常に我等にさしむけたまふ、如來の光明は十劫の曉より偏く世界を照し給ふ、噫久遠已來我等が罪惡に苦惱せるをみそなはして意を先にして悲憫したまふ、是佛陀の慈悲にあらずや、我等が無明に彷徨せるを照見して大悲の慈懷に攝取したまふ、是如來の光明にあらずや、慈悲や光明や吾人が心を如來に手向くることによりて來るにあらず、如來の御心を我等にさしむけたまふことによりて我等の心に來りたまふ也、是信樂開發の一念に於て深く實驗する處也。

信仰問題の眞髓は南無阿彌陀佛也、善導大師釋して曰く、南無と言ふは即是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義也、阿彌陀佛と言ふは即是れ其行なり、斯義を以ての故に、必す往生を得と、是れ實に南無阿彌陀佛の六字に願行具足せるをあらはしたまふ也、今や吾人最も注意を拂ふべき所に來れり、抑々普

通信仰問題に於て歸命といひ、發願廻向といふもの何れも吾人佛陀に向ふの態度たらずんはあらず、歸命は吾人切々の情如來に求むるの謂、發願廻向とは吾人道を求むるの願心を發し、我等心を廻らして如來に歸向したてまつるの謂なるべし、然るに親鸞聖人信仰問題の上に破天荒の一大德音を顯示して根本的の一大轉換を行ひたまふ、其の樞軸の中心は即ち本願力廻向の轉法輪是也。

聖人謂らく我等が信仰は我等が發願して心を如來に向ふるによりて定まるに非ず、如來既に發願して我等が上に大悲の御心を向けたまふによりて定まる也、如來の發願といふは如來大悲の本願是れなり、廻向といふは、我等如來に手向くるにあらず、如來我等に御心を廻らして我等にさしむけたまふ也、是に於て本願力廻向の一大法輪人生の上に轉ぜられたり。

聖人の和讃に曰く、

如來の作願をたづぬれば
苦惱の有情をすてずして
廻向を首としたまひて
大悲心をは成就せり

嗚呼偉なる哉如來の本願、嗚呼大なる哉如來の廻向、聖人敎行信證の開卷劈頭直ちに淨土眞宗を案ずるに二種の廻向ありと宣言し、敎行信證往還二種の廻向各々皆如來の本願に淵源することを開顯したまふ、若し如來の本願力廻向あるにあらずんば我等如何でか歡喜踊躍の信念を生ずべき、我等如何に至心發願するも、至心廻向するも、凡夫自力のはからひを以て奈何ともすべからず、唯大慈大悲の本願を以て矜哀悲憫の御心を廻向したまひてこそ吾人初めて至心信樂己を忘れて如來大悲の膝下に悅樂するを得べき也。

此に至りて聖人は歸命の味ひを闡明したまひて曰く、歸の言は至也、又歸說也、說の字は悅の音又歸說也と、是至心歸命の眞味、歡喜愛樂の法悅を披瀝したまひしものにあらずや、此の如きの法悅全く如來大悲の御惠みに呼び起さるゝもの、遂に其淵源を明らかにして曰く、是を以て歸命とは本願招喚の勅命也、發願廻向と言ふは如來既に發願して衆生の行を廻施したまふの心也、即是其行と言ふは即ち選擇本願是也と、此に於てや信仰問題の眞髓南無阿彌陀佛は吾人自力を以て發願廻向するに非らずして全然是れ如來大悲の本願力廻向の外なきに至る、此に於てや本願成就の文に其名號を聞きて信心歡喜し、乃至一念せん、至心に廻向したまへり、即ち往生を得、

不退轉に住すと宣へるもの、實に如來本願の廻向吾人の胸臆に溢れ來るの眞情にあらずや、故に聖人又曰く、必得往生と言ふは不退の位に至ることを獲ることを彰す也、經には即得と言へり、釋には必定と言へり、即の言は願力を聞くに由りて報土の眞因を決定する時尅の極促を光闡する也、必の言は金剛心成就の貌也と、嗚呼是れ如來本願力の廻向吾人心中に徹到せる絕對不動の有樣にあらずや。

天親菩薩淨土論の初に啓白して曰く世尊我一心、歸命盡十方無碍光如來、願生安樂國と宣へり、是天親論主の內心自督の披瀝に非ずや、一心とは即ち彼本願力の內心に宿りたる至心歸命の信心にして一念無疑の信樂にあらずや、而して其歡喜愛樂する如來の御姿を讃仰して、盡十方無碍光如來と稱へたまへり、此光明や此如來や即ち彼本願の御心より成就して十方微塵世界に於ける有情を悲憫したまふ大慈大悲の御力也、嗚呼如來の本願は十方の衆生、生きとし生けるもの蠢々の有情に至るまで盡さゞる隈もなし、特に罪惡の凡愚、穢惡の群生の爲には哀愍の涙を注ぎ攝受の御手を下したまふ、かくの如き大悲の威神力豈我等極惡の衆生に貫徹せざるべき、天親論主の內心に宿りたまふ一心は亦我等內心の至心信樂の信心也、聖人曰く、乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に由るか故なり、偶々淨信を獲は是心顚倒せず、是心虛僞ならず、是を以て極惡深重の衆生大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲る也と、嗚呼我等極惡の衆生、信樂開發の一念の時、眞の佛弟子として、佛陀の眞子として如來の愛子として諸佛護念の下に聖尊の重愛を蒙ること如何なる本願力の不思議ぞや、此に於てや天親論主重ねて曰く、『佛の本願力を觀ずれば、過ふて空しく過ぐる者なし、能く速かに功德の大寶海を滿足せしむ』と、嗚呼偉大なる哉本願力。

曇鸞大師は註論を著して天親論主の眞面目を闡揚して本願他力を宣言したまふ、故に本願力廻向と云へるを解して曰く、本願力と言ふは大菩薩法身の中に於て、常に三昧に在して、種々の身、種々の神通、種々の說法を現ずることを示すこと皆本願力より起るを以てなりと、嗚呼一如法身の境より大慈大悲の淸淨願心を以て我等を救濟せんが爲めに來現まします也、故に一心より流れ出つる五念の行も其の本源に泝れば皆是れ法藏大菩薩の我等が爲に不可思議兆載永劫に成就したまふ所、自利利他の行、皆如來願力の成就に非るなし、而して此等の功德如來利他廻向の一門より我等が上に與へたまふ、而

して此如來か吾等の上に與へたまふ願力をあらはしたまふ是即ち利他の一語なり、若し如來の本願力廻向微かりせば我等いかてか佛名を聞くべき、我等いかてか信心を獲得すべき、いかて無上涅槃を得べき、いかてか煩惱の林に遊び、生死の薗に還るべき、敎行信證往還二種の廻向皆是れ如來清淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあることなし、嗚呼煥たる哉、本願力廻向の一大德音、經に說て正覺の大音、響十方に流ると宣ひしもの良に以ある哉。

親鸞聖人證卷の結文に曰く、論主は廣大無碍の一心を宣布して普偏く雜染堪忍の群萌を開化し、宗師は大悲往還の廻向を顯示して、殷懃に他利利他の深義を弘宣したまへりと、是聖人か天親曇鸞に私淑して名くるに親鸞を以てしたまふ所以なるべし、嗚呼吾人何等の幸か此の如きの本願力廻向を蒙りて、盡十方無碍の一心を開發するを得たる、嗚呼聖人は十方衆生の御同朋にして亦如來本願の御代官と謂つべし、此に於てや言絕え筆極まりて亦言ふ所を知らず、唯々本願の不可思議を崇信仰嘆するあるのみ。

淨土論に曰く、觀佛本願力、遇无空過者、能令速滿足功德大寶海とのたまへり、この文の意は佛の本願力を觀ずるにまうあふてむなしく過るひとなし、よくすみやかに功德の大寶海を滿足せしむとのたまへり、觀は願力をこゝろにうかべみるとまうす、またしるといふこゝろなり、遇はまうあふといふ、まうあふといふは本願力を信ずるなり、无はなしといふ、空はむなしくといふ、過はすぐるといふ、者はひと〳〵といふ、むなしく過るひとなしといふは、信心あらんひとむなしく生死にとゝまることなしとなり、能はよくといふ、令はせしむといふ、よしといふ、速はすみやかにといふ、ときことゝいふなり、滿はみつといふ、足はたりぬといふ、功德とまうすは名號なり、大寶海はよろづの善根功德みちきはまるを、海にたとへたまふ、この功德をよく信ずるひとのこゝろのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめんとなり、しかれば金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大寶そのみにみちみつるが故に、大寶海とたとへたるなり、

《親鸞聖人『一念多念證文』》

感想

天下何の處か感謝なからん

筆を採りて感謝を描かんとす、天下何の處か感謝なからん、何物か感謝の資料ならざるべき、東籬の菊、深山の霜葉何れか感謝の情を催さゞるべき、元祖上人は天の星を南無阿彌陀佛と宣ひ、蓮如上人は衣の襟を御たゝきありて南無阿彌陀佛よとのたまふ。問ふこと勿れ、何か故に然るかと、答ふること勿れ、某々の理由を以て然るなりと、吾人は唯々盡十方無碍の御惠と聞けば、胸躍る心地し、芥子の地も捨身の處にあらざるなしとうけたまはれば、譯なくして涙自から溢る、嗚呼筆も南無阿彌陀佛、紙も南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

秋思

盛夏二ヶ月東西各地御同朋の深き情に勵まされて、西、宮嶋の曉に杜鵑を聞き、越中、飛驒、信濃の欝々たる綠を踏み越えて、越後の海濱に祖師聖人の御苦勞を忍びしも、はや夏の夜の夢と消え去りて、今は亦學舍孤燈の下に秋思の長きに各地御同朋の上を想ふの時季とはなりぬ、夫れにつけても慚愧に堪へざるは我意り勝にて筆を採るに懶きことなり、つかの間も惜みて御敎を傳へまつりつるかと思へば、歸京已後あだかも一ヶ月も筆たゝぬなど面目もなき次第なり、されど御惠をたゝへたてまつるの思は日毎、夜毎にやむときなし、想を古聖人の上に馳せて夢に尊影を拜みたてまつるかと思へば闇に墮つる深きより目覺めて、曉の稱名身に泌みてありがたし、嗚呼秋は醒覺の時也、收穫の時也、求道の好時季也とは、いつも秋になりて繰返すが爲にや、却て今は秋に驚かされて窓前の落葉に無常迅速の感に堪へざらしむ。

嗚呼嶋田蕃根翁

島田蕃根翁は明治思想界の大恩人たること世擧て之れを稱す、大敎院時代より佛敎興隆の爲に盡瘁せらるゝ所頗る多し、大敎院分離の實行の如き陽に嶋地默雷上人の主張の力に依ると雖、陰に翁の補翼多きに居ると云ふ、蓋し大敎院分離の如きは明治宗敎史上に於て、一大時期を劃すべき事件にして、信仰獨立上後世佛敎徒の深く感銘すべき所、翁幼時暇書の時梵網經下卷を發見し、世上上卷のみ行はれて下卷を知るものなきを以て茲に初めて藏經出版の志あり、天源溯源の沽字本を見るに及び遂に縮刷藏經を作るの志を起し、百方遊說して遂

に之を完成す、近年學者容易に閲藏するを得たる全く翁の賜と謂つべし、翁深く聖德太子を尊信し、維摩經及勝鬘經の義疏木板を起し、晩年十七憲法を手書して世に頒布す、近年聖堂孔子の像に對して釋奠を復古せしが如き實に翁の創意に出づ、猶翁の宿志として帝都の中央に聖德太子の殿堂を建築し明治時代の美術の粹を鍾めて、之を莊嚴すべしと云ふにありき、蓋し將來皇太子の聖德世に洽きと共に必ず之が實現を見ること決して難きにあらざるべし、而して翁が年來尊崇怠なかりし法隆寺より出でたる聖德皇太子二歳南無佛の尊像は求道會館設立の日傍らに崇めたてまつるべき約、生前既に成れり、是求道學舍及會館の敷地は翁の住宅々地たりしを紀念するが爲にして、亦予が皇太子を信仰し奉るに感じて之を附屬したまひし也、八月二日享年八十一歳を以て逝かれぬ、嗚呼悲哉予數年翁に師事したりしが恰も夏季傳道中たりしは最も遺憾とする所也、毎年學舍紀念日翁を請して主賓となす、來らん年は如何にして之を補ふべき嗚呼。

嗚呼陸實居士

同月同日を以て吾人は陸實居士を喪ふ、嗚呼何ぞ先輩の凋落頻なる、陸翁の日本思想界に貢獻せられたる多大なる何ぞ吾人の多言を要せん、常に單身世の風潮に逆行して廻瀾を既倒に復したる幾度ぞ、吾人が特筆して感謝の意を捧ぐべきは前年宗教法案問題の時、吾人が微衷を諒とし、十數日の紙上、十分に意見を世上に發表せしめられしもの、一に居士の恩賜によることとなり、而して當時多大の同情を與へられし神鞭翁曩きに逝き、編輯長として便宜を與へられし川那邊居士亦既に逝き、今陸居士亦逝かる、吾人は世の志を同うするの人が深く諸氏の恩を銘せられんことを望む。數年前居士を訪ひて談偶々安心問題に及ぶ、居士曰く、齷齪筆硯に從事し、縱論横議したるの後靜に吾廬に歸りて仰て天文を眺め、思を古今に放つとき、かくの如く論するもの議するもの、渺たる蒼海の一粟、百年の後何れの處にか在ると、一念此に及ぶときは萬慮頓に亡して亦何等の胸中に介するものなしと、今や果して其言の如く杳として逝きたまふ、嗚呼、善導大師曰く"西方寂靜無爲樂"畢竟逍遙離有無、大悲熏心遊法界、分身利物等無殊、冀くは盡十方無碍光に一味に入りたまはんことを。

嗚呼綱島梁川君

吾人の君に於ける最も奇緣と謂つべし、君が病間錄を發行して批評を求めらるゝや、吾人は深く其實驗に同情を拂ひ、同

時に其實驗其者よりも之によりて開發し來れる信境を重んずべきを言ひ、君が佛敎に對する見解の尙ヴェールの隔たるが如き感あるを披瀝して、寧ろ樂土の妙境を希望として直に如來無倦の慈光を仰がれん事を望みたりき、是實に一昨年十一月の事なりき、而して一昨年夏求道得信して歸國せられし塚本次郎君昨年再び九州より來りて梁川君に見ゆるの志切なるを述ぶ、乃ち其意に任す、梁川君喜び迎へ、共に信仰を語る、塚本君日常に念佛を誦し、又尺八に巧なり、常に之を病床に吹きて梁川君を慰む、一日君の塚本君に告て曰く『求道』の爲に多大の慰藉を與へらるゝ多し、幸に直接相語るを得むと、予之を傳聞して君を病床に訪ふ、實に昨年十一月十三日也、一見相視て舊知の如く、互に信仰を語る、君深く親鸞聖人の盡十方無碍光如來の尊號を喜び、且つ聖人が謙虛なる態度を嘉ひたまふこと著し、乃ち君が望に任せて前橋妙安寺所藏にかゝる聖人一笠一杖旅姿の上に十字名號を親書せられたるものと、盛岡本誓寺所藏にかゝる唯信鈔文意奥書直筆との石版を贈る、又聖人が無義の義、法則の解等を示せしに讃仰感嘆せられたること極なし、又、聖人の草稿和讃を贈りしに直ちに「よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりがほは、おほそらことのかたちなり、是非しらぬ邪正もわかぬこのみなり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり」といへるを一瞥して感嘆止むなし、「偉大なる凡人主義」の一篇恐くは之に基因せしならむか、「光明てらしてたへざれは、不斷光佛となつけたり、聞光力のゆへなれば、心不斷にて往生す」是れ亦聞光錄の名の來る所以たらむか、常に「大悲ものうきことなくて、つねに我身をてらすなり」、を誦し、獲信見敬大慶喜の文字を味ふ等吾人に多大の暗示を與へたまへり、而して本年四月の変より念佛を稱へて其味の甚深微妙なるを嘆ぜられしといふ、予君に見ゆる僅かに二回なりと雖、親鸞聖人の渴仰者として百歳の知己を得たるの感なくんばあらす、君が求道の態度を聞くに、最初は情意の滿足のみを以て安んぜす、理性の滿足を得んとして大に勵み、四十歳までに東西三聖の敎を極め、四十五歳にして一家を成すの志あり、而して道を求むること切實にして益々煩悶し、遂に稀有の實驗に接して法悅の境に入れり、最近の日記に口傳鈔を熟讀し、親鸞聖人三日間水漿不通にして臥し給ひて沈思の後三經千部讀誦の志をすて、唯稱へやすき念佛のみを喜ばんと宣ひしにいたく感じ給ひしと云ふ、予二ヶ月傳道して九月

十四日善光寺に詣して歸京す、其夜恰も君逝きたまひぬ、訃を聞きて趨り吊ふ、恰然として眠るが如し、柩前に合掌して仰げば、楣間蕣きに贈りし聖人の像と筆蹟とは恭しく表裝して掲げられたり、益々君か深厚なる信念を仰ぐと共に久しく知己の情に背けるを謝せざるべからず、想ひ起す、予か昨年君を訪へるの時亦柿葉々として窓外「秋の力」をあらはす、君曰く、嗚呼秋は充實也、くり〳〵としたる也と、而して今年の秋は遂に君を喪ふ、然れども信念の秋は現世にあらず、彼岸の樂土にあり、是涅槃の極果、眞如一實の妙境也、親鸞聖人臨末の書に曰く、我年窮まりて安養淨土に還歸すと雖、和歌の浦の片雄波のよせかけ〳〵還らんに同じ、一人して喜はゞ二人と思ふべし、二人して喜ばゝ三人と思ふべし、其一人は親鸞なりと、予之を君に語れるの時君容を改めて嘆じたまひき、今や君、聖人と共に此生死の薗、煩惱の林に遊戯したまひて我等か念佛を稱ふる上に來りたまふなるべし、南無阿彌陀佛。

義なきを義とす

義なきを義とすとは聖人晩年の敎化に常に口に絶えたるときなし、而も常に大帥聖人の仰なりと宣ふ、此の頃信友住田智見師專念往生傳に見えたりとて法然上人の御書を示して曰く、

熊谷蓮生入道へ返答

淨土宗安心起行事

義なきを義とす、樣なきを樣とす、淺きは深きなり、只南無阿彌陀佛と申せば、十惡も五逆も三寶滅盡の時の者も、一期に一度も善心なき者も、西東わきまへぬものも、決定して往生を遂候なり、釋迦彌陀を證とす

建仁二年正月二日　　源空

此書西山上人の筆にて京都永觀堂に傳ふと云ふ、建仁二年と云へは法然聖人七十歳にして親鸞聖人入室の翌年なり、かくの如き日夕力强き御敎化を蒙りたまふ、金剛不壞の眞信を決定したまひて、たとひ法然聖人にすかされまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからずと宣ひ、臨終までも義なきを義とすと喜びたまへる御心、まことに御尤と頂くの外なし。

嵯峨詣

我母幼時の宿願は嵯峨の釋尊と磯長の聖德太子に詣づるに在りき、而して昨年磯長へ共に參詣し、本年幸に嵯峨に詣でゝ

宿望を滿足するを得たりき、傳へ曰ふ釋尊三十七八歳御母摩耶夫人のために忉利天に上りて說法したまひける時優塡王愛慕の餘作れる所なりといふ、東大寺の奮然法橋入唐の時渴仰の志深く遂に之を將來して栖霞の兩臺に安じ名つけて五台山清涼寺といふ、法然上人七日參籠して道を求めたまひしも此靈場なり、我嘗て以爲らく、眞宗の相承は三國七祖にありと雖、一面に於ては釋尊、聖德太子、親鸞聖人の系統存すべしと、今や端なくして母に導かれて此の如き靈地に詣す、佛陀冥冥の御導き洵に不可思議の恩德と謂つべし。

十九と申すとしの四月十九日京に上りつきて、同じ月の二十五日といへるに、はじめて嵯峨清涼寺に詣で侍りぬ、こゝは優塡大王の請にて、毘首羯磨天のあらせたまひける御像の第二應なるよし、古き物に見えはべりて、寂蓮法師の歌に「わしの山ふたゝびかげのうつりきて嵯峨野の露に有明の月」となんよまれたるも、此の里なりと思ふにも、祖師法然上人の昔も此寺に七日參籠しおはし、かたゞく世に貴とくて、一夜通夜申侍りき、

再びときくも嬉しきみ佛はひとたびだにもあひがたき世に

其後二十年ばかりもやへにけん、重れて京上りしてまた此御寺に詣でける日、越中の國の光導行者の思ひもかけず詣でけるにあひて、夢かと思ふばかり、さま〳〵尊き物語りなど承り侍りて、

さかむにの御前にあふも迦毘羅衛に結びやおける契りなるなん

とて其あけの朝別れ侍りし、其後年へて江戸に御開扉のとし、傳通院の大佛殿に一夜請じ奉りて、百味備へ舞樂など供養し奉れるあけの朝、近きころ旃檀端像佛二體考出でゝ侍るを、御前にて伊佐岩原呂と二人にて讀合せ侍りき、御佛のこゝろにも背き奉らさりけんとうれしうてよめる

くみみれは淺き硯の水にさへ大悲の御かげうつろひにけり

《行誡上人》

信仰生活に健鬪あり、向上あり、努力あり。これ信心獲得の人の、特に强者に經驗せざるを得ざる嚴肅なる事實也。さはれ、信仰圏中の健鬪や、向上は、我が世不思議なる恩寵のありがたさ、うれしさ、かたじけなさの念ひに回光返照せられたる底のもの、例へば忠臣が君主に對する荷恩罔極の感に鼓舞顚倒して顧みざる底のものなるべきなり、更に言へば、そは法の悅びてふ深き〳〵源頭よりおのづから涌きいづる底のものなるべきなり。法悅に滙して健鬪に發す。そこに雍容として迫らざる大雄のしらべあり。信仰の人の健鬪生活は、神と樂しみ人と和ぎ、自然萬有と懽然相得て忤はざる無碍人の面目なるべし。

信仰の人にも煩惱罪障の累あるべし、されど信仰の人には法悅てふ神與の仙杖ありて、その觸るゝ所能く「煩惱の林、」「生死の薗」を逍遙游の一境と化せしむ。信仰の人にありては、その最も眞面目なる働きが、やがて最も高尙なる意味にての遊戯三昧なり。信仰の人とは最も優に美くしう遊戯するの人なり。三界は彼れが一大淨樂土也。「有漏の穢身は變はらねど、心は淨土に游ぶなり。眞人は常に游ぶ。彼れが一念の法悅は、隨處春をなして、また相違ふ所あらず、而して如是一念相續の法悅の人、即ち不斷の見神底の人にあらずや。

《綱島梁川師》

講話

觀佛本願力

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

一

五六日間旅行をして只今歸つて參つた處てす。此度は京都に用事が出來たを幸に尾張なる信仰の友達を訪ねました。尾張は熱田てありまして、茲に大層「求道」を喜んて下さる方が居られます。從前より是非に一度來いとの始終の話てありまして、其方は住田智見と申されます、吾が大谷派の若手の宗學者として最も名高い方てあります。どういふ御緣か非常に「求道」を喜こんて下さいまして、毎に人にも此事を話し、尠からぬ道友をも誘つて共に喜んで居て下さる次第てあります。今迄何うも好い折が無くて伺ふ事が出來ませぬてしたが、丁度今回は京都に用事が出來たを幸に一寸伺ふことが出來ました。三十日の晩に出立致しまして一日二日と二日間丈け其方の所に參つて居りました。色々難有い御話も澤山に承はつた事てあります。

只今此の處に貼り出しましたは吾が本願寺の新法主臺下が今年の春、越前橋立の別院て親鸞聖人の六百五十回忌を營まれました節、夫れへ參詣せられて、其時にお作りになつた俳句てあります。

勿體なや祖師は紙衣の九拾年

私は歌や俳句の事は一向解りませぬが、住田氏より此話を承はつて大層有り難く拜聽致しました、實に何とも言へぬ程深く感じたのてあります。私は未だ嘗つて此方より御願ひして、新法主台下に書をかいて頂かうなどとは思ひませぬてしたが、今回は餘りに有り難かつた故、紀念の爲めに失禮てはあつたが其御句を一枚御揮毫を願つて參つたのてあります。又之は別の話てあるが今年の春大谷派本願寺に金の入る事があつて諸國の老弱男女が我れ先きに寄附を爲した、中には自分の衣類を脱ぎて差出したり又自分の簪を賣つて献上した者も澤山に有つたといふ事てある。どういふ譯か今年は信徒一般に信仰上深く感じた事が有つたと見え、皆んなが非常の勢て自分の所有物を割いて迄も應募した相てあります。丁度此の時或る田舍娘が親に連れられて帶を買ふ爲めに京都に來て居つた。諸國の信徒が非常の勢ひて本山へ寄附すると聞いて、夫では自分も今帶を買ふことは入らぬ、帶は此次ぎて善いからどうか其金を本山に差上げ度いとて、遂に其金を寄附して行つたさうてある。處が此事が新法主臺下の耳に這入りて法主も非常に感ぜられて、早速自分の着て居られた白衣を脱いで本山の費用の方へ差出された、大方羽二重か何かで作つた白衣であつたてせう。其時從者の者が夫れに懸けて有つた襟をはづして其襟を頂戴し、之を幾つかに切つて紀念の爲に夫へ發句をお願ひした。其時は蕪村の句て

卯月八日死んて生るゝ子はほとけ

と言ふのて有つた相てす。私には俳句は少しも解らぬが、此句も先きのと同じく實に有り難い。此の二つは尾張での話てある。

住田氏は非常に「求道」を喜んて下されて、遇ふ人毎に「求道」の事を談して居て下さる。「求道」に本願力を書き出してより殊に深く本願力にお感じ下されたのだ相てあります。勿論住田氏は名高き宗學の學者て此の方面には從前より研究の深い方てありましたが、私は今度お目にかゝりて、如何にも「求道」の事を御談し下されてある事の著るしいのに驚きました。殊に熱田には氏の御盡力で出來上つた和順會といふ會がある、其會でお話した時の如きは、其發起人のやうな方が、まだ若い方てあるが非常に信仰に御熱心で、私のお話する前に開會の辭のやうの事を話された。初めは「人生は何うしても信仰でなけにや行かぬ」といふやうの事を話して居られたが、其中に泣けて來て何うしても話せぬ、唯演壇の上で泣いて居られる。其處に集まつて居る老弱男女は此の樣子を見て誰も頭を上げる者が無い、皆感に打たれて稱名念佛して泣いて居るといふ樣な有樣てありました。全體此地方は昔から信仰の深い處てありましたが、併し從來は餘程習慣性になつて居つて、此程に活きた信仰では無かつたのてある。私は實に氏の化の著しるしきに驚いた事てあります。

私も二日間の間は晝夜休み無く話させて頂いた。殆んど寸暇なき有樣て有りましたが、少しの疲勞も感じ無い、實に有難き御緣て有りました。二日の夜行列車で尾張を立ちまして京都へ着いたのは三日の朝、未だ薄暗い頃てした。宿へ着きまして早速新法主臺下にお伺ひを致しまして、色々お話申上げた。殊に親鸞聖人が聖德太子の和讃を作くりて太子の御恩德を非常に喜ばれた事から、又其和讃の奥書に在る二十句の偈文は聖德太子が善光寺の如來へ差上げられた御書面であることを此夏長野て發見した事なども、お話申上げました。茲に持つて參つた書物は、「法林墨華」といつて、親鸞聖人を始め、御代々の善智識方等の眞筆を石版に摺つて集めた者てある。此の書の中に其御和讃の親鸞聖人の眞筆の一片が載つて居る、奥書の御眞筆も載つて居ります。和讃の方は茲に載つて居るのは

墓所を黙しをはりき、　われ入滅のそのゝちに、
四百三十餘歳に、　この記文は出現せむ。
佛法興隆せしめつゝ、　有情利益のためにとて、
かの衡山よりいでゝ、　この日域にいりたまふ。
上宮太子とまふすなり、　つのくにわたのへの東の、
樓のきしの上に宮ありけり、その御所にまします、
ゆへに上宮太子とまふすなり。
廐屋門の皇子とまふしけり、皇后御まやに御遊ありけるに、そのところにしてむまれさせましますによりて、むまやとの皇子とまふすなり。

の四首て、此は和泉國貝塚の願泉寺に在る相てある。又奥書の方は之と離れて加賀の專光寺の秘藏になつて居る相てす。茲に出て居るのは其一端て

我身ハ救世ノ觀世音、　定慧契女ハ大勢至、
生ニ育スル我身ヲ大悲母ハ、　西方ノ教主彌陀尊ナリ、

爲レニ度ニ末世ノ諸ノ衆生ヲ、父母所生ノ血肉ノ身ヲ、
遺シ留ム勝地ニ此廟嶺ニ、　三骨一廟三尊位サリ、

の八句であります。私は今度京都に行つて此の眞筆の有る事を確かめる事が出來て、彌々親鸞聖人が聖德太子を慕はれた事やら、又二十句の偈を非常にお喜びなされた事を一層明らかにさせて頂きました。聖人が聖德太子をお慕ひなされたことは講話にも雜誌にも既に度々申しますが、私は實に有り難い事だと思ひます。此事を新法主に申上げました處が、新法主も非常にお感じなされて、其和讃を是非に寫して置き度いとのお話である。夫で私は其和讃を差上げて參つたやうな次第です。夫れから私は先きの發句「勿體なや祖師は紙衣の九拾年」の御句がどうも難有い、紙衣といふは紙で作つた着物で、中に蒲の穗か何かを入れた物だそうですが、祖師親鸞聖人は夫れ程に苦勞して九十年の間傳道して下されたか、と思ふと實に有り難い。其處で一枚御眞筆をお願ひした處、早速御承諾下されたのが今茲に懸けて置く處のものであります。

今度京都に參つた用事は本山に教學上の會議が有つた爲めでありますが、之は信仰上より見ては左程の事でもありませぬ。けれども之が御緣となつて此度は其外に猶ほ色々の有り難い事に出遇はせて頂きました。三日の日新法主の許から歸つて來ると、國の母親が來て待つてゝ下さる、其日は終日母親と話しました。其中に京都にある信仰の友達も段々に訪ねて下された。四日の日は兼ねてより母が希望てあつた嵯峨の釋迦如來へ母と共に參詣させて頂いた。之はどういふ事か嵯峨の釋迦如來へ參詣する事と、磯長の聖德太子の御廟へ參詣する事が、私の母が子供の時よりの宿願であつたのです。私は以前に一度參拜した事も有つたのであるが、今度は殊に難有くおがませて頂いた、即ち名高き五臺山淸涼寺の釋迦佛である。法然上人が道を求められた時七日七夜の參籠を爲されたも實に此の釋迦佛であります。

猶ほ一つ私の有り難かつたのは、今度本山の會議が畢はると、皆んなが議事堂其他で演說をする筈になつて居つたのである。その演說會はたしか本日京都で開かれてある筈です。然るに私は今日の講話があるから是非夫迄に東京へ歸らねばならぬ、處が豈計らんや、之は派內の事であるから皆さんには感じが少ないでせうが、今回は本願寺の內ちわの會、—花の間の會と言つて、御輿の御連枝方等が集まりになつて、內佛に於てお勤めがある。其席に於て私に話をせよとの事でありました。私は外面では隨分話をして居りますが、未だ本願寺の內部でお話し申上げたことは無かつた。私は非常に有難く存じまして四日の日にお話し申上げた。四日は丁度先法主の御母御の御命日に當るのだ相であります。私は矢張り每にお話する本願力の御惠を石童丸の例から段々とお話し致した。僅か一時間の間であつたが、充分心を盡して話して參つた積であります。夫から翌五日即ち昨日の朝は大谷へ參詣をしました。昨日の會議は隨分重要の會議であつたが、私は午後の汽車で立つ考であるからゆつくりして居る事が出來ぬので、唯私の意見丈を述べて宿へ歸つて來ると發車迄にもう二十分しか無い。母と共に早速停車場にかけつけて乘車したやうな次第であります。新橋へは今朝の七時五十分に着く筈の處か、

遲れて八時過ぎになりました。其爲めに皆樣に大層お待せを致しまして實に相濟まぬ次第あります。

以上は今回の旅行談の一つである。何分日數が少くて、且つ暇の無い旅でありましたが、又夫丈廣大の御緣に遇はせて頂いて、實に有り難く思ひます。去りながら時間がいつも切迫して居るもの故、荷造りを急いだり、車夫を叱つたりして、一面非常に信仰を喜びながらも、一面には大に人を煩はして居る。之に氣附くにつけても自分の力の駄目なる事が知れて彌々喜ばせて貰ふより外はありませぬ。昨夜汽車中での如き、私が眠らうとして居ると一人の人が君は近角君で無いか〳〵と起される、誰かと思ふと高等學校時代の傳友である。其人は今は名古屋で醫者を開業して居るとの事で、私に話さるゝには、「まだ君の著書は見無いが君が信仰に熱心せらるゝ事は此頃外から聞いて、自分も大に感じて居る一人である。自分は將來斯く〳〵の考で以てやつて行かうと考へて居るが之てはどうであろう。」などゝ非常に眞地目な考を話される。私は之に對して「結局人間は自分の不完全に氣が附いて絕對の大悲に安んずる處が大事である、人生に絕體の惠みが在る事を一つ氣附かぬことには眞實の仕事も出來ぬてある。」と、丁度岐阜から名古屋迄僅かの時間であつたが、互に食事しつゝ打ちくつろぎて話し合つて別れた事てありました。そうして家に歸へつて來ると斯の如く皆さんが集まつてゝ下さる、私は實に有り難い。之を思ふに就けても佛の本願力が無かつたなら人生の事何事も皆駄目なのである。自分で如何程急き立てたり、如何程氣を揉んだ處が人間の力では人生の事は如何とも爲る事が出來ぬ、其處を佛陀は斯の如く善き樣に導いて下さるのであります。

私が京都に行く度每に、求道會の無漏田君をはじめ熱心の方々は屹度訪ねて下さる。中には江州から態々求道の爲め出て來られたやうな人さへあつた。其人は吉田と申す人で、繪を持つて來て私に讃をせよとの話である、私は夜おそくなつてから之に讃を入れたやうな事もあつた。歸る時も途中迄同車した次第です。又此學舍を開いて一番の最初に這入つて下された何刀田君も訪ねて下さる、昨日の言葉で、今日は同君の小供の誕生日だとの話で、之にも聊か祝意を表する事が出來ました。斯くの如く色々申すのも、要するに世の中の事は喜べば皆惠ばかり世の中となるのである、何を喜ぶのかといへば唯此の廣大なるお惠みを喜ばせて貰ふ丈けなのであります。

二

偖て今日の題は「觀佛本願力」と出して置きました。上來申上げた長話も畢竟は佛のお惠みの力であるから、矢張り「觀佛本願力」に外ならぬのである。けれども此からしばらくの間は此の題に就きて本願の御力を味はせて頂かうと思ひます。此の題は何處から來たかと言ひますに、此は親鸞聖人の每にお喜びなされた御文で、天親菩薩の淨土論の中にある御言葉である。今の「法林墨華」の中にも此の語が出て居ります。全體は四句であつて、「觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海。」「佛の本願力を觀ずるに、もう遇ふて空しく過ぐる者なし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ。」といふの

てある。親鸞聖人の御眞影の上には此の四句を以て讃にした位て、之て見ても如何に平素聖人が此の文を喜びなされたかが解かるのである。又聖人は此の文を和讃になされてある、

本願力にあひぬれば、　むなしくすぐるひとぞなき、
功德の寶海みち〳〵て、　煩惱の濁水へだてなし。

今の四句を和讃にさられたものである。

其處て佛の本願力を觀ずるにといふ觀の字は云ふ迄もなく私の名前の觀の字である。親鸞聖人は非常に此の觀の字をお喜びなされた。聖人の御意ては觀の字は信ずる意味になつて居つたのです。普通には無論觀察の意味の觀てある、けれども聖人には夫れが信の意味てあつた。夫は何うかと云ふに聖人の『愚禿鈔』の中に善導大師の「願入彌陀海」といふ言葉を引いて「觀入彌陀海」と書かれてある。即ち觀の字に改めてあるのてす。しかし私も長らくの間或は文字の書き違ひて無いかと疑つて居ました。處が此の夏越後長岡妙宗寺へ參つて見ますと、此のお寺に存覺上人が親鸞聖人眞筆の「愚禿鈔」を其儘お寫しなされたものが傳はつて居る。之を拜見致しますと「觀入彌陀海」とある側に態々傍註を入れて「觀の字は東大寺覺壽僧都觀經義に之れ有り、世の流布には願の字なり」と記してある。之を見ると聖人は考あつて觀の字に改められた事は確かてある、聖人か特に觀の字を非常にお喜びなされた事は之て明らかてあります。觀ずるとは即ちみるてある知るのてある、觀知するのてある。心中に如來本願力を觀知する事てあります。

猶ほ實際に就きて觀の意義を申しませう。觀の字の一番始めは觀經てあります。觀經に阿闍世王が自分の母韋提希夫人を牢屋に幽閉した。其處で韋提希は牢屋の中で自分の不幸を泣き悲みて救ひを釋尊に求められる、此は皆さんが既に御承知の通りです。其時釋尊が韋提希夫人に仰せられた御言葉に、

爾の時世尊韋提希に告げ給はく、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る事遠ほからず、汝當さに繫念して諦かに彼の國の淨業成じ給へる者を觀すべし。

とあります。即佛韋提希に仰せらるゝには、「汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る事遠ほからず、今現に此の席に來てゝ下さる、汝の頭の上に汝を眺めて居て下さるては無いか、汝當に念を懸けて諦かに其のみ佛を觀ずべし」と敎えて下されたのてある。觀の字の一番初めは茲に出て居るのてあります。處て此の「彼國の淨業成じ給へる人を觀すべし」との御文に就きて、親鸞聖人は之を如何に仰せられたかと言ふに、茲は實に有り難い。即ち「化身土」卷の中に

淨業成じ給へる人を觀ずべしとは、本願成就の盡十方无碍光如來を觀知すべしとなり。

と有るのてす。丁度初めに申す觀佛本願力の味に當るのてあります。本願成就の盡十方无碍光如來——廣大なる大悲を以て本願を御成就下された阿彌陀佛、其佛の惠は盡十方に充ち渡つて少しも碍はる處が無い。たとへ韋提希夫人の如く牢屋の中に居らうとも、如何なる不運に居らうとも「阿彌陀佛此を去ること遠からず」て、如何なる場所にも充ち〳〵て居て下さるのてある。不運てあるとか辛いとか言ふのは、夫は皆自分の心から爲ることて　佛のみ慈悲は盡十方に到らぬ隈は無い、

さればこそ盡十方无碍光如來の御名前も出て來たのてある。

先程一寸お目にかけましたが、茲に在るのは有名なる綱島梁川氏が終焉の部屋の寫眞てす。氏は晩年に至て非常に親鸞聖人を喜ばれた。此の寫眞ても解かる如く氏の部屋の空の方に懸けてあるのは親鸞聖人の御眞影てある。之は私の贈つた處の物てあるが、此の御眞影の上にも聖人の眞筆て、「歸命盡十方无碍光如來、釋善信」と書いてある。氏は此「盡十方無碍光如來」といふ言葉を非常に喜んて下さつた。又氏の晩年の文字を見ると到る處に法悅々々と喜んて居られる。聖人の和讃に

慈光はるかにかふらしめ、　ひかりのいたるところには、
法喜をうとぞのべたまふ、　大安慰を歸命せよ。

氏が法悅を喜ばれたは茲の味てある。盡十方无碍の御光りの到つて下さる限り、人は如何なる境界に在つても法喜法悅の心を得させて頂く事が出來るのてあります。

處て我々は唯此の盡十方无碍光如來、盡十方に行き亘つて極はまりのなき光明といふ文の御言葉て頂くと、佛は廣大の慈悲てある、无碍の光明てあると迄は思はせて頂くが、何となく散漫な感じになる、我々は廣大なる慈悲のお照らしに預かつて居るといふ極く溫い感じの方は頂く事が出來るが、佛陀の強き大悲の切なる御心の方は少し解かり兼ねる。其處て其の切なる佛の大悲心を表はして下されたもの即ち本願てあります。親鸞聖人が本願成就の盡十方无碍光如來と、特に本願の文字を加へられたも此の故てある。原始佛敎の上より言つても、釋尊が一切衆生を平等に哀れみて下された、其の廣大の御惠みの根本即ち本願てある。明らかに本願とは書いて無くても佛陀の我々に向つて下された慈悲心、十方に亙れる御心は、唯散漫と佛は光てある力てあるといふ如き概念や思想ては無い。佛の大慈悲心即ち本願てある。故に本願は佛が我々に向つて下さる根本の親心てある。佛は我々の測られぬ法性法身の境界より方便法身の形を顯はして下された。又佛の光明は竪に三世を貫き横に十方を蔽ふ大光明てある。けれども斯の如き偉大なる御力は、我々は何の點より之を喜ばせて頂くのてあるか。斯の如き御力、御光明を佛は何が故に我々に蒙らしめ給ふのてあるか。歸する所は唯佛の本願の親心一つより外は無いのてある。親鸞聖人が「敎行信證」中に於て專ら此本願力を說き下されたも此の故てある。我々には本願を基として佛の御惠を頂く外に道は無い、實に本願は我々に對しての切なる佛の御親心てあります。

今言ふ觀經の事實に就きて聖人が、「本願成就の盡十方无碍光如來を觀知すべしとなり」と仰せられたも茲の味てす。茲に佛の惠みがある、惠みは佛の本願てある、此の切なる佛の本願の慈悲が在るぞといふ事を「本願成就の盡十方……觀知すべしとなり」と仰せ下されたのてある。觀知するとは直觀信知することてある。佛の本願に對して一點の疑ひなく心に喜ぶ事が觀知てある。即ち聖人の喜ばれた「觀佛本願力」の味になつて來るのてある。又韋提希夫人が獄中て法を喜ばれた事實抔も要するに「觀佛本願力」てある。彼の佛の本願力を觀ずるに、もう過ふて空しく過るものなし」、たとへ獄中に在りても一度び佛の本願の親心に氣がつけば、如何なる者ても中

心深き慚愧を生じて廣大の御慈悲に感泣せざるを得ぬ。實に佛陀本願の御慈悲は今此席でも如何なる國にありても隔て無く我々を憐れみて居て下さるのであります。

偖て然らば其本願とは何かと言ひますに、大无量壽經の中には四十八の本願が說かれてある。玆に四拾八とあるは佛陀が我々に向ひて種々に憐れんで下さる其思ひの數を數えられたものである　衆生が斯くの如く苦しんで居るから斯の如く爲てやり度い、此の點に惱んで居るから斯く〳〵に爲てやり度いと、佛陀は我々の苦惱を見て千々に心を碎いて下さる。其の御心を數え立つれば啻に四十八位ではなく實は無量であるが、要するに我々を理想的の世界に理想的に住はせてやり度いとの切なる大悲の本願である。即ち佛は其の爲めに淨土を造つて我々に欠けたる點を凡て補つて下された。其一々の御心を數えて四十八となつたのである。佛は斯くの如く多數の御意を衆生に與へて下さるのであるが、扨て衆生は斯くの如き廣大の御與へを如何にして受くる事が出來るのであるか。又佛は如何にして之を我々に與へて下さるのであるか。即ち佛心を與へらるゝ處は何處であるか。親は子供の爲めに種々に心配して色々の物を與へて呉れる。けれども子供は唯此等種々なる親の與物を受けて居る丈けでは、未だ眞に親の惠みに感じたとは言へぬ。其の斯く迄我を哀れんで下さる親の親心を頂かねばならぬ。數多き佛の本願も結局は何處で與へ下さるかといふに、あゝ佛は斯く迄我を哀んで下さるのであつたか、其の佛の御親心が有り難いと一念心の底より頂いた時が、凡ての御惠みを頂いた時である。親より種々の賜物を受けて居つても親の其の親切心を頂かぬ事には何の效も無い。數多き佛の本願の中第拾八の本願は何であるか、佛陀の親は十方の衆生に對して皆一樣に斯の如き大慈悲心を持ちて居て下さる、どうか衆生をして此の親心を知らしめ度いとの重ねての御親心が第拾八の願であります。故に第十八の願は本願中の本願である。此の本願を一つ頂けば同時に他の凡ての本願を得させて頂く事が出來るのである。親鸞聖人が專ら他力本願をお說き下されたは此の最後の御親心をお說き下れたのであります。夫で自力他力と言ふのもごく切りつめて申せば此の廣大なる大悲の親心を知ると知らざるとの別である。佛は每に此の大悲を以て我々に向てゝ下さる、我々は唯一念此の佛の親心に氣が附けば如何なる者でも我を忘れて其慈悲に感激せざるを得無い、此の時刻の極促が信仰の一念です。然るに此の廣大なる本願に對して、佛の親心に眼をつけずして我々の方より計らひの心を以て之に向はうとする、自分で色々苦しんで佛陀にすがらうとする、此間は未だ眞實に佛の親心が解らぬのである、之ではいつ迄も駄目であります。

此は此間より度々お話する處であるが、南无阿彌陀佛の六字に就いて言つてもさうである。南无は歸命である、歸命は佛にすがる事である、故に南无阿彌陀佛は阿彌陀佛の親にすがるかといふ事になる。處で如何に阿彌陀佛の親にすがるかといふ點に於て、其のすがる時に佛の御親心を見ないで、唯苦しい故に佛にすがり度い、心林しい故に信仰を求め度いと、唯此方から佛を目かけて名を呼び求めてる間はどうしても安心の時は來ぬのである。さうでは無い、「南无は歸命なり又此れ

發願廻向の義なり」である。發願廻向とは佛より發願して我々の方に向けて、下さるが發願廻向である。若し當り前に言へば南無は歸命、歸命はすがるのである、實に南無阿彌陀佛は此方より願を發して阿彌陀佛の方へ向ける事となる。南無とは此方より佛に向ふ事であると解するが、普通一般の解釋である。處が親鸞聖人は夫を引き直して、發願廻向とは衆生より佛に向ふにあらずして、佛より衆生に向けて下さるの心であるとお示し下された　如何に南无阿彌陀佛々々々々と此方より佛の名を呼び求めても、又如何に觀念工夫を凝らして修養を重ねても、此方から佛陀に向ふ考で居る間は何うしても最後の安心は來ぬのである。其處を親鸞聖人は如何に仰せ下されたかと云ふに、即ち『行卷』の中に

南無の言は歸命なり(中略)歸命は本願招喚の勅命なり、發願廻向と言ふは、如來已に發願して衆生の行を廻施し給ふの心なり

とお示し下された。即ち南無阿彌陀佛を佛の本願に引き直して下されたのである。我々は常に人生に躓いて佛陀に向ふと言つて居る、けれども人生に躓きて佛陀に向ふのでは既に遲い、佛は我々が人生に躓く前より、佛既に發願して我々に對し衆生の行を廻施して居て下されたのである。佛が向ふより此方へ向てゝ下されたのである。歸命は我々が佛にすがるのでなくして、佛より我々を呼びかけ下さる本願招喚の勅命である、御呼聲であつたのである。南無は歸命である、又是れ發願廻向の義である、發願廻向は此方より發願廻向するに非ずして、佛廣大なる本願の願心より此方に向つてあらゆる惠を廻施して下さるの意味である。故に南無阿彌陀佛の六字は惠みの親より廣大の慈悲本願を以て我々苦惱の衆生を哀はれみ惠んで下さる事となる。玆の處は度々申しますが實に他力信仰の眼目である。

玆で一寸氣着きましたが、私は初より學舍を「求道學舍」と名け、又雜誌を「求道」と名けて居る。勿論我々は大に道を求め無くちやならぬが、求める我々の方に力を入れずとも、求むる佛既に我々を求めて我々に向つて居て下さるのである。此點は大に皆さんに御注意を願ひ度いと思ひます。一體此求道といふ文字を私は何處から以て來たかといふに。大無量壽經の中に阿彌陀佛が未だ法藏比丘と申せし時。世自在王佛の御許に於て我々の爲めに本願を御發起下された。其時に法藏比丘が世自在王佛に向つて其願を成就する爲めの淨土の行を御尋ねなさる。之に對して世自在王佛がお答へなされた御文がある。其中より私は此二字を拾つたのである。其御文は次の如くであります。

譬へば大海を一人升量せんに、劫數を經歷して尙ほ底を窮めて其妙法を得べきが如し、人心を至し精進にして道を求めて止まざる事あれば、みな當さに剋果すべし、何れの願か得ざらん。

之である。而して其願を御成就下されたのが即ち先程よりいふ本願である。佛が我々を救ふが爲めの本願をお起て下されて、佛の方に於て其爲めに種々に道を求めて我々の方に向つて下さる、佛の求道即ち本願である。私が初め此文から「求道」と名けた時は、左程深くは感じませぬでしたが、今思ふ

と佛既に發願して衆生の爲めに種々に道を求め行を修して下さる。求道は佛の求道で、求道やがて佛の本願でありました。

而して一度び此の佛の本願力に感ずれば如何なる者でも皆我を忘れて佛廣大の慈悲に感泣する。所謂「佛の本願力を觀するに、もう過うて空しく過ぐる者無し」である。空しく過ぎようとしても此の切實なる本願の親心に氣が就いては、もう空しく過る事が出來ぬのである。本願力の佛陀を向ふの方で靜かに待つて居て下さる佛のやうに思ふて居ては實に勿體無い。又佛は我々の到るべき最後の境界であるなどゝ思ふて居るは非常なる間違である。佛陀は日夜に廣大なる願力を以て絶えず我々の上に向うてゝ下さるのである。我々は此の切實なる願力のお力に追ひ立てられて最後に終に氣が就いて攝取せらるのである。「本願力にあひぬれば、空しく過ぐる人ぞなき」、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなし」而して最後に此の本願力に氣が着くなり忽ちに諸有る功德を滿足させて下さるのであります。

三

猶ほ叮寧に言ふならば此の本願力は親鸞聖人が淨土眞宗をお建て下された基礎である、此本願力を外にしては他力信仰は成り立ち得無いのであります。抑も發願廻向とは再々申すが如く、佛陀が哀々たる大悲心より衆生に對して發願して有らゆる行を廻施して下された事實である。本願は即ち佛が衆生に對せられた御約束である。聖人は廻向の言葉を佛の方にお用ゐ下された、之は殆んど在來の佛敎の方角を一變したものと言つてよい。普通在來の佛敎では廻向の言葉は衆生が佛に向ふ時に用ゐて、此方より佛に近づかうと色々勉める、其行を意味したるものである。然るに聖人は佛の方より絶對の惠みを廻向して下され、佛の方で色々衆生の爲めに働いて下さると示された。全く在來の佛敎の方角を一轉せられたものである。而して斯くの如く方角を一轉せられたは何によつてゞあるか。唯此本願力の事實に御氣着きなされたからである。本願力は實に佛此の世に出興し給ひたる根本本意であります。

夫で先きにも申す如く佛は四十八願成就して理想の淨土をお造り下された。そうして其淨土に到るには我々の力にあらずして、佛の方より其淨土に來させる可く我々の方へ廻向して下さるものである。毎に申ますが天親菩薩は「淨土論」を作りて其劈頭に仰せられてある。

世尊我れ一心に、盡十方無碍光如來に歸命したてまつり、安樂國に生れんと願す、

と。而して夫より此一心から現はれ來る可き五念門の行、即ち禮拜、讃嘆、作願、觀察、廻向の五念門をお擧げなされてある。之は丁度一の拳より五つの指を出すが如く、信仰の一心より自然に現はれ來る可き五の行なのである。中ち禮拜、讃嘆、作願、觀察の四つは自利の行であるが、最後の廻向は利他の行で、普通では此方より向ふに對しての行である。處が親鸞聖人は此五つを全然佛の方に附けて、佛が衆生の爲めに本願大悲の一心より修して下さる佛の五念門であると御覽なされたのである。最後の廻向の如きは聖人は如何にお讀みな

されてあるかといふに

云何か廻向し給へる、一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首とし給ひて大悲心をば成就し給へるか故に。

一體は佛の方に對して此方より廻向し作願するの文を、全然逆に讀んで「云何か廻向し給へる」「心に常に作願すらく」とお讀み下されたのである。之は最も喜ぶ可き點であります。自體我々は若し此方から廻向しなければならぬ時には何程の廻向が出來るであらうが、現在佛の大廻向を頂いて信仰を喜びながらも善と言つては一善も出來ぬ我々である。然るに聖人は「一切苦惱の衆生を捨てずして」と言つて下さる、實に慈悲極まる佛の御親心である。又此の處を和讃では

如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、
廻向を首としたまひて、　大悲心をば成就せり。

と仰せ下された。以上は天親菩薩の淨土論の廻向を聖人が如來廻向にお讀み下された事を申したのである。而して斯くの如くお讀みなされた根本は矢張り本願力廻向から出て來たのであります。

猶ほ進んで申しますに、親鸞聖人が斯くの如く如來廻向をお喜びなされた初まりは曇鸞大師の「淨土論註」が元である。茲の處をもう少し申しませう。今もいふ如く天親菩薩の五念門の中、禮拜、讃歎、作願、觀察の四つは自利の行で、最後の廻向は利他の行である。其處で一念門の事を自利利他の行と謂つて居る。一寸考へて見ると初めに自利と言つたら、次も之れに對して他利と言ひ相のものである。然るに何故特に自利と言つて次に他利と言はなかつたかに就て曇鸞大師は「論註」に於て此點を明らかに示されてあるのです。其の文は次の通りである。

論に五門の行を修して、以て自利利他成就し給へるが故にと言へり、然るに愛に其の本を求むれば、阿彌陀如來を增上緣と爲すなり、之を他利と利他と談ずるに左右あり、若し佛よりして言はゞ宜しく利他と言ふべし、衆生よりして言はゞ宜しく他利と言ふべし、今將に佛力を談ぜんとす、是の故に利他を以て之を言ふ。云々

則ち他利とは「他に利せらるゝ」て、之は衆生より佛に對して言ふ可きである、衆生は佛に利せられて佛の本願力の故に往生させて頂くのである。然るに今は佛力を談せんとするのであるから何うして茲は利他で無けねばならぬ。利他は「他を利する」のであるから、佛が衆生を利して下さるのである、と斯く仰せられたのである。所謂他利利他の深義といふは茲であります。其處で此の他利利他は畢竟何を言はれたものかと言ふに、外は無い、唯天親菩薩の本願力廻向を一層明かにして下されたものである。即ち天親菩薩の本願力廻向を最も充分に發揮して下されたが、曇鸞大師で。其味はひを最も御喜びなされたのが親鸞聖人であります。

親鸞聖人が本願力廻向をお喜びなされた事は今更言ふ迄も無いが、蓮如上人の「御文」の中には次の如くにも仰せられてある。

故聖人のおほせには親鸞は弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ、そのゆへは如來の敎法を十方衆生にときき

かしむるときは、たゞ如來の御代官をまふしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の敎法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり、そのほかはなにををしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり、さればとも同行なるべきものなり、これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしつきておほせられけり。

聖人一代の御敎化は唯此の彌陀の本願をお敎え下されたものである。本願の下には弟子も無く師匠も無い、我も人も此本願の下に一味同朋であるとの御喜である。聖人一代の御敎化の骨目たる「敎行信證」も皆この本願力一つより生れ來つたものである。此事は機を得て一度ゆつくり申して見度いと思つて居ります。之は「敎行信證」の各卷の初めに先づ本願の文を擧げさせられたを見ても解かる事である。如來の本願力を最も遺憾なく發揮下されたが即ち親鸞聖人であります。聖人は自から親鸞と仰せられた。言ふ迄もなく天親菩薩の親の字と、曇鸞大師の鸞の字とを合せられたものである。之を見ても聖人が如何に二師の本願力廻向をお喜びなされたかが推察せらるゝのである。勿論夫以前に法然聖人の許に在つて善導大師の念佛をお聽きなされた頃には或は善信と呼び、又は道綽大師の綽の字と源空上人の空の字を合はせて綽空とお呼びなされた事もある。けれども晩年に於ては專ら親鸞と稱へてお出になつたのである。

「佛の本願力を觀ずるに、もう遇うて空しく過ぐる者なし」本願の御力が偉大なる故に、一度之に出遇つた者は空しく過ぐる事が出來ないのである。「もう遇うて空しく過ぐる者無し」とは本願の御力が強い處から自然に生ずる結果であります。然らば本願を信ぜぬ者はどうなるかといふに、信順を因となし疑謗を緣となし、疑ふ者も謗る者も必ず最後迄導いて、果し遂げずば措かぬとの本願である。此の中には十方衆生一人も洩るゝ者は無いのである。況んや初めより信順する者は佛直ちに攝取して下さるのである。「能く速に功德の大寶海を滿足せしむ」扨て一度び此の佛の本願力に氣が着けば人生は到る處凡て佛陀の御惠みばかり、速に一切の功德を滿足させて下さるのである。

先日も高等師範で次のやうな話しをして來ました。有限の數に有限の數を加ふれば矢張り有限の數である。有限を絶對にするには何うしても絶對を以て來ねばならぬ。其と同じく我々も相對の人間たる以上は、如何程修養工夫を重ねた處が矢張り相對を脫する事は出來ぬのである。我々が絶對に到達するには茲に何うしても絶對の力を藉りて來ねばならぬ。世間に色々の法があり、佛法内にも又色々異つた敎がある。何れも皆結構であるが、惜しい哉夫等は皆絶對で無い、小善根小因緣である。我々は茲に何うしても佛より本願力の絶對力を加へらるゝにあらずんは、遂に絶對に到達することは出來ぬのである。阿彌陀經の中には

小善根福德の因緣を以て彼の國に生るゝ事を得べからず

と說かれてあります。我々の自らする善は凡て小善根福德因緣である、小善根福德因緣では世間出世間を問はず皆な駄目である。南條博士の話に、博士が英國に遊學してマクス、ミユーラー先生の許に居られた時、マ師に對して「小善根福德

因緣を以ては彼國に生るゝ事が出來無い」といふことを話されたら、マ師は言下に「御前は何をいふ、苟くも釋迦が小善根福德因緣を駄目であるとそんな事言ふ筈はない」とて、遂に本當にせられなかつた相である。之はマ師が未だ本願念佛の大善大功德を知られ無かつたからである　佛陀の本願の絶對の惠みに比べたら、我々のする小善根小福德位は殆んど話にならぬのである。

處が佛陀本願の絶對の惠みに向ふ時は、我々の自分の力、小善根福德因緣は自ら無くなる、消えて仕舞ふのです。初めにも申しましたが私は今度京都に參つて母に從つて其處此處と二三箇所を散歩した。すると直ぐに自分は一つ角孝行を爲たやうな氣になる、之は大に可かぬのである。偶々母を伴つて少し位ひ散歩したとて夫が何であるか。然るに一度び佛の絶對の慈悲に向ふ時は、我々の一擧一動皆な佛絶對の慈悲より與へらるゝのである。我々のする事爲す事卯の毛の先程も佛陀の御惠みならざる所は無いのである。自力の小善根福德因緣が往生の爲めに無益で有つた代はりに、信仰に入れば今度は功德大寶海を滿足せしめらるゝのである。信仰は此佛陀の大悲心に氣が着いたのが信仰である。其の氣の着く刹那に我々の空しき心に絶對の功德が滿ちて下さる。我々の空しき心に――否な私如きは空しき位では無く、實に罪惡の塊りである。昨日も京都を出立する時に私が急いで宿へ歸ると母親がまだ荷物をまとめて置かれぬ、母親は私が居無い爲めに荷物の加減が解ら無かつたのである。夫を私は氣が急いて居た爲めに思はず母親に不平を洩して仕舞つた。一方には折角母親を伴れて散歩しながら一方には腹を立てゝ一邊に之を壞はして居る、何にも成らぬ。汽車中で熟々考へて見るに、實に私程罪の深い者は無い、初めは共に喜んで居ながら何時も終には腹を立てゝ居る。善く無いのみか、大變惡い。何時迄も腹を立てゝ居る。私が初めに申した道中談丈では、五日間の間全く慈悲の中につかりづめにして居たやうであるが、一面には斯の如く汚ない事ばかりである　或は俥に乘つて俥夫に充分の勞働を爲せて置きながら、猶ほ走り方が足り無い位に思つて居る。調べて來れば實に懺悔すべき事ばかりであります。

併しながら茲が實に有り難い。斯くの如く自分は眞に惡人であると氣着かせて頂くと、少々の今迄の善根は其の爲めに一度に皆な取り上げられて仕舞ふ。今迄は自分に持ち物が有つた爲めに喜べといつても喜ぶ事が出來なかつた、今は自分の煩惱を知らせて貰うた爲めに、自分の持ち物が無くなつて、身も心も輕ろ〳〵と喜ばせて頂く事が出來るのである。去り乍ら喜べる今は自分が絶對に善くなつたのかといへば、否決してさうで無い、自分は昔にかはらず矢張り絶對に罪惡の塊なのである　けれども其絶對罪惡の塊りなる自分も今は佛陀大悲廻向の御惠みによりて、遺る隅なく滿足させて頂く事が出來るのである。皆さんが能く御存知の御和讃に、

盡十方の无碍光は、　無明のやみをてらしつゝ、
一念歡喜するひとを、　かならず滅度にいたらしむ。
無碍光の利益より、　威德廣大の信をえて、
かならず煩惱の氷とけ、　すなはち菩提のみづとなる。

罪障功德の體となる、　こほりとみづのごとくにて、
こほりおほきに水おほし、さはりおほきに德おほし。

罪障を功德の體として下さるのである。我々の罪が無くなるといふ譯では無いが、一念佛の大悲に氣が着くなり、其罪が深ければ深き丈け彌々喜びも深い。あゝ自分は實に惡人であつたと氣づくと同時に今迄の惡の氷を忽ち喜びの水と轉じかへて下さる、夫程に腹立てる私が又心底より喜ぶ事が出來るのです。則ち、能く速に功德の大寶海を滿足せしめて下さるのである。又の御和讃に、

大願海のうちには、　智愚の波こそ無かりけれ、
弘誓の船にのりぬれば、　大悲の風にまかせたり。

之も本願力から出て來たのである。又「觀佛本願力」を和讃にして下されては先程も申すが如く

本願力に遇ひぬれば、　空しく過ぐる人ぞなき、
功德の寶海みちぬれば、　煩惱の濁水へだてなし。

「觀佛本願力」の文には煩惱の濁水の一句は無いのであるが、聖人は特に此の一句を附け加へて下されたのである。佛の本願力に遇ひ奉れば、衆生の煩惱の濁水は皆な忽ち消やされる、實に有り難い。又之を聖經の上で言ひますと「觀佛本願力」の文は先づ第一に願成就の文

あらゆる衆生其の名號を聞きて信心歡喜し　乃至一念せん、至心に廻向し給へり、彼の國に生れんと願ずれば即ち往生を得て不退轉に住せん

の御文に當る。之は本願の御文であるから寧ろ當るが當然である。又「功德の寶海を滿足せしむ」の處は大无量壽經の終り、

其れ彼の佛の名號を聞く事を得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん、當さに知るべし、此人は大利を得るとなす、則ち是れ无上の功德を具足するなり。

茲に當るのである。即ち佛の本願力に氣着いた事は、小善根福德因緣ではなくして大利を得るのである。无上の功德を具足するのである。能く速かに功德大寶海を滿足せしめらるゝのである。猶ほ一つ茲に最も有り難きは聖人が此文にある「則はち」といふ字を法則の則の字とお讀み下された事である。聖人は『一念多念證文』に於て宣はく、

則といふはすなはちといふ、のりとまうすことばなり、如來の本願を信じて一念するにかならずもとめざるに无上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益をうるなり、自然にさま〳〵のさとりをすなはちひらく法則なり、法則といふははじめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあつかること自然のありさまとまうすことを、しらしむるを法則とはいふなり、一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とはまうすなり。

第一に「則はち」といふ字を法則の則の字とお讀み下されたからが意外千萬である。けれども夫は先づ夫れとして、其法則を如來の本願であるとお示し下されたは實に有り難い。普通人間は人生の義理の法則に從つて行かうとして居るのである、然るに聖人は凡夫自力の計ひを去つて、如來本願の御計らひの大なる法則に任かせて行かうと仰せられるのである。私は此の法則の解を綱島梁川氏の生前に話した處が、氏も非常に

驚いて喜ばれた。私は又氏が非常に喜ばれた有樣を見て猶ほ更に、喜はせて頂いた樣の次第でありました。

で上來段々と述ぶるが如く他力信仰の要點は、唯佛の本願力の御親心に氣着かせて頂く一點にある。而して此の御親心に氣づかせて頂くなり、此の淺間しき貪瞋煩惱の身に、速に功德の大寶海を滿足せしめ、无上大利の功德を具足させて下さるのである。併しなから茲に一つ注意すべきは未だ信仰に入らぬ前、まだ信仰を求めつゝある途中に於て、此の功德の方に目を着くることである、之は非常なる間違てあります。初めにも申した如く功德を滿足せしめらるゝ事は信仰より來る自然の結果である。今日多くの人が道を求めらるゝ中には信仰を得て人生を完全に渡り度い、人格を修養し度いといふ考が先きに立つて居る人も尠なく無からうかと思ふ。併しながら此等の考は眞實に道を求むるのでは無くて、佛陀を方便に使はふと爲て居るのである。ごく切りつめて言へば、例へ極樂に行く爲めに信仰を求むるのでも、間違てある。極樂にやる、やらぬ、无上の功德を具足せしむる、せしめぬは本願の計らひ給ふ所で、我々の方で彼れ是計らう可き事で無い、我々は唯本願の大悲に氣づかせて貰ふことが肝要なのであります。

扨て一度び本願に氣づかせて頂くと、速に無上大利の功德を與へて下さる。之はいつか與へ下さる位の間ぬるき話ではなく、即刻速に與へて下さるのである。夜が明けてから日が出るのでは無く、日の出た時がやがて夜の明けた時である。

「あらゆる衆生其名號を聞きて信心歡喜し乃至一念せん」で、一念あゝ有り難いと心中に喜んだ時が直に即得往生である。即得往生とは其瞬間に、佛の惠みに入る事である。夫故親鸞聖人は前念命終後念即生とも仰せ下された。我々は光明名號の父と母との因緣によつて、一念佛の本願に氣づかせて頂くと同時に光明中に攝取せられ、攝取不捨の身として頂くのである、即ち前念命終、後念即生である。あゝ有り難いと氣づいた一念に光明の下に生くるのである。和讃に

超世の悲願ききしより、　我等は生死の凡夫かは、
有漏の穢身はかはらぬど、　心は淨土にすみあそぶ。

幾度拜讀しても有り難い和讃である　又昨日も「二門偈」を拜讀して行きますと最後に到つて實に有り難い御言葉がある。

釋迦諸佛は是れ眞實慈悲の父母、種々の善巧方便を以て、我等が無上の眞實信を發起せしめ給ふ、煩惱を是足せる凡夫人、佛の願力に由て信を獲得すれば、斯の人は即ち凡數の攝に非らず、是れ人中の分陀利華なり、斯の信は最勝希有人なり、斯の信は妙好上々人なり、安樂土に到れば必ず自然に、即ち法性の常樂を證せしむ。

斯う言ふ御文である。我々如き煩惱具足の凡夫人も、佛の願力に由つて信心を獲得すれば、既に是れ人中の分陀利華である、最勝希有人である、妙好上々人であるとは如何にも廣大なる大利益である。一旦信仰を開發すれば彌々死ぬ時に臨みて佛に成る資格が出來るので無い。佛に成るは死んだ後なれども、廣大の御惠みに安心した時が既に人中の分陀利華である、凡數の攝にあらずして既に聖衆の分に定めて置いて下されてある、故に譬へ宿因拙くして刃の下に仆れても、直に正

覺淨華の衆生として淨土に化生させて頂く事が出來るのである。

如來淨華の聖衆は、　　正覺のはなより化生して、
衆生の願樂こと〳〵く、　　すみやかにとく滿足す。

斯くして絶對の理想の境界に達し、極樂淨土に目を醒まして見れば、眠つて居る衆生が哀はれに耐えぬ、無明の酒に醉ひ、三毒の毒を貪つて居る有樣はどうしても座して見て居るに忍ひぬ。そこて此度は一切衆生を利益に出かける、其の有樣は丁度我々の爲めに一切諸佛が種々の善巧方便を以て導いて下さるが如くてある。聖人の御臨末の御書中には

我歳きはまりて安養淨土に還歸すといへども、和歌の浦の片雄浪のよせかけ〳〵歸らんに同じ、一人居て喜はゞ二人とおもふべし、二人寄て喜はゞ三人と思ふべし、その一人は親鸞なり
　　我なくと法はつきまじ和歌の浦
　　あをくさ人のあらんかぎりは

とあります。

今日は雨中なるにも係はらず皆さんが斯の如く熱心にお集り下されて、實に有り難く存じます。私は別段深い考もありませぬでしたが、此頃常に此の本願力の事を考へて居り、ことに觀の字に就きて一度お話し致度く思うて居りました故、今日は之を申し上げたのてあります。何時迄申して居ても盡きませぬから、今日は之に止めて置きませう。

告白

大悲の善巧終に我を攝取し給ふ

有田廣

私は九州の片田舍の者で御座ります。然るに不思議の御緣により、一方ならず先生の御恩を蒙むる身になりました。先生九州御傳道の折、求道誌上に信仰の告白をせよとの御言葉て有りました。然るに私共の樣なる者が誌上を汚すのは眞に恐れ多ひ次第で御座りますにより先生の御許まで幼少の時よりの事一切認めて御送り致します筈に思ふて居りました。然るに御親切に是非とも誌上に告白せよと云ふ御紙面を頂きました、是れも全く御佛の御命令と感じ失禮を省みず貴き誌上を汚します。

私は余程御佛に御因緣か深かつたと思ひます。私の家庭は祖々母初め祖父母兩親に至るまて皆御慈悲を欣んて居りました。祖父は祖々母の子なき爲養子として有田家に養はれ、又私の父も他より養子に參りたる者て御座ります。父の里の兩親も非常の信者て御座りました。私は母の若年の時に生れ、其後間もなく弟が出生致しましたので、祖父祖母の手にて養育され、殆んど子の樣て御座りました。幼年四五歳の頃正信偈

の七八句及阿彌陀經の初めの處一二句聞き覺へ、人眞似を致して居りましたことや、私の近くの老人の大病の時伴はれて見舞に參りたるとき、此の老人に若し死去致たさるれば上等の御經を讀て上けると申したとて祖母の昔し話しに出ます。

其れより小學校に入學致しまして、後は唯何の考へもなく過しました。最も普通の小供よりは惡戲者て御座りました。明治二十年頃かとも記憶致して居ります、彼の有名なる博多萬行寺の大德七里老師の處に祖父祖母初め兩親も常に御法話聽聞に參られ長き時は一ヶ月、短き時も一週間位は滯在致されて居りました。春休みの時に祖父祖母に伴はれ、法話の席に出ました事も御座ります。其の折り等は何時も祖父と共に老師の膝元近く座しまして、老師の溫容に接し小供心にも何となく難有く、佛樣は難有い御方て有ると思ひ念佛を稱へて居りました。

高等小學卒業頃になりまして、家庭の內になにとなく面白くなき事を氣付きました。其れは外の事ては御座りませぬ、祖父と申すは至りて剛直な克己心に富んだ經濟主義の勉强家て、每夜の十二時頃迄に就床もせず帳簿などを調べ、朝も五時には必す起床すると云ふ樣な性質て、私の家の財產も祖父により大に增殖致されました。此の樣な性質なるに父は至つて溫厚無事なる方て、性質が丸て相違致して居りましたから、何にとなく氣風が合はず、時には意見の衝突が有る樣てした。母も之れを非常に苦に病んて居る模樣に見受けましたから、小供心にも何となく悲しくなりまして、是非共之れを圓滿になしたいと考へ出しました。然し小供て御座りますから何事も出來る筈なく、唯小さき胸を痛める種になるのみて御座りました。

前に申す樣に私は最も祖父母に愛せられて居りました。私の事は何事でも聞かぬと云ふ事は無い位て、又私の兄弟は多人數て只今十二名生存致して居ります。（外三人は死去しました。）

此の樣に多人數故祖父は私が此の家を相續致す樣になれば、定めて非常な心配をなすて有らうと常に申して居りました。其時より家にある不動產は父に讓り渡しましたけれども、借金及び株券は自分之れを管理して讓り渡しませぬ。是れは直に私に讓り渡すと常に申して居りました。

私は祖父より愛せらるゝは眞に何とも云へぬ樣に難有感じて居りますと同時に、父に對しては何共申樣のない心苦しき思ひをなしました。小供心にも此私が居りませぬならば、御兩方の心も解け合ひは仕まいかと是れか一番苦しく御座りました。人は此の樣なことは知らず、私程幸福なものはないと常に申しますから、何となく腹立たしくてなりませんでした。

此の樣なことより何となく不愉快て、又何となく悲しくなり、元來私は至て無頓着て、附近ての餓鬼大將て手餘り者てありましたけれども、其頃より何となく神經質になつて何となく物事を氣に掛ける樣になりました。

其の樣なことからして信者と云はるゝものが此の樣ては甚た面白くないと云ふ樣な氣が致しました。其後小學校を卒業致しまして、中學に入學致しました。祖父が常に御前は體格

が虚弱なれば學問て生活する者ならば兎に角、大抵にしてやめて、身體が無くしては何に事も出來るものてはない、學問をして俸給取りになるよりも、心配せず内に遊んて居て、其れ以上の年給取りになる方が氣樂てないかと、常に申して居りました。私もつい其氣になり餘り學問する必要はないと云ふ樣な感が致しました。從て中學に入りましても餘り勉強致しません、常に惡戯組に入りて居りました。然し祖先の財産を其の儘受け次ぐ事は男子として甚だ耻づ可き事て、自分は自分て獨立してやらねばならぬと云ふ考は、持ちて居りましたから祖父に反對して居りました。

此時代は朋友等も宗敎と云ふ觀念など有らう筈なく、寧ろ反對して宗敎は愚夫愚婦の信ずるものてある、されば迷信てある。苟しくも明治の敎育を受けつゝあるものが信す可きものてないと云ふ樣な有樣て、私も實際佛樣阿彌陀如來と申御方はどの樣な方てあろーかなど、疑問が起り、以前幼少の時の如く難有とも何とも思はぬ樣になりました。從て寺參りや御前の御禮なども怠りてしまいました。實に恐入つた次第て御座ります。

避夏や避冬に歸省致しますと母や祖母が、御前も一度は死なねばならぬから、少し御法義に心掛けてはどをかと、親切に云ふてもらつたことは一度や二度ては御座りませぬ。此の樣に云はれると私は寺に參ると同とない陰氣になつて氣が沈み込むから嫌ひ、あれは青年の參る處てないなど、何ともしれぬ理屈を列べて耳に入れぬのてした。母等も餘程困りて居つたのて御座ります。只今となりて此時の事を思へば私は何ともかとも申上樣は御座りませぬ、唯御佛の御名を稱へて慚愧する外は御座りませぬ。

此の樣な考て居りますから決して良い筈は御座りませぬ。財産は可なり有るし、唯もう傲慢なばかりて、人を鼻の先て侍遇樣なことて、從て學校の方も眞摯てなかつたので御座ります。

其れに元來私は八九歳の時より眼病に罹り、全く全癒せず年々之れに苦しめられて居りました。其中三學年の末二三の朋友より進められ高等中學の豫科に入學をする氣になり、試驗に出ましたけれども、不合格にて其結果豫備校の四年に編入されました。其中亦々眼病再發致しまして、充分勉強も出來ず、六月初旬同校卒業試驗前、フウトボール其他過激の運動を致しまして突然膀胱炎を起し就床致しました。眼病に加ふるに此の病氣に罹り、其れに中學時代に氣管支炎を病んて身體も餘程衰弱致して居りましたから死にはせぬかと考へ出しました。此のまゝ死ぬれば此位馬鹿なことはない、此樣に苦しむより身體を強壯にして家業を助くる方兩親も安心ならんと其儘祖父の許を受け休校致し、其れより一年程眼病保養等て遊んて居る内、親族の友人より進められて、大阪の法律學校に入學致しました。

宿所は親族の内て同家より通學を致すことゝなり、同校に入りては餘程眞摯に勉強致しました。其内亦々病氣に罹りました。此の時は餘程重症て兩肺炎を起し同時に天然痘に迄感染致したので、此時丈は親族とは云へ他鄉の事にて、眞に心細く感じました。其れより身體は一層衰弱し、何となく精神も

不活潑になり、乘て眼病の治療を願つて居る山縣醫學士の許に至り診察を願ひたるに、先生も色々注意を下されて廢學する方が君の爲てある、身體が持たぬかも知れぬと申されました。私も一年の後には同校丈は卒業せらるゝことゝ云ひ、此事に就ては非常に苦悶致しました。此病氣を致して死と云ふことに氣付き何となく心細くなつたので、大阪の西の別院に二ケ月と云ふものは毎朝說敎を聽きに參りました。其れて幾分心を安んずることが出來たのてあります。又私の親族の主人は淨土宗の篤信家て毎夕店員及家族一同て百萬遍を繰りて居りました。其時は私も何の考へなしに之に加り念佛を稱へて居つたけれども、只今となつて見れば是れも一樣に御佛の御引寄せ下さつたので有りますことが知れ感謝に堪へませぬ。

二學年の試驗を終り歸鄉致すことに決し、朋友にも此事を話しました、學友が今一年故是非上坂せよと申して熱心に進めてくれたので有ます。歸鄉致すと兩親も身體衰弱せることとて廢學をすゝめ、色々の事情て終に學業を廢することになりました。實に理想程當にならぬものは有りませぬ。

其れより結婚問題が起り、私も祖父等の考へも有ることにて意見に從ひました。結婚後一年經過せぬ内肺炎加答兒に罹りました。私は早や死刑の宣告ても受けたやうに力を落し益々神經の度を增しました。此時の兩親の心配は一方ては有りませぬ。父は終夜眠りに就くことさえも出來ず、嘆息のみ致し、母は悔んでも致方はないので眠らんとすると、吾子の病氣が心配でないかと叱られたとは數回て有つたさうです。私は其れ程に思ひませんのに、此の樣に御親切なる御思召し御恩の程は感謝致し樣は有りませぬ。其れより二年間と云ふものは播州明石に於て保養をなし、大分回復致した感じがしたので有ります。此の樣に醫師の手を離れたことは一時も有りませぬ。又其時災難が起りました。其れは祖父が私に讓渡すと云ふて管理致して居りました株式の大部分を乘て信用ある銀行に預けました。此の銀行の重役も非常の資産家のみて銀行の倒産する等は夢にも思ふてはをりませず、私も其樣なとは氣付きませぬので、之を樂しみて當に致して居りました處、一朝經濟界の恐慌に逢ひ資産家の重役が倒産すると同時に銀行をも倒産致したので祖父は申すに及ばす、私も夢かとばかり驚きました。此の時の私の絶望は言葉にも筆にも書き顯すことは出來ませぬ。嗚殘念て殘念て堪へられませぬ、何故に此の樣に不運なるかと其れのみ悲しんてをりました。祖父も餘り意外な出來事て殊に老人の事ではあり、今迄父に任せず自分に管理致したる財産が此の始末となつたので父に對しても私に對しても又世間に對しても非常に困つたので有りませう。是れは此人生の常てあることは乘々御意見に逢ひなから其れに氣付かす唯だ無くなつた財産が惜しきばかりでした。私は此時は財産により苦しめられたのてあります。其れからと云ふものは致方がないとは云ふて居りますけれども、不圖すると此の事を考へ思凝ばかりこぼして居りました。此の樣な目に逢ても慈悲を仰がうとはせず、此の世の中を當てにして安樂に暮さんと考へて居りました。此のとき御佛の心は如何に有ましたて御座りましよか、愧しき次第て御座ります。祖父も是等の心配より其翌年の初め終に往生を遂げました。祖父

は床に就くと一言も世間の事を云はず、唯稱名を喜び極平和な有樣で御座りました。

祖父が常に私に向ての訓誡は、此の家の財産は決して之れを相續するものゝ所有で無い、皆祖先の物で相續人は其家の支配人てあるによりて、此の財産は自己に自由に消費す可きものでない、祖先の御陰にて安樂に生活させて頂くので有るから御恩を忘れてはならぬ。

又一つは此の家は佛法の御陰で續いて居るので、御法義かなくなるときは此家も潰れたときと思へ、此家を相續するものは御法義を喜ばねばならぬと常に申して居りました。此言葉は祖父の遺言と思ひ、今も尚忘るゝことは出來ませぬ。

私は御佛が祖父により訓誡を加えて下されたと難有く感じます。

乍然是れにても私は未だ御慈悲を喜ぶことは出來なかつたので御座ります、能々煩惱の盛なもので御座ります。

斯の如く御佛の御意見のあるのに氣付かず、私は益々惡道に向はんとして居りました、其中又私に大なる打擊が來ました。其れは私が最も愛して居りました妹の死で、妹は小學卒業後女學校に入學し無事に卒業して欣こんでる矢先に突然病氣に罹り、名醫を迎へ出來得る丈けの治療を施しましたけれども、終に不歸の客となりました。此の時は私に取りては非常の苦痛で御座ります。先には吾が頼みとせる財産を失ひ其上御高恩を蒙むれる祖父に別れ、亦思ひ掛けなき此度の不幸、實に此人生は悲慘なるもので有ると、悲觀せずには居られませぬのでした。此の悲しみの未だ消えやらぬ内、家事の整理上其他自己の意見を主張せし爲め、又々苦悶に陷入り親を疑ひ兄弟姉妹を疑ひ、他人は申すに及ばず、妻を迄疑ふ樣になりました。此の樣になつて見れは世界に私の身方は一人も御座りませぬ、精神は早や死して居るので御座ります。私は今にそれを思ひます。此の時は動機さえあれば人を殺して居つたには相違ありませぬ。殺人犯等の新聞の記事に出るときは、實に氣の毒で堪えませぬ、此の時は夜中眠らさる事も時々御座りました。

斯く苦しみつゝ有る内、私の長女が午後五時頃より突然發病八時頃には醫師も殆んど見捨て居ました。此の時は今迄の苦しみも忘れんばかり心配致しました。幸ひに生命丈けは受け合ひの出來る樣になりました。此時三日間と云ふものは一睡も致しませぬ、自分ながら不思議に思つて居ります。此の樣な目に逢て如何にしぶとき私でも眞摯にならずには居られませぬ。

或るときは悲しさの餘り心のやり場なく、佛壇の前に座し唯御佛に向つて自己の不幸を歎き訴えて居りますと、何とはなく御淨土參りをさせて頂くものが、是位の事が何事かと云ふ樣な思ひが致して、何となく難有き涙が出た事がありました。

此の長女の病氣は殆んど四十日餘掛りました、私と妻が殆んど看護致しました。其内色々今迄の自己の境遇や出來事を考え、此人生の上で幸福とか不幸とか云ふて自分も悲しんて居るが是れを人間以上の佛の目より見られたなら如何なるもので有らうか、人間は自分に苦痛を感ずるとき、又不利益のとき

は不幸と云ふて居るが、此人間で不幸と思つて泣き悲しんて居る事も佛樣の目より見られたならは、反りて幸福に進みて居る事かも知れぬ、人間は慾癡なもので何事もわからぬから、唯目先きばかりに氣を付て其究極を研究せぬから何事も知れぬ、今迄自分は隨分苦るしんで來、又小供の病氣にても其上に苦をましたが、自分は今迄佛樣の事は左樣に思はず、唯今世の事ばかり目を付け、財産がなくなつたとか、他家は年々非常の財産が增殖するも我家は經費が入るから思の如くならず殘念だとか、人が意の如くならぬとか、皆自分を本位にして自分の利益になることばかりを考えて居る、是れよりまだ大なる佛樣の御慈悲と云ふことは何とも思ふては居ぬ、此樣な事で此世を渡つて行きつゝあるときは、如何なる事が出來るやもしれぬ、幸ひに此度は小供の病氣も全快しつゝあるけれども、此の次は死ぬるかもしれぬ、自分には之れが非常に苦痛てある、けれども人間以上の人より見る時は我が爲には却て幸福であるかも知れぬ、見れは今迄の樣な事ばかりを苦に病んて居る場合でない、今少しは御法義に心掛けねはならぬと、不思議のことにてその樣な感想か浮びました。其れより一ヶ月たゝぬ内十年以上も病氣で尋ねたることのない信者が偶然尋ねて來て、二三日間法座を開きました。私も其席に出まして、熱心に法を聞き、今迄とは違ひ耳に入る樣になりました。されども心の惱みは胸につまりて忘れられませぬ。其れより青年會の發起で熊本の八淵師を招き佛敎演說會を開き先生よりも佛法上の話を色々聞きました。此の緣で以前と違ひ大分熱心になりました。

昨年正月妹の夫に當る人參り佛法の話の末、清澤先生の話や、又只今東京に近角常觀師と云ふ文學士で同しく清澤先生等と共に信仰生活をなされた御方が求道學舍と云ふを起し、求道と云ふ雜誌を發行になつてる。極く有難き雜誌で先生により信仰に入りたる青年甚だ多き由を聞ましたから、早速講讀の事を申込みました。其の内雜誌が着しましたから直に拜讀致しました。是れが初めて先生に御逢ひ申す御緣て御座ります。丸て夢の樣て御座ります。其れ迄と云ふ者は御名前さえも聞たことは無かつたので、實に不思議の次第て只事では御座りませぬ、南無阿彌陀佛。

是れは其の後の事て有りますけれども、昨年十月先生熊本に傳道に御出になることを熊本の高等學校に居る弟より通知が參りましたから、飛び立つ思ひて直に參りました。熊本に着した翌朝同宿致して居りましたから、學生に紹介を頼んで二階の一室て拜顏を得ました。一見致して何とも知れず難有涙か浮びました。とても私は初めて逢た人とは思ふ事が出來ませぬ、必す前世深く切つても切れぬ御因緣の有た事と信じます。今迄多くの人にも面會をも致し又親密なる人にも逢ひ常に逢ひ度いゝゝと思ふた人に逢ふことも有ります。けれども私の心に此時の如く一種異樣の感の致した事は無いので、恐らく此後他人に逢つても此の如き事は無いので有らうと信じます。是れは先生に初めて逢つた其後私は心に浮んて消えませぬ、此の心の有樣は只今も其感しが致します。

話しが後に歸ります。其求道の三卷一號を拜讀致した處、云ふに云はれぬ溫たき何か或るものを感ずる樣で、今迄書物

他の雜誌とは一種異なつて參りました。心の中から難有たうと云ふ樣な氣が致たのです。二月十四日の夜高等小學に出られて居る友人の御方と晩餐を共にし色々話の末が御法義の事になり、私の聞て居た事等を話して終りに求道の一號を渡しまして一讀を願ひました。其夜就床致し今迄の自分の境遇や自分の行跡や、佛樣の御惠等を考ふれは考ふる程不思議てならぬ。此世界は無常てあると常に承つて居るが、實に無常である、無常であるから御佛か常住の世界に御導き被下るのである、其れて何時死ぬやも知れぬ、然るに恐るゝなかれ恐るゝなかれ、我れは常に汝と共にあり、無常を恐るゝなかれ、若し此の世界に緣盡きなば直に眞實の淨土に伴なはん、佛の御國は此の如き不完全の處にあらず、無常來れ、無常來るときは汝は眞の國の人なるぞ、悲しむなかれ、恐るゝなかれ、と云ふ樣な何とも云へぬ內心に聲を聞いたとても申ましよ、是が心の底に響くと同時に唯私は熱涙が兩眼より流れ出ました。其の儘仰向ひては居れませぬ、直にうつ伏せになりて御名を稱えました。其れより只難有さの餘り眠られませぬ、夜の明けるのを待て昨夜の君の處に參りましたのて有る。君は未だ就床中であつた。私の訪問致したのに驚きて床を出てられたれば、直に前夜の雜誌讀まれたるやを尋ねましたるに少しく讀みたるも解らぬと申されました。其筈で御座ります、信仰に關する雜誌は其れが初めてでありました。兎に角難有き事であるから今再讀を願ふと云ふて歸りました其日も何共云へぬ樂しき心持が致しました。其晩も就床致しましたものゝ眠る事が出來ませぬ。翌朝亦君の家を尋ねました。其時も就床中てありました。私は元來朝寢の方て御座りましたので、二日も此樣に早朝に出掛ましたから、君も少々變な樣てした。其れより歸宅、兼て私が信者として渴仰致して居る神戸の醫師津山先生及豊前の同行及妹婿吾が弟に宛て下の意味の紙面を出しました。拜啓有田廣義三十九年二月十五日死去仕り同刻出生仕候間此段御通知申すと殆んど夢中て書を出だしましたのて有ります。其後其れ其れ難有き返事を頂きました。

以前は御佛前に御禮致して、御和讃を拜讀致すも唯參る丈けにて別に何の感じも致しませぬので、私は講義ても聞けは難有く感ずる樣になられんと、之れを院主に御願申しました處、其中我か以前の先生が參るので同師より御聞なされと申されました。然るに其後より、講義を聞かずとも、一句々々難有く私の胸中を察して呼んで下さる樣て文句のまゝ難有いので、其後先日は和讃の講義を願ひましたけれども、必要が御座りませぬと此の樣に申ました。

此の樣な有樣で以前と違つて凡ての人が親しく少しも惡しく見えませぬ。今迄一人として親切て無く自分の氣に入らぬ樣て有つたのが、只今では其の樣な人は無いので、初て是は自分か惡るかつたので、自分が人を疑て其樣に見て居つたから、先方も亦左樣に見えたのてある、此樣になると何となく樂しく感じ、何か重荷でも下した樣な氣樂な心になりました、自分ながら變てありますから、妻に自分は此頃は以前とは違ひはせぬかと、尋ねますと、妻も笑つて左樣に云はるゝと眞に此頃は擧動が違ひますと申してくれました。又下女等も近來は

若し主人の模樣か違ふて參つたと申しましたそうて御座ります。其れより數日を經て鼻腔內に少しく惡き處が有ると云ふ事を地方の醫師より聞ましたから、福岡に手術を受けに參りました。私が慈悲を氣付かせて頂きませぬ以前は、人か傲慢て有る樣な氣がして腹立たしく有つたのが、此度滿車に乘りて少しも其樣な模樣は見えませぬ、此の方より席を讓り與ゆるとさは、先方も禮を申して掛けるので、同し汽車に乘りても以前の樣に不愉快の感は致しませぬのてした。今迄人が傲慢てある樣に見えたのは自分の心が傲慢だからであつたのて有ると云ふ事を泌々知らせて頂きました。

其後治療中注文致せる「信仰の餘瀝」を送りて參りました。其れを開きて第一章を見ますると私の心の有樣か其の儘書て有たのて有ります。實に此方が五分思へは先方が五分思ふ、此の方より五分惡く思へは先方も五分惡く思ふ、先方か自分を如何に思ふているかは自分か先方を如何に思ふて居るかを考えれば直に解る。私は此の一章は泣きて難有く讀みました。其れより常に此の事を人に話しますのて御座ります。

此の樣な幸福な身になして頂いて見れば以前の財產位は何でもない、唯難有いばかりてある。

今迄幼少の時より色々苦しみ惱み憂えた事や悲しき出來事は、皆此の罪惡極まる私が此の難有き御慈悲に浴する御緣て有たかと思へば、御禮こそ申せ何も歎く事ではない。私の樣な普通の人より罪惡なる者は少々の意思にて自覺する者ては御座りませぬ。私が御佛の御胸を痛めたる事如何ばかりか、是を思ふ度に勿體なき次第て有ります。

其後鼻腔內の手術も終り、二週間餘にして全癒、歸宅致しました。今迄は常に病氣勝にて醫師の許へ參りませぬ月とてはなく、又常に服藥を致して居りました。信仰の生活を致させて頂く樣になりましては、昨年來より殆んど醫師の手を煩はさぬ樣になりました。是れも一に慈悲の御德と難有感謝致します。

又幸福な身となして頂きたる上今迄理想を實現させねはならぬ、此の樣にせねはならぬ、此の樣にせねはならぬと家庭の者に向て無理な事のみを申して、自己の力にて何事でも出來得る歟の樣に思ふて居ました、一旦自己の無力なるを知らせて頂き御慈悲の中に生活させて頂く樣に成りて見ますれは、別に自己に苦しますに、以前苦しみつゝあつたときより何事も成るので、私も不思議に堪えぬ次第て有ります。

又私が此樣に御慈悲を難有く喜ばして頂くので、今迄御前の御禮も致しませぬ弟や妹等も一家朝夕御前を致し正信偈和讃を拜聽致して幸福なる日を送らせて頂きます。

其後此の難有き味を話さずには居られませぬ。御緣さへあれば皆の人に御話し申して、私の幸福を喜ひて頂きます。其れと同時に益々自分の罪惡知られ、深く慚愧致して居ります。其れに就けても御慈悲の程か難有く、信仰の談話を聞くが何よりの樂みになりました。以前は色々の肉體上の娛樂にふけつて居りましたか、近來は此の樣な事には關係致しませぬ、のみならず敎會講習會に出るのが此上もなき樂みにて御座ります。

以前の友人も信仰に入られ其れより敎育家に五六名の信友

も出來たて、私は常に此人等と御慈悲を讃じ嘆させて頂ひて居ります。

無碍光の利益より、　威德廣大の信を得て、
必らず煩惱の氷とけ、　即ち菩提の水となる。
盡十方の無碍光は、　無明の暗を照しつゝ、
一念歡喜する人を、　かならず滅度にいたらしむ。
釋迦彌陀は慈悲の父母、　種々に善巧方傳し、
我らが無上の信心を、　發起せしめ給ひけり。
南無阿彌陀佛。

行誡上人

とく法の聲ともしらで今日までは空ふく風ときゝすぐしつゝ
みほとけの道おほかれど捨といふ一筋よりやおもひ入りけむ
法のため身をすて小舟おなじくばこの荒磯にくちねとぞ思ふ（江の島に七十日籠りて大般若經よみける頃）
山ざとの朝けのけぶりよそに見てたち別れゆく峯のよこぐも
其名こそ數はかぞふれまことには限しられぬちかひなるらむ（四十八願）

感恩

後藤龍緣

私の心が何とはなく開けかけました事實は今尚ほ沒すべからざる事に成つて、而もその後それが幾多の實際問題と相連絡して愈々力强く感せられるので御座ります。而して今日迄のあらゆる事柄が、少なくとも私がどうしても經過せねばならん樣に成つて居りまして、それ等過去の經歷につきましては更に遺憾なく思はれて、玆に私の進むべき道に就き爲すべき仕事を爲して居りまする事は、全く如來深重の御念力と存じます。

今から丁度七年前、即ち明治三十三年の十一月の事で、私は或恩師の御世話で醫學研究の目的を以て始めてこの東京へ參りました。それは速成的に醫術を習ひまして、再び渡清する考であつたので御座ります。すぐに先輩並びに舊友の御誘掖によりまして、或る醫學校へ通ふ事にきまりました。何分私は東京へ參りまする迄は宗教的文學的の趣味の中に居つたものですから、今急に醫學と言ふ專門な科學的實驗的な學問に出逢ひましては、これ迄見聞しなかつた新しい事柄に大層趣味を感じつゝ、非常に面白く且つ愉快に日々通學して居つたので御座いました。而してその翌年即ち三十四年の春、學校の理科試驗もすまし猶進んで研鑽の道について居りました處、不圖その頃からか念頭に浮びました事は、一體學問は一時的のものでなく、自分の終生相共にすべき事柄でなければ到底本當のものにはならぬ、然るに自分は今この醫學を修めると

言ふのは、將來自分の利用の爲めにして居るのである 所謂本業の補助として修めて居るのである、そしてまたこの學問が果して自分の天性上適するものかどうかと 個樣な疑問が出て來まして、その時分から私の頭の中は二つの路に分れかけてまゐりました。それから一體物と心と言ふ二つはどんなものか。精神がもし物質的のものならば、この肉體と同時にその活力をうしなふて仕舞ふ筈である、たとひ醫學が高妙の術に進んだ處で、それは肉體上の欠陷を醫するのみで吾々の心の欠陷と言ふものはどうなるのか、元來この人間とは妙なものである、私は確に心は永久のものと聞いて居る、私は若し專心に勉强するならば心の方の學問がして見たい、など考へて居りますると、一體人間と言ふものはどんなものであるか、と言ふ風なとりとめもない事を考へ出す樣に成りましたのが、抑も私が煩悶の始まりで、それからと言ふものはそれからそれへと兎も角その當時自分の能力の限り種々と考へると、心の中はそろ〳〵不安の色を呈して參ります。どうも今勉强して居る醫學と言ふ學問が、私一個人にとりまして私を惡魔の巢窟へ引ずつて行く樣に思はれまして不安で仕方が無い。それからも一つは醫學を學ぶ學生が多くは物質的に流れて居る事（これは唯今考へますると私の極淺薄な考でありました事に想到します）が、私の不安を一層强からしめた一助ともなりました。私は學問の選擇を誤つたのでは無いか、いや〳〵これはその學ぶものゝ精神さへ確固なれば決して驚くに足りない、折角やりかけたこの一事貫かねばならぬ、そうでなければ私の恩人に對して申譯が立たぬ、と思ひ直してまた元の如く續けて居ましたが、一段右の樣な迷ひに陷入つてからはしんみりと講義もきかれず、日々通學はして居ても、いつも後の方に居てそれ等の問題を考へて居てやまぬのでありました。自分で自分を叱つては勵まして見ますが、どうも不可ん、餘り考へ込んで茫として仕舞ふ事も度々ありました。それから私共の舊友を見ると皆各得意の道を修めて居る樣に見える、私は一生懸命に勉强する事が出來ぬ、どうも困つた事に成つて來たと思ひつゝも、何とはなく日を暮して居りまするとと、今度はぼんやりとそんなに貴重の日月を送り、また恩人よりの不尠學資を消費する事が堪えられぬ樣な感に成つて參ります。（私は私の恩人某々に對して、今尚昨の如く申譯が無い事をして居つたと思はれます）その當時故清澤先生は今の求道學舍であつたか、或はもう東片町に移つて御座つたか、精神主義の御話は盛んにあつた時分で、私も聞きに行き度いと幾度も思ひましたが、行く勇氣も出なかつたので、唯獨りで苦しんで居りました。尤も友人のうちで私の意中を告げた人もありましたが、かれこれするうちにその年の夏もすぎ、十月と成つて來ると內務省の開業試驗がある、最も私は前期の方から受けねばならぬ、此時の私の心は何とも名狀しがたい嫌惡の念に沈んで居ましたが、どうも厭でたまらぬ、到底及第などは夢にも思はなかつたのですが、それを受けて見ると豫期の如く失敗でありました、もう此そうもう退學しようと幾度か思ふて見ても、人の親切を無視するのみならず、私がうちを出るときの言葉に對しても斷行する事がそら恐ろしくて出來ません 學問上の懷疑も依然分りませんでしたが、今度

道德上私は無責任であるの感を加へて來まして何とも申し開きが立たん。學校もこの時分から時々休む、醫學も天下の仁術と言ふ點からその結果から見るとまたやつても見たい、しかし又自分の目下を思ふて厭だ。唯今からその當時を見ますると、薄志弱行の極であつた樣に思はれます、何とも御愧しい次第で御座ります。心が塞いて居るものですから見るもの聞くもの味ふもの一つとしてかなしみを增すの料とこそなれ、少しも面白みとてはなかつたので、此時分私は同窓の友人達にどれ丈迷惑をかけましたか、何とも申譯の無い話です。人を恨む人をねたむ、父母兄弟迄もそしりあざける樣に成つて參りました。こんな時には誰れか先生の許へ行つて心中をうちあけて御相談てもすればよいのでしたらうが、元來私は幼少の頃から自分獨りで瞑想に耽ける僻がありまして、左樣言ふ高德の方の處へも行かず、怨言不平を鳴らしつゝ、千駄木の家に居りましたが、時々は上野の森、道灌山などへも出かけて見ましても、更に功能も見えませぬ。唯足踏みをして居るばかりで、やはり人を疑ふ、世を憤る、惡心が起る、愈不安益疑惑の淵に落ち込むばかりて、更に解決の道がつきませんでしたが、どうしても回復の道につきたい、正道に出たいと言ふ念慮はまた日夜やまぬのでありました。私は家庭の事を申しまするのはいやな事でありまするが、茲に大體どんなものかを申し述べます。そしてこの事がまた私の信念上頗る重大な關係を占めて居りますのてす　私は眞宗の家庭に生れまして六歳の時に父に死に分れ、八歳の時に祖父と祖母とに死に分れましたが、父の事は餘り幼少で能くは記憶も致しませんが、祖父は尙ほ能く記憶して居りまして、私は今日迄心の危險な場合に遭遇しまする時は、必ずその面影とその言葉即遺言とも言ふ言葉を想起せずには居られぬのであります。その言葉と言ふのは、貴樣は偉いものに成つて己れのあとを繼げよと言ふのです。その偉いものと言ふ事が學問や名譽や地位等ではなく、洵に他力の信念に住せよと言ふ事であつた事を漸く昨今默契した譯であります。私の九歳の時に第二の父が參りました、十一歳の時に母は五人の小供を殘して世を去りました。私が無常のはげしい悲痛の感に打たれたのが抑もこの時からで、爾來一切の事が皆悲觀的におもはれて、唯もう淋しい、かなしいと言ふことのみ感ぜられて來たので御座ります。私の十三歳の時に第二の母が參りました。五年の後產後の爲母子共に亡くなりました。十九歳の時第三の母が參りました。それからは別に變狀も御座りません。私が苦んて居ります間に起つて來ます家庭の事と言ふのは、即ち已上の歷史をもつて居るその家庭の事柄で、總てこれ等は深重の因緣であると思ひますが。その當時はまたそれ等の事が氣に成つて來ますると唯もう自分の存在をいとふ樣に成りますもので、到底堪えきれぬ事に立至ります。仕方も盡きはてたものですから有體に自分の胸中を吐露したる書面を恩人の許に差し出し、斷然學校を退學しまして種々考の後早稻田へ入る事に決めました。その當時私は友の深き厚き御同情に對しまして何とも感謝の外ありません。同時に學資の路は絕たれたのてあります。この事は無論打擊では御座りましたが、どうも今迄の私の不眞面目な無責任な勉強が親切な我恩人に對してどう

して言ひひらきが出來ようと、唯それのみ申譯がありませんが、これは今後自分が必ずそれに酬ゆるべき時が來るだらうと、それが一縷の望みでありました。それから友達の厚き情によりまして一先づ國へ歸る事にしました。卅五年の三月の五日か六日かの晩と記憶して居りますが、すつかり疲れ果てた體とこの心とがふら〳〵に成つて親友に送られつゝ新橋へ向ひました。その時の私の心の中は折角種々と苦心して居つたけれども、今はもう總て非なり、學問も家も名譽も何もかも不用である、但この今の心の苦しさを何とかして除き度いと思ふて居ましたが、やはり萬感錯雜して居る計りでありました。嗚呼こんな事なら寧そ死ぬるか遁世をしたいと幾分か思ひましたが駄目てあります。友人に分れ新橋をはなれて行くときは今から絕望の洞に落ちて行くやうにおもはれて、落涙を禁じ得なかつたのです。今から回想するとおかしい馬鹿げて見えますが、その當時は餘裕が無かつた樣です。而して何事も明了に判斷する能力さへ今やおとろへて、丁度死んで行く人が瞑目する場合に、力なく落命するやうに、どうぞ滊車が少しでも漫々である事を祈つて居るやうで御座りました。而して車中の人々が皆冷笑を以て自分を見て居るやうにもありました。東京を出るときは春雨蕭々でしたが、しばらく行くと外は暴風雨に成り物凄い樣におもはれました。同車の人々も或は坐り乍ら或は腰かけた儘眠つて居たのでしたが、自分は成る可く隅の方にかくれるやうにして蹋躊して居りましたから、十分の事も今は記憶しません。其時は矢張自分は種々な事を考へつゝ、からだは西の方をむいてうつむいて居ます。暴風雨は彌はげしい樣子てある、滊車は遠慮なく死地に引張つて行く。いやな鄕里に歸るのてあるかとおもふと何ともかとも言ひ知れぬ苦しい一種の感のみに成つて杜舞つて居つた事を思ひ出します。するとどうしたものか自分の前面から非常な驚く可き一種の偉力が來て、私のからだに將た心に落下した樣な、或は引かれた樣な感じになりましたものてすから、思はず愕然と眼を睜いて見まするとと周圍の狀態は別に何も變つた事はない。今のは何であつたのかしらんと想ふて居ると不思議にも私の重い重い盤石見た樣な頭腦が急に輕く〳〵成つて來て、心中殘る隈なく鬱積して居た汚穢の堆積が一時にとりさられた樣に、體も手も足も皆何だかしつかりして來て心身共にすが〳〵しく成つて來ましたので、これはまあ一體どうした事か我身ながら合點が行かぬ、ありがたい樣な、うれしい樣な、尊い樣な、而も悠々天地の間に自分ひとりが出てゝ居る樣な、何とも言ひ樣の無い思ひに成つて來たものですから、唯つゝしんで南無阿彌陀佛を稱しつゝ西方を念じました。歡喜胸に溢れ慈恩身に餘る次第て御座ります。嗚呼今迄あらゆる問題の爲めに轉々反側して、今正に窮地に落在して居つた事は事實てありました。而して今かくも忽ち一躍して光風霽月の胸中と成つた事も本當てあります。前の事實は私のそれ〳〵踏んて覺えて居る經路の途上であつた事も明かである。今茲に一大轉した事に至つては私にとりては不可思議の極と申す外に何等の言葉がありません。今その當時にあたつて感じて見ますれば、正に是如來深甚の御念力の然らしむるものとより外に思ふ餘地が無いので御座ります。今や

偉大なる同情を得ました事につきましては、思ひは直ちに故母の上に及ばざるを得ぬのであります、故祖父の心の上に想到せずには居られぬのでありました。私は一瞬も早く郷里へ歸り度い、而して我現在の父母に申上げねばならぬ、瀛車は何んでこの樣に遲いのであるか、今迄の事を考へて見ますると總てゝ々皆反對の道に向つて居つた事が歷々として見えてまゐります。嗚呼々々我身は眞に惡逆の者であつた、どうかこの自分の非過を行いて恩人の膝下に披瀝し度いとのみ思はれて來るのであります。汽車は御殿場を出てゝ今や急轉直下の勢で矢の如く西にむかひますとき、車輪が軌道を相軋りつゝ疾走るのその事が、如何にこの私の頭に遺憾なく愉快に共鳴しましたか、今尙ほ急轉直下の共鳴をしつゝ書いて居るのであります。暴風雨はいつかなぎて月の光は雲間より出て來り、星さへ輝き始めて參りました。嗚呼感謝の情に堪えぬ次第と成りました、感極まつて言ふ所を知らずであります、夜はほのぼのと明け渡つて來る、太平洋の向ふの波から威勢よく旭光を放射しつゝ昇るこの大光景は、私が二十有餘年來始ての大光榮と思はれます。今や月も星も山も河も樹も汽車も人もなつかしくしたはしく成つてたまらぬ、太陽が自分か、自分が太陽か、今や自分は天地宇宙の中心に居るのではないか、その森嚴、その旺盛、その慈愛、その歡喜、殆んど言慮路絶えたるの妙境想となつて來ます、今から思ひますると誠に傲慢の極で御座りました。しかしその當時の事實はまだ〳〵逆上して居つた事と思ひます。私は私を忘れて居る、私は私を疑ひます、而も私は矢張り私であります、依然として列車の一隅に坐つて居る破帽垢衣の一書生であつたのであります。今はこんな事に成らう爲めに今迄苦しんで居つたのではなかつたのであります。またこんな大恩身に餘る仕合せを成する爲めに要求して居つたのでもありませんでした。然るに今やこの全一身を擧げて悠々深大の慈恩に引入れ給ふ事に至りましては、唯不思議と言ふ事の外言ひ表はし樣が御座りません。列車が京都へつきまして直ちに父母の家に至り、謹んで佛前に詣し次て父母に來意を述べました。それより直に恩人の家に造りますと、實に快く私の談話を聞いて大層喜んでくれました事、在清の恩師より同情の書信に接した事、學資の道もつき、再び東上學事に就く事に成りました。この間の消息につき唯奇異の感じに堪えぬ事のみでありました。歸東已來故清澤先生の許へ度々上りまして無上の御敎示を蒙り、次で又我近角先生の深厚なる御訓化を受けまして、愈々益々如來深重の恩德の身に餘るを覺える次第で御座ります、顧みて慚愧の次第で御座ります。私はその當夜汽車中の現象は心理學上一種の幻覺てふもので、よく誰れにでも起る事柄に外ならない、今別に事珍らしく申す程のものでもなく、そんな事が信念上何等の條件では無いと存じて居ります。が私にとりましてはかゝる經路が私の信念上一の動機となりました樣に思はれます。

其後諸先生諸友の直說、並に東西古今の宗敎的實驗の跡をも拜見致し、益々私の心の上に不可奪ものゝ樣に成つて來て居ります。併し私は其後種々と重大な事實問題に出逢ひまする度毎に、かねての强みも消えうせて蒼く成るのに極つて居

すが、種々考へました結局到底判斷がつきませんとかう成りますると、最後の立場と成つて來るのは即ち信念の上より血路がひらかれる事であります。その間趣の結果の善か惡かは分りませんが、兎も角自分の信念と言ふ事を忘れて居りましては、即ち如來深重の御恩と言ふ事を忘れて居りましては、いつ迄も判斷がつかぬと言ふ事に成つて居ります。私は今迄はかれこれ種々信仰上の事につきまして諸友と問答して、唯何の事はなくしまひには議論の上手下手と言ふ狀態に陷入つて居る事に氣がつき、又一歩誤ると傲慢不遜の惡に出んとも限りません事に驚きまして、これから後は唯一に實行に事實にその妙趣を見出す樣に致し度いと、昨今感を深くして居る次第で御座ります、元より同信の友と彌々相共にこの一大因緣につきまして喜びを同じくし度い事は變りません。私にとりまして心を一にして阿彌陀佛を念じ奉れと言ふこの御仰を奉戴してまゐり度いと存じます。

已上既に過去の事をかき立てまして、その當時の感興も十分に起りかねます爲め、或はいつはりの筆のあとを長引きました次第は幾重にも御諒知を願ひます。私は此告白を書き了りまして如來廣大の御恩德を仰ぎ、並に諸恩師諸友の今日迄の御高情且、御寬恕に對し謹んで感謝致して居ります。

秋風に山とびこゆる初かりの
つばさに分かる峰の白雲
（源實朝）

感話

於戲綱島梁川師

法弟　大愚生

於戲尊い哉梁川師、美しいかな師の生涯

二十四歳の時より三十五歳の今年まで、いたましや十二年の其間、身は肺患と神經痛に苦められ、已に八年前に醫師より今日か明日かと見放されし程の重態に陷りしが不思議にも前田醫師の厚情、慈母、令弟夫婦の愛護と、師が清淨高大なる信心の力に依て、幾百の難境を物ともせず、飛超え來れり、あゝ此永き間の病苦如何にありしならむ、八ケ年の其間身は六疊の病室を出づる能はず、否六尺の床を離るゝことさへ僅ならぬ苦境に在りしなり、而も心は此不自由なる身と俱ならずして、法と俱なりき、常に法と偕に樂しみ法と俱に働きしなり、身は六尺の病床に措きたりといへとも、心は常に縱は三世、横は十方に亘りて一切衆生を憐念照護したまふ弘誓の佛地に措きて自他を無碍の大道に引接指導したりしなり、師が足は一歩だも移す能はざりしといへども、師が心の足は神佛に行き、古今東西の聖賢偉人に通ひ、是等聖衆と共に苦惱の同胞の間を馳せ廻りて之を慰め之を安じ之を導きて須臾も休息あることなかりしなり、見よ病間錄、同光錄の二書に打注ぎたる清淨高大なる師が信心の法水は今現に苦み惱める人々の心田を潤ほして美しき心華を開かしめつゝあるにあらずや、於戲亦偉大ならずや、

師が天地の大愛者を信奉して、弘誓の佛地、難思の法海に據り、法悅の甲を被り、信樂の寶劍を佩き、六字の旗を醻し、人生の園林に遊戲し、道光を四方に宣揚し、法音を十方に響流せしむるや、向ふ所敵無かりしなり、

病苦惱ひ來れば、病苦に惱める自他を憐愍し、之を伴ふて病老死の苦海に沈める有情を安んじたまふ大悲の御許に遊び樂しむ、煩惱の群賊逆襲し來れば、師は益々大悲の大御心を仰ぎ彌々大悲心を起して煩惱の賊に苦しめられつゝある自他同胞を愛護し、決して是等のために惱まされざりしなり、

師は斯くの如く、罪障、煩惱の群賊に驅らるゝことなく障へらるゝことなきのみか反て之等を驅り之等を用ひて以て大悲心を起すの資と成し、法悅の因と成し、菩提の助緣と成したり、大信心ある師の前には罪障も反て功德の體と成りしなり、恰も智仁勇兼備せる名君の前には賊徒も良民と成りて王事を助くるが如くありしなり、師が是等罪障煩惱に對するや何の苦慮する所もなく速に善化したり、即ち苦鬪力戰することなく煩惱を斷ぜずして悉く自然に菩提の味方に引入れしなり、されば師は毫も煩惱罪障をも憂へず恐れず、常に法と偕に樂しみ法と俱に働き、優游自若、怡々として法悅を湛ゑ居たり、而して是偏に大親の大心力の然らしめたまふ所なりとて神恩佛恩の極りなきを感謝し、常に稱名念佛忘るゝ間なかりしなり、

咨嗟師は病患にありしたけそれだけ一層法と偕に働きしなり、身體健なる我等が、苦惱の有情なも念はず、世の爲に日夜心を碎く人々の勞をも謝せず、我爲に苦勞したまへる慈親及び知己朋友先輩の厚き情、深き心も察せずして前後も知らず打臥して居る間も、師は諸の恩惠を感謝し諸の聖衆と共に苦惱の有情を救濟することに焦思苦慮したり、造次にも是に於てし顚沛にも是に於てしたり、咨嗟何等崇高、優美、皎潔、强剛、悲壯、勇猛、偉大なる活動ぞや、世人或は師が病床に在て各地に奔走する能はざりしが故に其活動の有無大小を疑じ、其價値の高下を定めんとするものあり、然れども是等は唯肉を見て眞に師の心を知らざるもの、又眞正の活動を解せざるものにして未だ共に語るに足らざるなり、師は實に神と偕に樂み法と偕に働きたり、

大愚熟々惟ふに師は世の苦惱者をして歸趨する所を知らしめ無碍安樂の大道に遊ばしめむが爲に如來の勅命を奉じて此濁世に還り來りしには非るか、師は世の不治の難病者をして向ふべき所、住すべき所、爲すべき所を知らしめ、以て苦中に歡喜を得しめむが爲に、病者の模範として世に遣はされし人にはあらざる乎、師は基督教者に佛教の味み味はしめむが爲に特に此世に遣はされし聖者には非る乎、師が一生の大事蹟は明に之を證して餘あるにあらずや

師今や淨土に歸りて其形骸を地中に埋むと雖も、師が働は未來永劫、無窮に相續して息まざるなり、あゝ又何ぞか悲み何ぞか憂へむ、我等願くは諸の衆生と共に師在ます安樂國に往生せん、

（左に大愚が師の引立を蒙るに至りし由來と師に就て思ひいだせるまゝを記して師の消息の一端を告げ、共に師の高德を仰ぎたいと思ひます）

私は昨年七月初めて鄉里の友の家に於て讀賣新聞紙上笑磬兄が師の信仰を揭げて大に之を嘆稱して居たのを見まして私も師の信仰にいたく惚れ込んでしまつたのであります、それより身は三百里も遠く隔たつて居ましたが心は常に師の方に飛んで居ました、丁度私は其時分他に思ふ仔細ありて出京を思ひ立つて居たので一日も早く東京に出て恩師近角、上杉、椙垣、平松、中山等の諸師の下に親しく再度の御引立を蒙りたい、又是非共梁川師と多田鼎師とに御目に懸りたいとの念ひが甚だ切になりました、然るに大悲の御力に依りて此願成就したる上に多くの道兄を與へられましたので、他の一方の願は未だ成就しませぬけれども、私は大に身の仕合を喜んで居ます、

私は斯く嘉ふて居ましたけれども昨年の八月東京に出ての後も直には師の住所を知らなかつたゝめ尊容に接することが出來ませんでした、或日私は恩師近角師の許に御禮のため參りました時、梁川師の信仰の尊さ嬉しさに會ひたい會ひたいとの切なる思ひが押えられぬことを告げましたら、近角恩師はあの御方の信仰は誠に嬉しい、我々と同心同行で全く一味である「あの御方に御目に懸ることが出來たら實に君が仕合で予も嬉しく思ふ所だが聞けば師は此頃病卒まつたとのことだから遠慮するが宜くはないか」と御注意下さいましたけれども、私は「いや危篤とあれば猶以て一日も早く御目に懸りたく思ひます、如來大悲の御力に依て來世淨土に於て會はせていたゝくにちがひはありませぬが、せめて今生で一目會ひたい、必ず會はせていたゝきます」と申しましたら、恩師も「然らば御障ないやう氣を着けよ」と御許になりました、それで私は其翌日か翌々日か梁川師の御住居を知り得ましたから、直に師の許に參りまして切なる思ひを告げました、御容態輕からざりしにも拘はらず、幸に拜謁の榮を得ましたので、互に信仰を語り大悲の御親の無限の恩德を喜ばせていたゞきました、是が私の師に就て御教化を蒙るの初めで、能く覺えて居ませぬが、たしか八月十三日頃であつたと思ひます、爾來今日迄慧問となく尊容に接して法話を拜聽し又私の所感をも告げて信心の功德の大なるを語るを無上の樂として居ました、其都度私は御家族の御方々が、長談の病に害あるを憂へさせらるゝをも、知らずかまはず、つい師の力に引かれて長坐しました、此事は何時も後で氣が着て、アゝ又長過ぎはしなかつたかと恐るゝのが數々でありました。

或日師は例の如く信仰談の序でに「近角師の（求道）には常に多くの慰安を與へられて居るから、師に會つたら宜しく傳へてくれ、自分も一度會はしてもらひたい」との言でありましたから、私も大に其同信相照を喜びまして早速師の意を近角師に致しました、恩師は前にもある通り日頃師の信仰に同情して居られましたから二三日、間おいて大久保余丁町に師を訪れました、是が昨年十月十三日午前のことで、眞に有難い嬉しい會見でありました、此日私も近角恩師に御供申上る筈でしたが故ありて參りませんでしたのは今に心殘りであります、此翌々日近角恩師より

拜啓去る十三日八時半過御茶の水に參り九時頃迄御待申、定めて先きに御出と存候儘直に綱島氏を御尋申候、氏の法悅の溢るゝサマ難有、御互に全く大悲冥々の御引合と喜入候、今朝同氏よりも來書あり喜ひの心を序の節、貴氏に傳へ呉れとの御事に候（下略）

との書を御贈になりました、

此後私が梁川師を御尋申しました時近角恩師に會はれたことを非常に喜んで居られました、師が室に常に掛けられてありました親鸞聖人の尊像と櫛間の額とは共に近角師より贈られたるもので師は深く之を感謝して居られました、後又近角師は天香道兄に托して「三帖和讃」を師に贈られました、其中に親鸞聖人八十八歲の御筆「自然法爾」の御法話の末に

これは佛智の不思議にてあるなり

よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこゝろなりけるを
善惡の字しりかほは
おほそらごとのかたちなり
是非しらぬ邪正もわかぬこの身なり
小慈小悲もなけれとも
名利に入師をこのむなり

とあるを見て、いたく感服嘆稱せられました、

是より先き、私は常に愛讀して措かぬ、多田鼎師著「修道講話」を御覽に供したことがあります、師は昨年九月八日左の書を與へられました、

御大切の雜誌及び書籍長々拜借いたし難有奉存候多田氏の修道講話は繰返し拜讀、多大の慰藉と光明とを得候段、不堪感謝候有御禮まで匆々不悉

師は孫て多田師に會はせてくれといつて居られました、多田師も亦「アンナ尊い方に會ふは身の仕合」と私に御語りなすつたこともあります、それで日頃兩師の御會見を切に願ふて居ました私は、近角師と梁川師と御會見ありし翌々日、多田師を御案内申しまして梁川師を御尋致しました、翌日師は

昨夜はかれて御噂に聞及居候多田氏と御引合なし下され、その溫容慈顏は今猶眼前にちらつき申候一歩を移し得ざる床上の身にして、かゝる喜びの日に遭ふは何等不思議なる恩寵ぞと、たゞ〳〵感謝の外は無之候不取敢御禮まで不悉

との書を贈られました。

昨年十月十六日「新人」と左の書を與へられました、

先日の會合は近來になき、ありがたき會合にて今猶歡喜の思ひ已まず候、偖本月の「新人」に掲載の拙文「答求道之友書」の一篇御都合にて「心の友」へ御轉載願はれましく哉、若し多少にても世の病者の慰藉の一ふしと相成候はゞうれしく候也匆々

十二月九日左の書を與へらる

昨夜中桐君來訪あり例の會合を明月曜日正午より相催ふし候事に相定め候間左樣御承知下され度尙ほその節扇子御持寄の事御注意申上候（下略）

此の會合の折には私の扇には

誰れ人の猛衣てゐます花の巻

と書かれました、師は非常に芭蕉翁を景仰して居られました、而して特に此句を愛せられました、

本年二月九日與へられたる書は

先日は態々御尋下され候ひしを折から少々風心地にて喉頭を痛め候ため御目にもかゝらず、折角の御厚意にろむき候段御容赦下されたく候（その翌日近角氏の御來訪に接し候ひしも御目に得かゝらず、法友に背くの罪大なりと申すべし）「中略」小生喉頭加答兒も追々よろしき方御心にかけさせられまじく候匆々

とあります、師は御會ひ下さらぬ時には必ず斯かる書を與へられました。

同じく本年三月二十日

道に在つて益々御健勝奉賀候、扨かねて大兄に會ひたき旨申され居候道友沼津中學校教師二瓶金安氏を明後一日夜、拙宅に於て御紹介申上げ、兼ねて小法談會

を開き度候間若し御差支無之候はゞ同日午後五時頃御來車被下度奉待候匆々、

との書を拜しましたので私は大に喜びまして當夜大雨を冒して師の許に參りました、間もなく二瓶道兄も見えましたから俱に信仰を談じ神恩佛恩の廣大なるを感謝し大なる法悦を與へられました、此日師の言に「近頃は益々何となく自然に稱名が出るやうに成つて誠に有難い事だ」と申されましたのと、「予が十四歳の時に逝かれたる父と永の間遠くなつて居たが此頃では非常に親しい成つて來た」と嬉し相な顔をして手を動かして語られましたのは私の太だ嬉しく感じましたることです今も猶ほ其時の師の尊容が明々と眼の前に現はれます。

此の春頃師は蓮如聖人の御一代記を讀んで居られましたが、中に法慶坊が「我は八十の此年まで淋しいといふことはない、それは何時何處に在つても大悲の御親の照したまふ故に」と或人に答へしを見て、いたく其の法悦の大なるを嘆稱せられてありました、又御弟子が火事のため經典の燒かれんとするを憂へ腹搔き切つて法典を己の腹中に藏し以て經典を完ふせしことを聞て「實に壯烈の極みだ」と嘆稱せられました、此時「何にも識らぬ法悦は又格別だ、我は永い間、倫理、哲學に焦りて居て信仰に入らなかつたのは今以て悔しい、己れの學問を賴んで大悲の大御心を信仰せぬ學者は眞に氣の毒だ」と申されましたのは今以て私の記憶に存して居ます、それと何時の頃であつたか覺えて居ませぬが、或る日私は「もう永の間病床に在らせられて、世の病者の身の上も充分察せられ苦惱者の慰安に御盡し下されましたから是から夜分御休みが出來るやうに病苦も去りませう」と申しました所が師は頭を振つて「いや〳〵予の業が未だ盡きぬのだ、余は唯大悲の風に任せたりだ」といつて笑はれました、

又或時信仰談の中に私が最も崇拜して居る楠公のことを嘆稱しましたら、師も亦「楠公の七生の語は信仰前には左まで深く感ずなかつたが此頃では自分も大に尊く嬉しく、益々不盡の味ひを覺ゆる」と語られました、

又或時私は師に對つて「斯く先生と話して居る時丁度今米國に在る人が何にも思はず唯々先生の御身を按じて居るかも知れぬ、又是と同時に琉球の果てから先生の御身に溫き厚き心を投げ懸けて居るかも計られぬ、又同時に內地の人々が同じ心を寄せて居るかも知れぬ、未だ一度も御會ひにならぬ人々までが現に今先生を念ふて居るか分らぬ、兎に角先生の身には四方八方から、溫い優しい厚い情が不斷投げ懸けられてあることは爭はれぬ事實であります、と申しましたら師は「實に有難い」とうつむかれて涙ぐまれました、此時私は「私も亦斯かる情の下に住んで居りよす、私は是即ち大悲倦きこと無く常に我身を照らしたまへる證據だと思ひます」と申しましたら師も亦「然り是が何より明かな力強い佛の在ます證據だ」と申されました、

師は平素、繪畫、音樂、盆栽、其他自然の美を非常に賞して居られました、繪は雪舟、光琳を最も嘆賞して居られました、又大層小供が好でありました、

左の文は師が往かるゝ九日前與へられたるもので之が私への最後の絶筆であります

昨夜は霧時の御面談を得度候ひしも御急ぎの御樣子と承り失禮仕候多田氏の正信偈講話長々拜借の榮を得奉多謝候、文章の透明には敬服候小生も一本を坐右に備へ置き度と存居候

昨夕久々にて庭に出て候何もかも珍らしくうれしく悠々蒼空を仰いて不盡乾坤の靈氣をしたゝかに吸ひ込み候

ふと見ればのそり〳〵と庭の隅から闇を荷ふて這ひ出るものあり一個の大蟾諸なり此沈默の君子としばし無言の問答を試みたるもなかしく候ひき草々

小生心臟麻痺の症狀あり多少いき苦しく候へども道々快方に可向御心配下されまじく候

梁川文集、病間錄、問光錄を御覽の御方は能く知らるゝ通り、學は古今東西の書に精通し、識見高明、思想幽玄、文章又遠く一世に秀でられしも、大信心を有せし師は何も他力の恩惠として毫も自大高貴の念なく、常に謙遜恭敬て而して一鳥一虫一草一石さへ法界の友として、優しい溫い涙を灑ぐ程、情深い方で、思へば思ふ程景慕仰の念が彌增して來ます、私は師を訪ふ毎に何時も痩せ枯れた顏に法悅の光明かに照らせしを拜して彌々敬服景仰の念ひを深くしました、世人が贈仰崇敬して息まぬのも道理であります。

願くは衆と共に師を慕ひ慕ふて師在ます御國に參りませう、師は聖衆と共に待ちつあらせらるゝのであります。

嘆　詠

磯の月草

左千夫

上つふさなる九十九里に暑か避け一夕磯原に逍遙しつゝ秋立つ天外の雲か眺めて歌數首を得ぬ

九十九里の磯のたいらはあめ地の四方の寄合に雲たむろせり

秋立てや空の眞洞はみどり澄み沖べ原のべ露とぼく曳く

ひさかたの天の八隅に雲しづみ我が居る磯に舟かへり來る

ひんがしの沖つ薄雲入日うけ下邊の朱けに海暮れかへる

和田津美の磯の廣らに三人居り八すみ暮れゆく雲を見るかも

幼きをふたりつれたち月草の磯邊をくれば雲夕燒けす

白雲もゆふやけ雲も暮れ色にいろ消えゆくも日は入りぬらし

秋の海

増田・甚

かなたにはいゆるもの無き海原の帆にのみ殘る夕日影かも

海やまのあなたと人を思ふとき何とはなくて只なつかしも

海近く病やしなふ人しあれは雨は遥けき沖にふれこそ

久方の空より月の統ふれば秋の夜のうみ波も沈めり

長き夜のねざめを胸にこたふるは磯うつ波か鳴く蟲の音か

いやかたくさへぎらるればいやましに思ひ募るは人の心か

秋の夜をねざめがちにて鷄の鳴く一聲を待つ心かな

時報

求道學舍紀念日

六月一日求道學舍創立の紀念日につき現在在舍の人は勿論、在京の出身者皆集る、島田蕃根翁、荻野仲三郎君、八田三喜君、來賓として來り加はらる、午後三時總數三十六人前庭に撮影し、佛前に集りて、歎異鈔を輪次拜讀す、近角挨拶して曰く、創設已來既に滿五年此の如く團欒和樂して佛前に集り得る所以のもの皆是れ大悲の冥祐たらずんばあらず中心深く感謝し奉る所以也と、乃ち晩餐の食卓を共にし、相互歡語して、在地方出身者には畫葉書を出し、其喜を頒ち、感謝を以て相別る。南無阿彌陀佛

若松求道會

六月二十六日より二十九日に至る四日間若松求道會に出席す、前夜荻野兄初め求道學舍諸君に送られて東京を出立し、翌朝到着す、原卓一君、和泉鐵次郎君を初め同朋十二人來り迎はる、此等の諸君心を一にして信仰によりて自然に鞏固なる求道會成立し其團結の堅き罕に見る所なり、自然法爾章を講本として日々人生問題を說く、會場は技藝學校、校長戸城傳七郎君亦深き信仰家なり、佛力を以て相集る、實に不可思議の因緣たらずんばあらず、由來會津は同志團結の氣象に富む、況んや信仰の同朋相集る其牢固なる他に其比を見ず、毎夜信仰談話會を開きて、相互に告白し、亦求むる人の爲に說く、監獄にゆきて敎誨す、昨年揮毫せし、信心淸淨則華開見佛の額は日夜多くの囚人に仰き見らる、敎誨師原卓一君は熱心事に從ひ、悔悟懺悔の人を出すこと頗る著し、實に君は會津信仰の中心なり、四日の間多大の佛陀の光澤を浴しつゝ亦同朋諸君に送られて三十日朝出立して、歸京す、

佛敎青年聯合會

七月六日七日八日の三日間大日本佛敎青年會の發起によりて全國佛敎青年會の聯合會を開かる、六日七日は高輪佛敎中學に於て報告會及び協議會を開かる、司會者藤岡勝二君、椎尾辨匡君、中央部各學校內青年會を初めとして福岡大學佛敎青年會、信濃十善會、岐阜佛敎青年會、關西佛敎青年會、大阪各團體等の團體代表者集り、熱心摯實に將來の聯合につき討議せり、六日夜茶話會あり、司會者丸井圭次郎君、井上圓了師岡田治衛武氏の談話あり、七日午後淺草本願寺に於て公開演說あり、司會者神林周道君、講師は道重信敎、片山國嘉、村上專精、坂上宗詮、南條文雄の諸師、八日午後一時上宮敎會に於て信仰告白會あり、司會者荻野仲三郎君、告白者椎尾辨匡、嶋地大等、管瀨芳英、佐々木月樵、釋慶淳の諸師及び近角なり、八日晩上野精養軒に於て晩餐會あり、司會者來馬琢道君出席者九十名 藤岡勝二君の決議報告あり、衆各其姓名と所屬とを名乘り卓上演說あり、食後談話あり、相共に將來の聯合を盟約して散ず、今回の會合に於て最も著しき顯象は全體の傾向自然の間に精神上の一致成立して、計らはずして豫想已上の好結果を擧げしは全く委員諸君の盡力によると雖も亦佛天冥祐の賜たらずんばあらず、玆に謹で感謝の誠を捧ぐと云爾

暑中傳道日記

大悲の御惠みによりて暑中滿二ケ月間、御佛の道を傳へ奉らんとて七月十四日の日曜、講話と敎誨とを終へて新橋停車場を旅立つ、妻も弟も學舍の諸君も皆プラットホームに送らる、さらば各々暑中相分かれて御佛の惠みを仰ぎ奉らんとて輕裝晩凉に乘じて出立す。

横須賀 鎌倉

出立の晩は、先づ横須賀求道會に出席す、是程眞面目に法を聽く所少し、つまり、かく眞面目ならしむほど社會の事情切迫せるなるべし、人生問題を說き、大悲の照耀を仰ぐ、翌十五日朝不入斗にて法話をなし、横須賀を辭す。

鎌倉にて下車す、こは大井川の出水にて東海道の汽車不通となりたればなり、長谷の三橋に少き愛女の不幸ありしよしをきゝて、無常を感じつゝ雪の下の三橋に宿る、直ちに筆硯を出して求道の原稿を認む、前號の傳道日記これなり、夕方由井が濱に散步す、十四年前第二回の夏期講習を開きし昔を追憶して、當時の田舍びたる鎌倉を想ふ、光明寺より回はりて安國寺の土窟を見る夜暗ふして認めがたし、匆々歸宿して又筆を執る。

十六日は京都に於ける關西青年會の講習會に出席すべきの日也、されど前日に斷りおきたれば、今日も亦朝より、筆を執り、一方には人を馳せ、亦自ら往きて東海道の樣子をきく、前夜一たび通ぜしも忽にして亦不通となれりといふ、稿成るの頃、京都より來電着す、八幡宮に賽して、紫を帶べる白旗山を眺めつゝ午後鎌倉を出立す。

大井川 金谷

靜岡大東館にて一泊す、翌十七日朝出立す、島田驛にて下車す、幸に人力車を得たり、大井川に至る河流滔々として水勢急劇なり、舟を雇ふて渡る、或は船夫負ふて岸に上す、髣髴として當年大井川の渡を想ふ、地方の老幼男女爭ふて荷物を運ぶ、金谷驛に至れば家々の前に麥湯若くは茶を出して旅客を接待す、土地人士の淳撲なるに比して旅人の割合に不感謝なるを悲まずんばあらず、荷待若くば車夫が如何にも營々として勞働するに對して、又巡査が便利を與ふべく頗る苦心せるに對して、旅人の割合に冷淡に受け去りて其勞に報ゆるの念少しきが如きは甚だ遺憾とする所なり、金谷停車場に至りて切符を買はんとす、突然後より名を呼ぶものあり、顧みれば兒玉祖虔君なり、既に前號報道欄に揭げしが如く、金谷驛東遠佛敎會に出席して君と相語りしは去る五月なりき、今や再び此地を過ぎ亦君に遭ふ、洵に奇遇たらずんばあらず、忽にして汽車出て去る、乃ち君に伴ふて君が寺なる洞善院を訪ふ、君淸水を汲み來りて我をして身を洗ひ汗を淸めしむ、眞個に是れ淸淨眞實の大慈悲水我をして蘇生の想あらしむ、固にこれ如來の恩賜、忽然として、此淸凉地に遊ばしめたまふ乃ち飽まで冷を得て亦汽車に上る、濱松に午飯を喫し、亦西に走る、而して金谷に於て前なる汽車は獨り手荷物を運び來りて其所在を失す、しかるに濱松驛長及び車中專務の盡力によりて之を先づ京都に下すを得たるは大なる幸なり、急行列車尾濃の曠野に凉を納れ、江州湖畔を過ぎ、想を家門に馳せつゝ

薄暮京都に着す、藤井君兄弟無漏田君吉田君等京都求道會、修養會、關西青年會の諸君に迎へられて井筒屋に投宿す。

京　都

京都關西青年會の講習會にては十八日より二十日まで講話を爲せり、會場は智恩院の千疊敷なり、題は『人生と自覺』法然上人の南無阿彌陀佛を自覺したまへるを說きて一層感深し、上人の廟に詣で、本地堂の勢至菩薩を拜する毎に當年上人の說敎を想起せずんばあらず、其他議事堂に公開演說あり、卽現寺にて自然法爾章を講じ、常然寺に慈悲回融を說く、其他婦人會の需に應じて市內各所に信仰を述ぶ、殊に講餘寧時間なく求道者の爲に語る、亦松木文三郎君谷本富君同じく講習會に出席せられ、亦武田五一君と相會して相語りしは最も會心の事なりき、君我求道會館の爲に多大の同情を以て設計圖を作らる、久しからずして之を發表して諸君と其快を共にするの機あるべし又新法主に謁し奉る、京都に於ける三日、恰も三月の想あり、二十日晚、諸君に送られて七條を出立して廣島に向ふ。

廣　島

二十一日午前九時廣島停車場に着す、菅瀨芳英師を初めとして有志諸氏幷に靑年諸氏に迎へられ、會場、陸軍偕行社に着す、結構壯麗にして調度の整頓せること未た嘗て見ざる講習會場なり、嘗て日淸戰爭の際　玉座に充てられし室の如き尊嚴言はん方なし、之に隣れる室の如きも支那風の最高の裝飾なり、庭園は舊家老の邸たりしもの、老松亂れて枝を交へ雅致言ふべからざるものあり。

菅瀨師の講話終りて、予は『佛敎の眞髓』と題して二十五日に至る五日間佛陀の慈悲眞實を說く、亦翌日より北村敎嚴君亦講話せらる、同地は從來安藝門徒を以て名高きの地なりと雖、かくの如き形式を以て信仰の話をきくことなかりしを以て非常の喜を以て來聽して、日々其人數を增し來りて新局面を開けり、其他監獄に敎誨を爲し、大谷派說敎場に公開講話を爲し、又婦會を開き　將校の集會あり、田鍋中將已下熱心なる人々多し、又北條高等師範校長はいつも相變らず眞摯なる態度を以て來聽せらる、亦同地靑年の人々の求道心の深きと予を迎へられし至誠とは深く予をして感ぜしめられたり、最も驚けることは何れの人々も皆東京にありて求道學舍に來聽せられしことなり、何事も佛の御計なり、如來の御催なり南無阿彌陀佛

講餘一日、菅瀨芳英師の嚮導を得て、嚴嶋に遊ぶを得たり、予嚴嶋の前を往復すること幾回なるかを知らず、而して之を望みて未た其地を踐まず、今や親しく之に遊ぶ、朱楹廻廊遠く海に浮び、華表海上に聳え、千疊敷嚴として岸上に屹立するの際、塔影綠鬱々たるの間に湧き出づるの光景坐ろに常年平氏全盛の時代を想起せずんばあらず、紅葉谷に於ける水上の樓に宿りて菅瀨師と共に信仰を語り、諸方の友人に繪葉書を送る、翌朝目醒む、驟雨淙々として盆を傾くるに似たり、枕上以爲らく、大井川亦氾濫せんかなと、乃ち菅瀨師に語る、師笑て曰く、是れ溪流也と、出て見る、曉天快晴彼の淙々たるもの果して溪流なり、乃ち忽ち蘇東坡の溪聲便是廣長舌の句を想起し、亦直に阿彌陀經の六方諸佛の出廣長舌相を想は

ずんばあらず、嗚呼我等の眼に徒に雨を認め、耳に風を聞く、然れども何ぞ知らん、其間に恒沙の諸佛舌を舒べて誠實なることを、と起ちて溪流に嗽き、浴し、菅瀨師と相語りて佛恩を嘆ず、忽ち子規鳴て谷を渡り、綠樹の間相掠めて飛ぶ、眞個に人寰の脫するものと謂ふべし、

二十五日朝、講を了ると共に亦親切なる送を受けて出立して播州に向ふ。

播　磨

播州に立寄るは神崎郡船津村西勝寺後藤葆眞師を訪ひ先師祐護師の墓に詣でんが爲なりき、姫路より支線に乘り換へ香呂驛に着す、龍緣君來り迎へらる、君は香山院龍溫講師の嫡孫にして且つ、祐護師の臨末の遺屬によりて今春嗣子となられたる也、傳聞らく、祐護師の父君祐秀師は龍溫師と共に、越後水原無爲信寺香樹院德龍講師の門に遊び斷金の交あり、香山院嘗て祐護師を其嗣とせんと欲し囑望せられしも遂に因緣未だ熟せざりしが、今や恰も嫡孫の代に至りて却て祐秀師の寺を嗣がる、宿緣洵に思議すべからざるものあり、是れ佛祖冥々の御引合せと龍溫祐秀兩師の冥祐とによらずんはあらず、田園の間を過き淸流を涉り、西勝寺門前に到れば、葆眞師を初め、擧家、門徒皆歡び迎へらる、乃ち團欒久濶を叙す、先師の寫眞を拜し、殊に臨終の時拜せられし若我成佛十方衆生乃至衆生稱念必得往生の文を拜し、其終焉の有樣を聞く、髣髴として同師の世に在るが如し、翌二十六日午後講話す、各宗聯合の會あり、先師の力を盡されし會なり、遠近の道俗來り集る、先師の感化普及すること著し、會後多大の厚意に浴しつゝ龍緣君に送られて香呂驛より乘車し、須磨明石の明月を空しく夢寢の間に過き去りて夜神戸に着し、山本陸治氏の迎を受け、諏訪山本願寺別院に入る

神　戸

二十七二十八日の兩日神戸靑年會の催によりて講話を爲す、朝晝晚の三回にして題は佛敎之眞髓なり、乃ち前號社說に揭げたるもの是也、眞面目なる求道者、靑年の集會にして諸方面の人々と共に大慈を打ち仰ぎぬ、二十八日夜湊川支部に於て自然法爾章につきて講話をなす、神戸靑年會は繁忙なる實務中に於て淸らかなる光明を喜ひつゝある理想的の團體にして、春も一度講話なせしが、今や益々諸方面に支部を立て將來好望なる靑年會なり二十九日朝諸氏か懇切なる送を受けて神戸を辭す、

歸　省

一汽車京都に立寄りて藤井君外同朋諸氏と面會し、午後江州故鄕に歸省す、母上健在にて妻及弟は數日前東京より歸省して母上に侍す、恭しく父上の墓に詣で、かねて新法主臺下より賜はれる父上の法名表裝成り隣寺を招待して播きの式を行ふ、黃昏一家相携へて晚凉を納る、神戸より齎らし來れる籐椅子に凭りて下庭園に團欒して、往を思ひ、來を語り、佛恩の辱じけなきを語る、南無阿彌陀佛、

金　澤

三十一日故鄕を辭して亦北陸傳道の途に上る、金澤は我有緣の地なり、去る明治三十一年初めて傳道に上りたる時、北陸佛敎靑年會の發會式に連りたる已來同地に傳道せしこと幾回

なるかを知らず、しかれども今回は越中講習會に赴くの序を以て妻をして其祖塋を展せしめんが爲なりき、翌一日尾山、大谷、東別院、卯辰、天德院、野田山等終日參詣し、妻は直に江州に歸りて母に事へしめ、越中に向ふ、かねて約せし如く、學舍の藤井覓君修養の爲に夏季傳道に同行の望に任せ、恰も列車中に相會し、加越の山野を眺めつゝ薄暮越中福野に着し、晩凉を趁ふて井波に向ふ、噫何れも屢々傳道したるの地、變らぬものは大悲の惠なりけり。

井　波

井波講習會は一面には敎育者と一面には宗敎家と聯合して二者の共働を實現せんが爲に開かれたるもの也、即ち井波別院瑞泉寺の連枝淨曉院大谷瑩亮師多年獨逸に遊び敎育學を修め業成りて歸朝したまひ、自ら敎育史の梗概を辨じ、特に泰西宗敎敎育の力多きことを講せらる、予の着したるときは南條、池原の兩講師既に出立せられたる後なりき、予は二日より五日まで午前は講話を爲し、午後倫理と宗敎の關係につきて辨す、藤谷、齋藤、淺井、藤田、大須賀の諸師皆各種の題目の下に講ぜらる、會員講師日夕相會して信仰を語り、頗る有益なりき。

西岩瀨

五日午前井波を出立して、富山に乘杉敎存君に會し、午後西岩瀨淨光寺齋藤玄映師の寺に詣して、親鸞聖人の名號本を拜す、是世に傳ふる光明本に對すべきもの、中央大字の六字を圍みて十二の六字名號を畫けるもの、これ彼の光明の悲母に對して尊號の慈父の御姿なり、齋藤師の請に任せて光明名號の因緣につきて講ず、別に臨みて某師贈りて曰く、名號是父光明母、因緣令吾生信心、君來訪友豈無意、石子當年遇道心。

大久保

匆々として西岩瀨を辭し、人車南に馳すること數里、人家疎にして老樹道を夾み漸く山鄕に入る、夕に大久保に着す、素封家吉山岩雄氏に宿す、嘗て小松宮殿下の御泊ありし家也、同日夜學校に於て青年會の爲に演說す、藤井君先づ所信を述べ、予泰西青年會を紹介し、矯風と信仰につきて述ぶ、人情敦厚にして歡待頗る渥し、佛恩を感謝しつゝ眠る。

古　川

六日朝內佛勤行の後其家庭に於て法話し、人車を雇ふて越中より飛驒に向ふ、道漸く上りて山にかゝり峠を越へ、溪に沿ひ、崭巖の上を行く、恰も獨の棧道に入るかと疑ふ、而して綠樹鬱々として眼界を蔽ひ、身亦綠なるかを感ぜしむ、船津に泊す、實に淸凉地也蚊一疋もなし、古昔籠橋のありし名所、七日朝出立、神原峠を越えて午後古川驛に着す、古川には三十二年大日本同盟會を組織せし時成立せし飛驒佛敎同盟會あり、爾來繼續して今日に至る、晝夜二回演說を爲す、質樸の風、敬虔の情、說く者をして感に堪へざらしむ、桑月一心師主として斡旋せらる、學舍の牧田平太郎君及び德風會の委員たりし文科大學の奧田正造君來り迎へらる。

國　府

八日朝古川に法話して出立、國府に立寄り小學校に於て講話を爲す、丸々したる山、こも〳〵したる樹、自然の風物恰も畫圖の如し、かくの如き地に住める人も自然に近く、かく

の如きの人の信ずる宗敎も自然に近し、予は飛驒に入りていたく感じたるは自然の感化なり、素封家某氏宅にて午餐の饗を受け、亦直に高山に向ふ、

高　山

牧田君に嚮導せられ、路に眞宗大學卒業の小原了君工學士靑木一郎君に迎へらる、午後高山別院に着す、聽衆既に堂に滿ちて待つ、乃ち演說す、爾來十二日に至るまで、朝は法話午前は佛敎の眞髓を講じ、午後一般の爲に講演し、夜は靑年の爲に演說す、其間一夜上枝村に往きて講話せり、高山は實に山水明媚の別乾坤なり、其趣京都に髣髴たり、殊に東山一面幾多の寺院疊見出沒するの風致人をして南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中の句を想起せしむ、殊に國分寺の古刹坐に人をして低徊去る能はざらしむ、廣瀨中佐の銅像は山上公園にありて眼下に高山をみ、英姿人をして欽慕せしむるものあり、同地中學に同僚依田喜一郎君校長たり、他鄕故人に遇ふの感あり、四日間休みなしに傳道して十三日朝吉木、奧田、小原君に見送られ牧田君は遠方まで同行したまひ相別れてより予と藤井君とは遠く信州の旅に向ふ、

野麥峠

山漸く高くして、溪流益〻深く、人家疎にして晝猶靜なり、山自ら幽邃にして樹木鬱蒼として綠滴るばかりなり高山より六七里程の所より車通せず、人を雇ふて荷を持たしめ、山路を辿りて行く、夏草茂りて人を沒し、淸泉巖角より迸り出てゝ草鞋を濕ほす、山を越え谷を亘りて行く、忽にして驟雨沛然として來り、身は忽ち白雲の中に在り老杉森々として暗く、太古より斧斤の入らざるが如し、溪流潺湲として山下に響あり、忽にして地平坦にして野の如し、此に人家あり、人の居住する所として日本一の最高所なりといふ、市街としては飛驒の高山と信濃の松本は最高所なり、而して野麥峠は其中間にある最高住家の存する所なり、日暮れて人の顏を辨ぜず、荷持夫一軒の家に就きて宿を求む、乃ち其家に入る、老媼老翁蓬髮垢面爐を圍みて語る、殆んど別世界に入るの想あり、此邊一面米を產するなし、皆高山地方より運ぶ所なり、多く牧馬を以て業とす、此夜宿にて馬を賣買す、十三日朝野麥を出立し、益〻深山に入る、野草花開きて路を莊嚴す、かゝる深山に空しく開きて空しく落つる花もありけり、山を越え信州の境に入りて眼界漸く開く、山の端を上り下り千曲川に沿ふて下る、白骨より來るの川と合するの所奇峯怪巖天に聳え、道に臨み、或は壁の如く、或は疊の如く或は飛ばんとし或は落ちんとす、千尋の岩上亭々として松の聳ゆるは蓬萊に遊ぶの想あらしむ、日暮れ路遠し、暗を辿りて稻田に宿す、十四日朝同所を出立し、島々に着す、是より馬車を雇ふて松本に着す、此に至りて三日間の旅行遂に全ふするを得たり、是より汽車に乘し、窓前姥捨更科の奇勝を賞しつゝ長野に乘り換へ、午後豐野に着す、佐崎聿喜小林金吾の兩氏出迎へらる、乃ち久濶を叙し、中野に着す、

中　野

中野館に宿す、小林金吾氏を初め十善會の人々に迎えらる、本年靑年聯合會の時十善會を代表して出席せられたる山本愼次郎氏主として斡旋せらる、劇場に於て公會演說會を開かる、山本氏開會の趣意を兼ねて大會の報告を爲し、藤井君東都信

仰界の模樣につきて話し、予は人生問題より信仰問題につきて述ぶ、中野町は五年已來常に往復通過せし所なりしが、遂に因緣熟し來りて此會を開くるに至、是皆自然法爾の佛陀の御力なり、翌十五日朝早々佐崎君に伴ひて常盤村に向ふ、

常　盤

去る明治三十五年、求道學舍を開けるの年佐崎聿喜君の東京に來られしは、たしかに此地に佛緣を結びたる初なりき、其翌年より本年に至るまで五年間毎夏必す修養會に出席せり、今年亦宿緣熟して八月十五日を以て常盤村の小學校に於て開講せり、本號附錄に揭ぐる眞宗慶嘆は言々句々佐崎聿喜君の筆記したまひたるもの也、十五日より二十一日まで毎日午前講話を爲す、宿は昨年と同じく淨土宗光明寺、院主病篤しと雖、自ら歡びて予を宿せしめたまふ、其志洵に尊し、以爲らく我化導すべき人を導きたまふ、まことにありがたし、南無阿彌陀佛をすゝめたまはること何よりうれしと、佐崎氏高梨氏太田氏兄弟日夜侍坐したまひて藤井君もろとも佛恩の廣大なるを讃仰し奉る、其間太田の眞宗寺、柳原の正行寺に於て法話を爲す、何れも五年已來有緣の寺、俯仰慈光の極なきを嘆ぜずんはあらざる也、二十一日の午後は中條青年會にて講話を爲す

飯　山

二十二日午後水島小學校にて講話を爲し、爾來二十四日夜に至るまで午前は信仰座談會を開き、午後は講話、晩は殊に青年の爲に演說を爲す、寺は西敬寺、住職岩倉氏は日露戰爭中憲兵として出征したまひ、後に韓國に駐劄して傍信仰を說きて大に邦人間に傳道せられたる人なり、又宿は道具屋山本幸吉氏祖父幸右衞門氏より一族大に篤信なり、西敬寺には宗祖御自作の聖德太子の靈像と武田信玄の寄附にかゝる太子及び日羅上人連座の御影あり、其他宗祖の眞筆を拜したてまつる、今年は由來聖德太子に御緣多し、井波瑞泉寺に於て　後小松天皇恩賜の聖德太子南無佛の尊像を拜し、巨勢金岡の太子傳繪を拜せり、愈々出立に臨みて聖德太子二十句の偈文を嘗て善光寺へ太子の奉られしといふ事實につきて知ることを得たり、他日この事につきて詳說せん、非常の靈感を以て滿たされつゝ二十五日出立越後に向ふ、

水　原

飯山より道中出水の爲め、時間の遲れんことを慮り、予一人車を飛ばして辛ふじて豊野停車場に着するを得たり、汽車信州の山を越えて越後の海を見るに及びては宗祖の御苦勞を想ひて海風腸にしむ心地せらる、驛々にて越後有志諸氏と會談しつゝ新津に着せば長谷部宗信氏を初め敎育會の代表者出迎はる、乃ち日暮晩凉に乘じて水原無爲信寺に入る、嗚呼是れ香樹院師の一代化導せられしの寺、嘗て五年已前傳道して此に來りしが今亦佛祖の冥助によりて再び此遺跡を踐む洵に感謝に堪へざるなり、佐藤一家、無爲信寺及敎育會の人々待受けらる、寺內淸淨にして靈感言はん方なし、是より毎日午前學校に於て倫理問題と信仰と題して七日間講話を爲し、午後は歎異鈔を講本として法話を爲す、宗祖無爲信坊に賜はりたる弘長元年十月御自寫の御肖像を拜したてまつる、偉大なる半身の御姿、珠數をつまぐりたまふ御姿勢面り宗祖に見えたてまつりし感あり、香樹院師筆夢想の記を初めとして其感得の佛像等拜見したてまつる、屢々香樹院師の墓前に詣でたてまつる、碑は香山院師の筆、龍溫祐秀兩師の當寺に學びし昔を偲ぶ、一週間一面には青年の信仰起り、一面には一般の信者深く歎異鈔の敎化を仰ぐ、三十一日正午講習會に於て懇親會、無爲信寺に於て茶話會を開かる、感謝極なし、門を出づる、實に遲々として行くの感あり、嗚呼大德の住はれたる寺は幾代の後までも感化の德のしみ渡れるこそ尊ふけれ、

長　岡

長岡に着するや淸澤氏及其隣寺の某師及び野本恭八郎氏出迎はる、野本氏は五年已前長岡に來りし時より親しみ深き信仰家にして、佛典を涉獵せらるゝこと洵に廣し、二日より一週間午前は米北敎學會の講話、若くは青年會、婦人會あり、午後は商業會議所に於て講習會を開く、敎學會に於ては横田常力君は眞宗の梗概につきて講話せられ、予は自然法爾章につきて講話す、午後は人生問題と信仰につきて講す、又一日古志郡佛敎婦人會の聘に應して演說す、一日桑田從尊君の嚮導によりて柿崎の宗祖遺跡に詣で、海濱に步し宗祖の昔を思ひ出てて感謝の稱名口に溢る、當時島田蕃根翁の計に接す、亦翁及ひ聖德太子につきて一夕講話す、長岡は近年石油產業の發達につきて大に繁華に赴きしの地、將來必ず、信仰問題につきて大に醒覺せざるべからざるの地、八日晩餐會を開かれ、八日午前に講話後、停車場に見送らる、瀛車延着の爲め、旅亭に憩を取り、懇話す、嗚呼淸風一陣大悲の恩澤たらざるなし、

柳　橋

見附停車場に下車して、柳橋鷲尾敎導氏の寺に着す、氏敎誨師を辭して鄕に歸るや學舍を訪ふて眞塾に求法し、爾來自ら道を求め、屢々書信の往復あり、乃ち親しく氏と共に信仰を喜ぶは其主因たりしが、亦同時に講話することゝなれり、此日炎熱燬くが如し、老少男女群集を爲して來る、其質樸の風、敬虔の姿坐ろに聖人在世の昔を想ひ出さしむるものあり、亦熱心なる青年僧侶の來り訪ひたまへるあり、夜深まて大悲を仰ぎて古往今來につきて語る、翌九日朝法話後出立小倉氏と同車して三條に着す、

三條、吉田

江部法龍君出迎へらる、別院に於て豊米北敎學會の主催にかゝる講演をなし、夜は上宮敎會の主催にかゝる講演を爲す、長岡已來田宮宗城氏敎學會主任者として熱心に聽講せられ、亦土屋法氏來聽せらる、一夕信仰を語り、又信仰を以て世諦を經營すべきことを述ぶ、十日曉藤井君と共に起き吉田に向ふ、氣爽かにして天淸し、河流の洋々たる、平野の茫々たる、連山の蜿蜒たる、見るもの、聽くもの感謝の料にあらざるなし、吉田は學舍有緣の地なり、學舍にありし丸山淸作君の兄君出迎ひたまひ、又學舍の人吉田耕輔君、其友原熊吉君出迎はる、乃ち丸山君の宅に宿す、丸山君吉田君に伴はれて、彌彥山に詣づ、彌彥神社の在る所、宗祖流罪勅免の年詣でたまひし所なりといふ、轉た當年を回想して感極りなし　又國上山に詣づ、越後二古刹の一也、良寬上人の住せし所、歸來佛敎同盟會の講演を爲す、此同盟會亦三十二年已來今日に至るまで繼續する所、其熱心なる感ずべきなり、人情の敦厚亦掬すべ

し、予に同行せる藤井君は猶宗祖遺跡に詣でんとの志あり、予も亦其志あるも時日許さゞるを以て之を果すを得ざるを以て、特に同君獨り學舍の人富岡君を訪ひ、宗祖草庵を結びたまひし鳥屋野に詣することゝせり、越中已來起居舟車飲食を共にし、閑あれば共に信仰を語り亦到る處講話をなし、亦予が爲に補助すること多し、然れども、此行全く同君自己の信後修養の爲にして越中已來恐くは一回だも熱心に聽講せざることなし勉めたりと謂ふべし、果せる哉長岡已來心境頓に開けて信樂の念濃也、予乃ち十一日曉獨り柏崎に向ふ

柏崎

十一日より十三日に至る三日間は米北教學會の主催により柏崎に講習會を開かる、午前は法話を爲し、午後は講話を爲す、又二日濟邊憲瑞氏の寺につきて講演す、氏は米北教學會の主任也、抑々柏崎の地たる近年僧侶求道心を高む、蓋し越後中に於て信仰問題の現狀として最も有望なるべし、午前は老若男女群集を爲して參詣し、敬虔の涙を湛へ午後は青年求道の人眞面目の態度を以て感激の涙を揮ひ基督教の牧師も喜んで親鸞聖人の信仰を聞き新聞紙上に信仰問題の光明を語る、予も二ヶ月の間傳道の最終として靈感胸に滿つ、嗚呼我德薄くして修養少し、唯大悲傳普化眞成報佛恩の一念は遂に此二ヶ月間を全ふせしめたまふ、而して到る處熱心に信仰を求め、期せずして法莚忽ち開かる、一として皆佛祖冥々の御力にあらざるはなし、而して我蒙る處の恩澤皆如來聖人御同朋の賜たらざるなし、若し如來威神を加へたまふにあらずんば何を以て此傳道を全ふせんや、特に處々に不可思議の靈的事實に遭遇し、宗祖粉骨摧身の遺跡に詣し、廣大の御導を蒙る感謝に堪ゆべからず、

柏崎を出立するの時茶話會席上聖德太子二十句偈文につきて靈感を話し、出立、夜汽車中岩倉惠觀氏に會し、共に長野に泊り、山本幸吉氏所藏の二十句偈文を聖德太子より善光寺に奉られし謄寫を拜見し、翌朝共に善光寺に參詣し、感謝の誠を捧げ歸來恭しく、之を拜寫し、岩倉氏と別れ、上田に下り伊藤松濤氏を初め上田求道會の同朋と會す、恰も伊藤傳兵衞氏東京より歸らる、乃ち亦二十句偈文につきて講話し、直に出立、輕井澤、碓氷の秋草を眺めつゝ感謝の稱名繰返し、十四日午後八時歸舍す、學舍一家團欒相見る和氣洋々、謹みて深重の恩德を感謝し奉る、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、

求道學舍日曜講話題

信心歡喜	九月十五日
他力の簡要	同　廿二日
光明名號の因緣	同　廿九日
觀佛本願力	十月六日
他利利他の深義	同　十三日
歸悅	同　二十日
智慧と方便	同　廿七日

第二求道會士曜講話題

利他之意義	九月廿一日
光照	十月五日
絕對の法則	同　十二日
虛誑の者は信ずべし	同　廿六日

眞宗慶嘆

序言

私は去る三十六年より今年まで引續いて年々此地方に於て信仰の話をすることゝ丁度五ヶ年、自ら謂へらく是は唯事に非ず全く佛天の御計らひである。實に當飯山には深厚の因緣を有するものである。抑々自分が信仰問題の爲めに苦しめる時には當地方出身の文學士吉田靜致君が側にありて、親しく色々助けて下さつた。私は同君とは久しき以前から無二の親友であつたが、この時は殊に其身を忘れて盡して下さつた。其後、回顧すれば早九年以前の事となりたが、明治三十二年大日本佛教徒同盟會の當時、恰も飯山の對岸の山に初雪の少し白く見へた折、當地方へ初めて參りました。それから西洋へ參りましたが歸つて來たのが三十五年、此時東京に於て佐崎君に遇ひましたのが端緒となつて、次の三十六年には東北地方に傳道して、酒田から、越後の方を經て東京へ歸る途中、慥か七月二十二日と記臆して居りますが、太田村の眞宗寺、柳原村の正行寺に於て晝夜にわたりて演說を致した。これが御當地の修養會の濫觴である。翌三十七年、この年は東京の求道學舍では歎異鈔を講話して居つた、尤もあの年に東京の方では求道學舍計りでなく、其他の人々の間にも歎異鈔を頻りに讀んで居りたことであつて、當地の修養會でも正行寺眞宗寺に渉りても私の講話は、矢張りその歎異鈔でありた。彼の「懺悔錄」は其第一日開題の講話筆記である、それより私は東京へ歸りまして、親鸞聖人の教行信證を大に味はせて戴くことになりましたて、其翌年即ち第三回の此修養會の講話は、教行信證に就て各卷の大意を話させて頂きました。然るに第四回即昨三十九年は鳥渡した動機から『人生と信仰』といふことに就て話すことになりましたが、其筆記は昨年『求道』の秋季號として世に出しました。有り樣に申しますが、昨年の講話も別にかうといふ腹案もなしに、唯だ人生の問題に就て何氣なく打明けて自分の所感を述べたに過ぎぬのでありましたが、圖らずも全國求道者の方々は非常にお喜び下された。月刊の雜誌としては思ひきつて多分に印刷したのですが、それが今日ではモー一冊も無く成つて、改版を致せと折々促されて居りまする次第です。此の如く年々不思議なる御引合せに預るは、よく〳〵深い御因緣と感ぜざるを得ません。就ては今年は成るべく充分に私の現今の思想を有りさり傾けて見た

いと存じます。

竊に思ふに人生何時如何なる事が出來るか、我々の計り知るところに非ざるは勿論、宗教上にしてからが、必しも各地に巡回傳道をせねばならぬにも限るまい。又何時中央に居て大に爲さねばならぬことが出來せぬとも限られぬ。であるから唯今かく因緣の整へるを幸に自分の所思を遠慮なく吐いて仕舞ひたいと思ふのである。それで今題目を選ぶに就ても色々と思ふて見たが、結局昨年の如きものよりは一層正面より自分の信仰を有りの儘に打出して見たいと思ふのである。それには從來の佛教の語を用ゐるのが一番適切正確である。從來佛教の用語は餘り耳慣れてどうも適確な感じを與へなくなつたやうであるから、内容は古來のまゝでもそれを新しい言辭で申し述べると諸君の耳に入り易いかと思はれた。昨年の秋季號が大に世間に迎へられたのは、一つは言辭を新しくした爲でありて、要するに彼の題目からが多くの人の注意を惹いたのであらう。從て今年も諸君の望に叶はせやうかとも思ふたが、退いて考ふるに、自分は先月來京都より廣島、神戸、越中の井波、飛驒の高山等數ヶ所で其方法で話しましたが、御當地は全く他の方法で話したい、抑〻此會は前後通じて七日間、殊に專ら講話に力を入れてあるのだから、私も此席で私の腹一杯の事を打出して申して見たいのであります。從來の歴史上、恰も私の思想を發表する其初まりが此修養會講話の席でありました。彼の懺悔錄も、昨年の秋季號「人生と信仰」も、何れも此修養會で發表しましたものが、漸々廣く世間に及ぼして、之によりて多くの人が信仰に入ることにもなつた次第であります。

そこで私が是非一度辯じたいと思つて居るのは、親鸞聖人の御事である。尤もこの事を完全に辯じ度いのが、我終身の理想である。私はこゝ十年以來信仰を味はゝして頂いて居るが、殊に西洋から歸つて來て以來、愈味へば愈味の深いのは親鸞聖人であります。それであるから親鸞聖人といふ方は大略これ丈である抔と申すことは到底出來ない、聖人の研究とか、聖人の傳記とかいふものを書いてはどうかと屢人から勸めて下さることもあるが、未だ自ら筆を取つて一冊の書として世間に問はうといふまでに私の心が進まない。三年前の此修養會にも聖人の御著述の彼の教行信證に就て申述べたが、迚も筆記の出來るやうな完全な辯じ方にならなかつた。實に聖人の信仰は味へば味ふ程非常に味が深いからである。本年

も實は早い内から講話題目を通知するやうにとの求めてあつたが、つい今日迄申出さずに仕舞つた。これは私が杜撰で申出さぬのではない、實は私自分の心に滿足の出來るやうに申されなかつたのである。一體豫め今度は如何なる題目で話さうか、どういふ鹽梅に述べやうかなどゝ、色々と料理するのは、自分の說くところを以て對手の人の心に適合させやうとするので、實の處は凡夫の計らひである。倩案じ見るに從來深い因緣の結ばれてある當地に於て、頗る無遠慮に自分の信仰のぎり〳〵を話させて頂くのは、唯眼前の少數の人に聞いて貰ふ計りではない、一歩進めて云へば此席の講話が直に全國の多數の求道の人士に感化を及ぼすことであるから、自分は殆ど全國の求道者全體に對して眞面目に自分の信仰を打明ける心得で、此講話に取り掛ることである。自然多少の了解し難いこともあらう、又古いとか新しいとか色々の御感じもあらう、なれどもそれらに拘らず、兎に角私が現今頂いて居る如來の御惠みの有り丈を用捨なく忌憚なく發表しよう。其處で題目の擇び方もいかにも古い形式であるが、兎に角其各題の下に於て、私の信仰に入る前から、入信の當時、及信仰以後人生上に種々に經驗し來りて、如來の御惠を愈喜ばして頂いて來つた道筋をあとつけて見るつもりである。尤も此事は求道雜誌を年來讀み玉ひた方々は、雜誌の上に現はれた筋道を味つて下されゝば、直に解つて來ることであるが、何に致せ此度は自分が佛陀の御惠を喜ばして頂いて居る實際の有樣をば、親鸞聖人の示し下された其言辭に就て、直に御話しいたすのであります。

よりてこの度の話をば一面から見ると全く聖人の仰せの言辭であつて、一にも二にも聖人の事を何かなしに云ふので、私自分のことでは無いやうにもあらうし、又他の一面から見ると全く私自分のこと計りを云ふので、一向に聖人の仰せでないやうにもあらうが、私自分の信仰と聖人の御示しとは、全く區別の出來るものでなくして、自分の信仰の味が即ち教行信證の味であり、又教行信證は全く聖人一代の人生の上に於ける活躍である。換言すれば教行信證の上に顯はれたる親鸞聖人は、恐れ乍ら又直に私の人生上の實驗と一味であるといふことであります。かく申せば正面より眞宗と云ふ如きも、古い〳〵言辭であり乍ら其内容は極めて新しいのであります。古い思想をば新しい言辭で云ふもよいが、是からの私の話は尤も古いと人の思ふて居る言辭を以てし乍ら、それが

却て私には頗る新しく味はれて。而も其味がなか〳〵深いのです。そのかはり注意すべきことは、經文にかくあるとか、聖人がかく書かれてあるからといふのでなしに、若し古い新しいといふことが云へるならば、佛陀の御惠は實に古い、その古い佛の惠が私にとりては生々として至極新しく味はれる。それであるから其御惠を頂いた道筋をば、是迄古い思想を新しい言辭で云ふたとは反對に、語辭は古い〳〵言辭てありて其味は新しい生き〳〵とした眞實の佛陀のみ惠みの泉を飲むやうにしたいのであります。一面から云ふと甚意地のわるい言ひ方のやうであるが、實際は新しい言辭を以て古い思想を卽がしむるよりも、却て古い言辭の上に新しい意味を味はしむるといふ方が、信仰としては至當である。切言すれば今日では他力眞宗を古るい言辭と思つて居るが、聖人が初めて他力本願を說き玉ひた當時は、屹度人生上に新しくあつたに相違ない、要するに聖人の御心が生きてあつたのである。其聖人の生ける信仰を以て書き殘された信仰の書を、今日此の如く私共が味ひ奉ることの出來るのは、全く聖人の御惠であります。聖人が「敎行信證」の總序の尾りに

爰に愚禿釋の親鸞、慶しき哉、西番月支の聖典、東夏日域の師釋に、遇ひ難くして、今、遇ふことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり、眞宗の敎行信證を敬信して、特に如來の恩德の深きことを知りぬ、斯を以て聞くところを慶び獲るところを嘆するなり。

と仰せ置かれたることは、私にとつて切に有り難く味はせて頂くところであります。

> 竊に以みれば、難思の弘誓は難度海を度するの大船、無碍の光明は無明の闇を破する惠日なり、然れば則ち淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰はれて、釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり、斯れ乃ち權化の仁齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闡提を惠まんと欲す、故に知んぬ、圓融至德の嘉號は、惡を轉じて德を成す正智、難信金剛の信樂は疑を除き證を獲しむる眞理也、爾れば凡小修し易き眞敎、愚鈍往き易き捷徑なり、大聖一代の敎、是の德海に如くは無し、

眞宗慶嘆

眞宗とは一の宗旨の名であつて、禪宗にもあらず淨土宗にもあらず眞宗であると云ふたのに違ひない。去り乍ら親鸞聖人が初めて眞宗といふ名を附られた當時は、上人の眼中では眞言宗でない、天臺宗でない屹度眞宗であると、簡びを附けて相對的に名けられたのであらうか。私は決してさうは思はない、成程一應はそうも云へるが、去り乍ら今日の我々が思ふやうに淨土宗に向つて簡びをつけて、それに對して自分の弘むるところを眞宗と名けたといふのではない。眞宗といふ名は讀んで字の如く、眞實の宗敎であると仰せられたのであつて、今日の言辭でいふならば、佛敎の眞髓といふと同じ意味である。眞宗は一代佛敎の精髓である、佛敎の甘味をランビキにかけて絞り上げたるところが眞宗である、實に佛敎の生粹といふべきは眞宗である。

抑眞宗の二字に就て、其源の淵源を尋ぬると、善導大師は『眞宗回遇』と云ひ、又『念佛成佛是眞宗』と云ふに始まるのであるが、この時に於ては眞宗といふが一の宗派であつて、他の宗旨に簡んで別に一宗を立てる抔といふ意味は勿論あるのでない。眞實に佛の惠を我心に味ひ口に稱ふる計りであるが、其心に佛の惠を得たる信仰そのものが卽佛敎の精髓骨目であつて、此意味から眞宗なる名稱が出來てある。乃て眞宗といふ言辭は實に味が深い、此點に就ての詳論は本論に讓るが、一言いふて見れば、法然上人が淨土宗を立てられた當時は、非常に強く外聖道諸宗に對して淨土宗といふ一宗を立てたのであつて、如何にも對抗的に見へるけれども、退て靜に法然上人の胸中を察するに、上人の胸中に所謂淨土宗の顯はれ來つたは全く絕對的である。法然上人は今迄佛の惠の無かつたところへ、絕對に佛の惠を云はん爲に、淨土宗の名を立てたのであるから、或意味に於て非常に極端に淨土宗と云ひ立てゝ居られるが、かく非常にきはどくなけねば佛の惠が顯はれて來ぬから、かゝる態度に出でたのである。上人は淨土宗といふ名前を立てることが出來るか出來ぬかといふことまて論じ定めて、聖道門の諸敎を捨てゝ別に念佛一門を押立てられた。之に反して親鸞聖人の眞宗と云はれたのは、法然上人の如く際利く云ひ立てたのでなく、單に聖人の味はれたる他力の眞髓を云ひあらはしたに過ぎぬのである。尤も親鸞聖人の上にも『聖道權化の方便』と云ふやうなこともあるはある

が、これとても他の宗派に對して際立てるよりは、他の宗旨の所談の如何に拘はらず、聖人の眼に映じ來る佛の惠の眞實を味ふた宗旨であるといふに他ならぬのである。それであるから聖人の意を以て云ふたならば、一代の佛敎數千の經卷は、佛の惠の眞實を種々に說き顯はしたのであつて、八萬の聖敎も畢竟は佛の惠を書いたので、それ以外に一物なしといふことになる。聖人の眼中には八萬四千の聖敎中、此佛の惠が肝腎である、佛敎といふはこれ計りである、此外のものは嚴密の意味でいふと佛敎でない、換言すれば八萬の聖敎といふも、唯この佛の惠の一つが種々に現はれ來つたのであるから、ランピキにかけて絞り上げて見れば、唯この佛陀廣大の惠一つになつて仕舞ふのである。かく云へばとて外のものを捨てゝ仕舞ふのではない、それらは皆この佛陀廣大の惠みの中に含まれてあるのであるが、結局の生粹は佛の惠一つである。この事は敎行信證一部の上に充分顯はれて居る。

親鸞聖人が法然上人より敎を受けられた有樣を傳文に、

眞宗紹隆の大祖聖人源空ことに宗の淵源をつくし、敎の理致をきはめて、これをのべ給ふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし〳〵けり。

といふてある。聖人がこの時初めて佛陀廣大の惠みに氣附いて心中に味ひ來りたところのものは、全く一代佛敎の精髓である、一代佛敎は含有的に佛の惠を說いたのである、啻にそれのみでない、見るもの聞くもの、此の人生萬般の事ども、皆悉く佛の惠の外はなかつたのである。此の如き信仰の圓熟したるところから現はれ來つたが、『敎行信證』一部の著述であるから、淨土眞宗といふは或る一つの宗旨を說くにあらず、唯佛の惠の生粹を傾けたので、これが本來の眞實の宗敎である。よりて聖人は

眞實の敎、淨土眞宗

と云ふて置かれた。私も此眞實の宗敎に過はせて頂いた上は從てその廣大の佛敎を喜びて、口を極めて之を讚歎せざるを得ないのである。一體宗敎のことは慶喜讚嘆の他は無いものである。經文を講義するとか、一部の聖敎に就て論究するとかいふことは、宗敎には不似合のことであつて、親鸞聖人の上で見ると全く慶喜讚嘆を爲さるゝ計りである。して見れば此度の講話も、私が心に味はゝせて頂いて居る佛陀の惠みの泉を味ひつゝ、之を讚美し稱へるより外は無い。

一　如來本願

眞宗は佛敎の精髓である、もう一つ云ふならば佛の眞實そのものである。其佛の眞實とは何であるか、親鸞聖人の言辭で云へば回向である。『敎行信證』敎卷の首に曰く

謹で淨土眞宗を按ずるに二種の回向あり、一には往相二には還相なり、

親鸞聖人の一代は聖人の信仰の示現であつて、其一代の思想言動悉くこの回向の二字に攝り盡して餘蘊なしと云ふべきである。味へば味ふ程味の深いのは此回向の二字である。私はこの回向といふ文字に就いて深く感じて居る。然る所以は、現時信仰の問題は皆この回向の字に歸するからである。此二字は寔に肝腎の文字である。

常に云ふ如く信仰問題は必ず人生問題から來るものである。釋尊は老病死を見て信仰問題に着目し玉ひ、親鸞聖人も九歲の春、深き無常の感に打たれて出家し、十九歲の時に及びては磯長の聖德太子の廟窟に參籠して、『汝命根應十餘歲』の靈告によりて、いよ〳〵無常の感を切ならしめ、信仰を求むること益急なるに至り、法然上人は仇敵の爲に父親を打たれたのが發心求道の動機となつた。各宗派何れの祖師の求道も必ず人生問題を動機とせるは云ふに及ばぬことである。如此人生が苦であるとか、人が互に怨み合ふのが苦であるとかいふ種々の事柄から氣がついて眞に依るべき道を求めんとして、色々と苦しんで見ると、人生百般のことは迚も自力では行かぬことになつて、遂に佛陀に向つて來る、かく佛に向つてどうかして安心を得たい、落附きを得たいといふ、眞に道を求むる心、所謂發菩提心になつて來て、それからが正しく信仰問題である。法然上人と云ひ親鸞聖人と云ひ、全くこの點で苦しまれた。此問題は簡單のものなるが如くて、實は大に然らず、此問題の解決せるところ、即ち信仰問題の解決し了つたところである。私の苦しんだ有樣は『懺悔錄』で諸君の充分に御承知のことならんが、私も初の間は自分は善いことが出來ると思つて大に得意になつて居つた。然るに後に及んで苦しみに陷り、自分の立場を失つて以後半年以上の生活は、どうか安心を得たい、信仰に本づきたいといふ、この求むる心の爲に頻りに苦しんだのである。回向といふ文字はこの狀態を善く顯はした文字であります。

回向とは讀んで字の如く自分の心を回はして佛に向けるの

で、從て自分の作すところの善根も功德も佛に向けるのである。換言すれば人生百般の考を回らして佛の方に歸向する。之を修行的から云へば百般の自行を佛陀に捧げるとか、他の爲にするとかして、寸毫も自己の爲にせぬが回向といふ文字の正當の意義である。彼の經典讀誦の後に方りて、『願くばこの功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成せん』といふ回向文を唱へるがそれである。ところが此回向といふ文字が此の如き意味なることは誰も皆知るところであるが、實際に此回向心を進めて信仰に入ることを得べきであるか、此回向心を以て人に對し事に對して行つていつた最後に安心することを得べきか如何かといふに、それは斷乎として駄目である。若しそれが能く爲し得ると云ふならば、其人は佛陀である。昨年の講話にも種々の方面から、この點を繰り返して論じたが、これを一言にして盡せば、相對的のもの即ち家庭問題とか、勞働問題とか、其他何れの點からでも同樣であるが、人生總ての問題から信仰の問題に向ふに方りて、或は理想的社會を作つて見たいとか、道德をしつかり修めて聖賢の位置に立たうとか、兎に角人が完全に道德を行ひたい、是非この事はかくなさねばならぬ、萬人に對して偏することなく十分に正しく盡さねばならぬ、といふ精神は廣大なる回向心であるが、何事にも自己の回向心から出て來るときは、終に自らの立場を失ふて倒れねばならぬ。これは非常に肝要なる點である。現今の青年にして苟も道德に向ひ宗敎に向ふものは、皆自身を捨てゝ他の人に向ふか、自己を抛つて佛陀に向ふか、何れにしても所謂回向心を以て勵んで居ることであるが、それが尙ほ自分が能く爲し得ると安んじて居る間は何事もないが、一旦自分は迚も完全に之れを遂ぐることは不可能であると氣附いて見ると、こゝに大なる苦に陷らざるを得ない。此場合になつて見ると、自分は到底出來ぬから止めるといふことも出來ず、止めずにやつてのけようとしても猶出來ず、進退谷まつて遂に立場を失ふに至る。世間には動もすれば他力とは自分の力は駄目であると　投遣りに仕て居るのをば他力まかせの生活である抔といふて居るものもある、それは大なる誤である、そんなことが他力といふべきものではない。それ等は例せば道を行く人が、足進むこと能はざるに至つて、途中に坐り込んだ如きものであつて、他力でどん〳〵進んで行くものとは甚しき相違である。坐り込んで仕舞つた人は、他力即佛陀の偉大なる力の見えぬものである。

私自分の經驗から云ふと、あゝせねばならぬ、こうせねばならぬと色々と考へたが、つまり何事も出來ぬ。されば茲で中止することも出來ぬ。そこに唯一つ現はれ來つた道がある。それは何んであるか、こゝは口で云ひあらはしきれぬ點であるが、强て云へば自分には到底行べぬから、乃で眞實の佛の惠に依るに至つた、佛陀の御救を頂いたのである。併しもう一つ云はねばならぬことは、此場合でも佛の御惠をほしい〳〵といふて居る間は、それも尙一つの回向である。回顧すれば私はこの人生に何一つ頼みとすべきものが無くなり來つたとき、自分に對して眞實の惠を與ふるもの、自分の心を全く知りぬいて、而も振り捨てざる眞實の友人をほしい〳〵と思ふて居つた。こゝまで行きづまつて仕舞ふと、そこがどうしても通りきれぬ關門である。多くの青年が皆こゝに苦しんで居る。之を極端に云へば信仰に入らん爲には、眞劍に佛を尋ねて信仰を求むるもの程、却て信仰には入り惡いと言うてよからう。現今求道者の中に、凡そ敎育に關係して、自分の倫理實行の爲に、又自己の人格を高めんために信仰に入らんと求むる人は、或る程度までは善いが、どうしても絶對の信仰に入り難い。それは道德の爲めに佛に接せん自己の爲に信仰を得んと力むる心が强くなる程、自分の回向心が除かぬから、却て意外千萬に信仰に入り難いのである。私抔も多少敎育を受けて居たものゆへ、何分にも自分は他のものとは同じかるべきでない、如何にしても自分は理想的に遣りたいと思ふて居つた、此自力回向を進ぶ心が去り難かつた。

然らば最後に如何にして安心を來たしたかといふに、此點はどうも口には云へぬ、强て假りに云ふならば、自然に向ふから惠みが向いて來たのである、意外千萬である。前に向つて小さい光を求めて苦しんで居つたに、後の方から大なる光が覆ふて來た。前の方に一掬の水を探がしてあつたに、後の方から洪水をかぶせられた心地であります。自分は佛の惠に包まれたのである、佛の惠が先方から來たのである。それであるから信仰を求めるとか、道を求めるとか云ふに拘はらず、此信仰は求めて得たにあらず、先の方より來つて下された。如此一點の光を求め一杯の水を求めて居つたに、意外にも先方より堂々と救の光、惠の水が現はれ來つて下さつた。是まで自分に對して同情者を求め〳〵してあつたに、豈圖らんや何とも云へぬ偉大なるものが自分の心に入り滿ちて下さつた。眞に心の中にアゝ難有と喜ぶ外は無い。我々は常に惡心を飜へし

て佛に向はんと勤め苦しんであつたものが、一大轉換を爲して全く佛の方より我々の方に偉大なるものが向いて來て下さつた。そこで回向の文字の意義も全く方向轉換を爲して顯はれ來つて、佛陀より我等を回向して下さるといふ意味になつて來た。此意味を以てする回向が心に味はいるところが、信仰問題の結局である。親鸞聖人が「謹て淨土眞宗を案ずるに二種の回向あり」と言はれた、回向は全くこの意味である。斯の如く云ふ所以のものは、强ちに『敎行信證』の文字を解釋せんが爲に云ふたのではない、私の信仰問題を云ふに就ては、此點を云はねば佛の御惠の難有い味は云へぬのである。而して此點は實に佛敎の眞髓である、此に至つて佛敎全體の方向轉換を來しまする次第であります。

私は今度飛驒より來つて、數日新聞を見ざりしが、松本に出てて或る新聞を見るに、信州の代議士石塚重平氏の死に就てのことが掲げてあつた。氏は一代の間頻りに佛敎を喜んで居つたが、死に先つ三日全く基督正敎の洗禮を受けて死に就いたそうである。これは些細の事であるが而も大に注意すべきことであると思ふ。この事實を漫然考へると、佛敎では眞の安心が出來ぬから、正敎に轉じたるが如く見えるが、私の信仰から推察すると、そうでない。彼れ石塚氏の奉じたる佛敎は、心外無佛の碧巖集とか何とかいふ風の禪的のものであつて、自分は飽迄「我即佛」の立場であつたらしい。平日はそれて修養し來つて相當に得るところがあつたに相違ないが、人生の最後は我即佛では安んずることが出來ぬから、其處で妻女達の奉じて居た所の正敎即、他力的の信仰に化せられたのであつたらしい。若妻女達が佛敎の絕對他力の信仰に入つてあつたなら、必ずや彼も他力佛敎の信仰に入る筈であつたらうが、平日にありては基督正敎の話の外は、禪的の話のみであつたから、最後の立場を失ふた場合に、方向轉換を來して他力の信仰の形を取つたのであらう。是は宗派如何の問題ではない。兎に角昨今の新しい事實であるから引例に出したのである。要するに絕對の佛陀を見出すが信仰の極致である。假令自己以外に佛陀を見認めて居つても、其佛に向つて尙自分から回向心を運んで居る間は、絕對の信仰でない。親鸞聖人の他力回向と云はるるのは、全く言語上のことでもなく、研究の事でもなく、將に法門上のことでもない、全く精神上に明に他力の回向を受けて、佛の惠を味ふて喜ばれたのであります。

私は初めて佛の惠に浴したとき、私はこれを云ひあらはすに「佛陀は慈悲の塊りである」と申し、「此の友達を得たのである」と云つたのは、皆なこの惠に氣がつかしていただいたといふ意味であります。「得たのである」といふはこちらから求めて得たのでない、久しい以前より大なる惠が我身に臨んで居て下さつたのに氣附かなんだのである。これは實驗であるからこれ以上には云ひ得るものではない。十年前には此味が即ち所謂回向であるとは氣附かなんだ。今では回向といふは全くこの意味であると知つて、愈深く喜んで居ります。斯の如く祖師の御言と自分の經驗と全く合しまする。これ一つ見ても親鸞聖人の宗旨は明である。回向文を讀んで他力の回向といふ如きは、當り前から云へは調子外づれである。其調子外れで來てあるのは全く調子外づれの偉大なる經驗から出たことである。尤もこのことは法然上人に既にあらはれてあるが、併し親鸞聖人に來りて殊に著しい。

親鸞聖人の上を見るに、信仰の發る一念のみならず、それから以後の人生百般のこと何から何までも、總て佛の惠から成り立つて居る。私も十年前回向を賜はりて、それぎりてなしに、信仰以後何事も皆他力の回向であると難有喜んで居ります。此方からは計らひばかりである、皆向ふからどん〳〵與へて下さる。此の如くにして最終に、佛果に至る迄此回向の泉の絕間がない、よりて親鸞聖人は「謹んで淨土眞宗を案ずるに二種の回向あり一には往相二には還相なり」との玉ひ殆んど人生の凡てを盡して回向の中に入れて仕舞つて、何もかも皆佛の惠を蒙らぬものはないといはれたのである。それてその回向の味を溯りて行くと、諸君は絕對の佛陀をあり〳〵と眼中に見ることであらう。今日の人は抑絕對は實在なりや否や、或は絕對には人格ありや否やといふて研究して居るが、宗敎としてはそんな問題は一つも必要はない。絕對の信仰は先方から惠まるるものであり、既にそれ自身が明白なる事實である。私は多年の間慈悲といふ言辭て、此絕對者を言ひ表はして居つた。四年前に『歎異鈔』の精神を話した時も、始終佛は慈悲の塊てあると說いた。今日から云ふと其慈悲の方角からが向ふから出て來るから回向と云ふたのであつた。私は年々親鸞聖人の書を味はせて頂いて來ました。昨年歸京以來もう一つ本願と仰せられた言辭の上に非常の味を知らせて頂いた。實にこの本願といふことを仰せられたは偶然のことてはない、私共は朝夕に父母に敎へられるにも、

如來の本願の辱きことを以てせられ、又說敎の上でも常に如來の本願、他力の本願といふことを聞かせられて居るから、我等の耳に慣れきつてある古い言辭であつた。然るに今日では私の耳に最も新しい語として力强く感ずるのは、亦この本願といふ言辭である。これ以外に新しい言辭を持ち來つても私には喜ぶことが出來ない。かう氣附いてから親鸞聖人の御著述を拜見いたすと、本願といふ言辭が基本となつてある。單に慈悲といふとたゞ何となう親切の感じが我れに來ることを表するまでゝ、文字が抽象的丈に物足らぬ感じがする。慈悲の喩には常に親の事を云ふが、親が子を日夜に憐むその親心は何かともう一つ押すと、至愛至極の本願であると云はねば慈悲の極致を言ひ盡すことが出來ぬ。本願といふ言葉のみが、よく絕對の佛陀が晝夜斷へざる念力を以て、日夜に我々に對して下さることを表はして居る。名號といふも光明といふも、その本源は佛陀の御親が、我々に對する本願で、實に確乎動かざる偉大なる力である。この力を認めずに、徒らに途中に坐り込んで仕舞ふのは、他力どころではない、それは無力である。他力といふは今迄の如き自力の回向では到底遣りきれぬことゝなつて、願れは他即佛願力の非常の惠を以て我の上に蒙らされる親の念力の顯れてある。親の誠との我に對する心であると云はねば盡くさぬ。乃で親鸞聖人は「他力といふは如來の本願力なり」と云ふて居られる。

誠に數異鈔を取つて見るに、若本願の文字を除けば此鈔は讀むことが出來ぬ。先づ第一章には「彌陀の誓願不思議に助けられまいらせて」と云ひ、「彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」と云ひ、「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を助けんが爲の願にてまします」と云ひ、「本願を信ぜんには他の善も要にあらず」と言ひ、「彌陀の本願を妨ぐる程の惡なきが故に」と云ふ。第二章以下にも多く本願の文字を遣ふてある。此本願といふ文字は如何にも力强く云ふべからざる勢を以て貫いて居る。現時の多くの人は如來の本願と聞いて、果して親の念力の如何にも偉大なる大慈悲の力として、本願といふ字を解して居るであらうか。若偉大なる力が向ふから我等に向つて下さるといふ意味に取らずして、唯漫然と聞き去り云ひ去つたならば、頗る殘念である。極りなき偉大なる御力が私の方に顯はれ來つた他力の至極を十分に遺憾なく云ひあらはしたが此本願といふ文字であります。

親鸞聖人は一代に何を實驗し何を說き何を爲せしかといふ

に、たゞこの偉大なる佛陀の念力、願力を實驗し、過去の生活より未來の云爲行動に至るまで、皆悉く佛陀の偉大なる神力より來らざるはなしといふ信仰を以て、且つ行ひ且つ說かせられたのである。であるから親鸞聖人の意を以て見れば、釋迦一代の經說廣しといへども、最初の華嚴經より最終の涅槃經に至るまでの間に或は眞實と說き、或は眞諦實諦と說いてあるのは、結局唯此佛陀の偉大なる眞實至誠を說くの外なしといふのである。この眞實至誠を具體的に云ふ時は、即ち如來の本願である。この如來の本願を正面から堂々と說いたのが、大無量壽經是れである。其處でこの如來の本願即ち如來の偉大なる力を正面から說いた經であるから、大無量壽經の宗敎は眞實の宗敎である、『敎行信證』の敎の卷に

夫れ眞實の敎を顯さば即ち大無量壽經是なり

と標擧したのは、全くこの意味であります。かく云へばとて他の宗敎が惡いといふのではないが、一代經中どれ丈絕對の境界を高尙に說いても、其絕對がこの相對世界の人生の上に及ばねば一向何の所詮も無い。絕對界即ち如來廣大の境を、この人生の上に渡すところで、初めて宗敎となるのである。而して其渡す力は即ち本願である回向である。若も絕對を高尙に說くならば、哲學で事足るべし、宗敎の必要は無い、又若しこの社會人生を都合よくやる爲ならば、道德で事足るべし、宗敎の必要はない。唯此絕對の力が人生に及ぶといふそこが、宗敎である、而してこの絕對の靈境に到達するに相對人生の方面より絕對界に向つて步を進むるによりて到り得るではなく、絕對の意思即佛の本願から此人生の方に向つて手を下して引入れて下さるのである。偉大なる如來の本願を說けるところの大無量壽經であるから、釋尊この經を說き給ふとき、眞に滿足なる形を以て說き玉ひた。親鸞聖人の和讃に

如來の光瑞希有にして
阿難はなはだこゝろよく
如是之義をとへりしに
出世の本意あらはせり

と讃述せられた、寔に此大無量壽經は佛陀大慈悲の發現したるところ、眞に是れ佛敎の眞面目一代諸經の眞髓であるといふが、親鸞聖人の意である

私は三年以前にこの修善會に於て、此敎行信證を話させて頂いた節には、釋尊の傳記から溯つて、大無量壽經は眞實の敎にして、即ち淨土眞宗これであるといふことを話しました

が、それではどうも十分でない、自分が回顧して信仰に入りたる道筋を跡づけて見ると、如何にも釋尊の成道なされた道筋と符合する如く思はれる點よりして左樣に述べたまでゝあつて、その此の如く信仰の實驗を筋道を立てゝ述べるのは、他の人を佛敎に引入るゝ道行として宜しからんが、退いて考ふるに自分は釋尊の如く自ら進んで絶對の境界に入つたのではない、全く彼れより我に惠を下し賜はつたのである、全く如來回向の信心である。親鸞聖人は殆んど釋尊を無視されたかの如く、眞宗の寺院に於ては釋尊の像を安置することをもせぬのは、一面からは如何とも怪しからぬことの如く思はれるが其實親鸞聖人にありては、彌陀釋迦の二尊を別視することなく、佛陀といへば阿彌陀如來の一佛であつて、この佛が人生にあらはれて來て下さつたのが釋尊であるといふ思想である。それゆへ彌陀一佛と云へばとて他の多くの佛菩薩を排除したのではない、絶對の唯一である　啻に釋尊のみ然るにあらず、聖德太子も師法然上人も、皆齊しく佛陀廣大の惠みの顯はれであると見玉ひたのである。然れば此人生に應現し玉ひたる佛陀のみならず、種々の化身までが皆一佛願力の顯現であつて、種々に善巧方便して我身を絶對の靈境に引入れ給ふに外ならぬことと信ぜざるを得ない。噫奇なるかな、不可思議なるかな、此人生は此の如き偉大なる佛力が縱橫無盡に働くところの舞臺にして、結局一佛名號即南無阿彌陀佛であると云ふべきである。此事を正面より書きあらはしたが大無量壽經である。これ親鸞聖人は敎の卷には

是を以て如來の本願を說いて經の宗致と爲す、即ち佛の名號を以て經の體とするなり

と云はれた所である。

以上の如く述べ來つたは殊更に敎行信證の文脈を逐ふて解釋したのではない、自分の信仰上からこの佛陀絶對の惠を味ふとは、是の如くに云ふより外はないのである。併しかくの如く辯じかへたればとて、自分の信仰が變つたのではない、三年以前に慈悲といふ言辭を以て說いたのも、此偉大なる佛力を云ふたのであるが、その慈悲を說くに方りて何となく本願といふ言辭では說き惡い感がした。なぜならば本願といふと直に五劫思惟とか、十劫成佛とかいふことが邪魔になつたのであつた。然るに能く味ひ來つて見ると、此本願といふ文字は實に難有い文字である、非常に力强い文字である。この文字の上に於てこそ絶對の佛陀の威神力を見ることが出來る。

されば こそ嘆異鈔に

聖人の常のおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり。されば そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懷さぶらひしといふてある。この絶對の本願力、佛陀の御惠みは、他力信仰の云ふべからざる味である。その如來の本願の名前が即ち南無阿彌陀佛といふ名號である。よりて次に一佛名號といふ題を設けて、この點を充分に話さうと思ふのである。

如來以無蓋大悲、矜哀三界。所以出興於世、光闡道敎、欲拯群萌、惠以眞實之利。
爾者則此顯眞實敎明證也。誠是如來興世之正說。奇特最勝之妙典。一乘究竟之極說。速疾圓融之金言。十方稱讚之誠言。時機純熟之眞敎也。應知。

二　一佛名號

釋尊一代の間に於て、種々無量に說き玉ひた法門の其歸結點は那邊に在りやと云へば、唯一の佛陀を說くが一代佛敎の根底である。釋尊一代の佛敎廣しといへども、之を釋尊の手前で一括して云へば、南無佛、南無法、南無僧といふこの佛法僧の三寶に南無歸依するか、佛敎の最始であつて、又最終である。而して此三寶と云ふもまた結局は佛寶の一つで盡すのである。かさて其佛寶をば廣く說くときは窮まりなきことである。先づ最初の華嚴經にありては、廣大無邊の佛の境界を說き、其後の諸經には段々とこの佛敎界を種々無量に說き廣ろげてある。一代經中種々に多くの佛陀を說いてあれどもそれは數多の別々のものが存在するのでなくして、結局は唯一佛に歸命するといふことの外は無い。即南無阿彌陀佛といふ六字に歸結するのであるから、一代佛經は一佛の名號に攝し盡すのである。斯く初から獨斷的に云つて仕舞へば、頗る一と呑みにしたる如くであるか、一言で云へば是で盡きるのである。八萬の法門數多の宗派も、結局は一つの絶待なる佛力を說くの他なしと云ふてよい。去りながら初から獨斷的に

此の如く云ふては了解することが出來難いから、以下に段々と私共の信仰上、必ず此の如くあらねばならぬことになるその道行から云つて見よう。

それはどうであるかといふに、釋尊の一代教から言はねばならぬ。抑我々信仰を求め道を求むる爲めに辿る方法は如何にといふに、先づ自分が大に奮つて釋尊の教法を服膺して、釋尊の行ひ玉へる如く自分も行ひ、釋尊の證り玉ふが如く自ら證らんとするのが、自然の傾向である。斯の如く釋尊の行履を踏襲して進まんとするならば、それは即ち聖道門である。既に聖道門といふ正しく大聖釋尊の示し玉へる道を守つて進むのて、實に尊いことであつて、實際に神聖の道を辿つて行き得るならば洵に頂上であるが、一歩退いて實踐躬行の道を省ると、迚も釋尊の如く行はるゝものでない。我々は釋尊の時代生れ後れたること甚だ遙遠にして、釋尊の行蹟を尋ぬることもなり難く、且つ又遺し給へる教法は高尚幽玄にして、淺間しき我等には容易に證り難きところである。こゝを以て佛陀の示し玉へる道は、之を辿らんとすれば一歩は一歩より困難で、いかにしても進み能はぬ。抑我々自ら信仰のことに氣附いて、正しき道を行ひ、世を救ひ、人を導き、飽まで理想的に運ばねばならぬと力味んで見ても、其種々の理想が實地に於ては到底實現することは六かしい。例せば彼の忠孝の如きである。忠孝の二つは我國道德の主眼であつて、中心君父の洪恩を思ひ來つては、忠ならざらんとするも得ず、孝ならざらんとするも得ざるのである。然るを世人動もすれば臣としては君后に忠ならざるべからず、子としては父母に孝ならざるべからず、忠は斯く〳〵なさゞるべからず、孝はしか〳〵なさゞるべからず、臣子としては必かくなさざるべからずと、かやうに「唯せねばならぬ」といふ意味て、之を行はんとするは大なる誤りてある。如何に美しき忠孝といへども、かく律法的に強て之を行はんとすれば、恰も鐵鎖の如く苦しく感ぜられて、夫が爲に形式的に流れて、其眞の意味を失ふに至る。兎角道德問題で誤謬に陷り安き點は、皆この律法主義の筋道で押さんとするからてある。忠孝もこゝに至つては生命なき死物となる。今日の道德問題に於て特に注意すべきはこの點である。

今大聖釋尊の示し玉へる道は、如何にも高尚なる立派なる如何にも尊い道ではあるが、之をその示し玉へるが如く行ひ戒しめ玉ひしが如く守らねばならぬと頻りに策勵を試みて

「せねばならぬ」といふ律法主義から修行せんとするならば、終に倒れて仕舞はねばならぬ。假令外形ばかりに之を守り之を行ふても、中心より教の如くに行ひ、實際釋尊の如く證ることを得ずんば、甚だつまらぬものである。況や我々は朝に誓つても夕に破れ、昨日の行は今日空しくなり、何事も皆駄目になる。律法的に如何に行はんとしても、この相對世界の事情は、決して之を許さぬ。到底中心より聖道門の修行を完全に成就することは出來ない、聖道門と云ふと同時に又難行道と云はるゝ所以はこれてある。斯く云へばとて唯何かなしに最初から行ひ難い、駄目であると捨てるのではない、それならば一向意味のないことゝなつて仕舞ふ。聖道の修行は之を自分が必ず行はんと企てて見て、どうしても行ひ得ぬことを實驗したるところで、初めて意味が生じて來る。乃でどういふ點が最後の安心であるかといふに、我々は如何にしても如說に修行することも出來ず、如法に心に清うするとも能はぬ我れは實に詰らぬものであると、目醒めた最後に顯はれ來るものが絕對佛陀の惠である。噫我は如何にもつまらぬものである、此の如きものを捨てずして廣大の惠を灑いで下さるは、佛陀ばかりである、あゝ辱ないと安心の門が開けて來る、これが、念佛宗である、淨土門である、佛陀を念じて佛の許に往くといふ道である。恰も彼の忠孝は律法的に之を行はんとすれば、忠一つも孝一つも完全に出來るものてないが、一朝君父の恩惠に氣附くときは、中心悅服して其後の行動は、知らず識らず眞の忠孝となる。一旦律法的に倒れたる忠孝も、廣大の惠を見認めた以上は、一轉して信仰主義となり來りては立派なる忠孝となる。今亦然りで我力極まつて倒れたるものが、忽然佛陀偉大の恩惠に氣附くときは、感謝の念佛唇を衝いて溢れ出づる。一佛の惠を眞に喜ぶ心持は恰も忠臣の如く孝子の如くである。これによりて天親菩薩の

世尊、我れ一心に盡十方無碍光如來に歸命す

と云はれたる論文をば、曇鸞大師は註を下して

夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸するが如く、動靜已にあらず出沒必ず由あるが如し、恩を知りて德に報ず、理宜く先づ啓すべきなり、

と云ふて、忠孝の文字を以て信仰を解釋せられた。此の如く此淨土念佛の行は自ら策勵して進むにあらず、佛陀の偉大なる力よりして易く行せしめらるゝのである。よりて之を易行道と名くる。我等平素難行道易行道とか、聖道門淨土門とか

いふ名稱は耳慣れて居る爲に、却て殆んど其意味を感ぜざるが如くであるが、今之れを新しき言辭を以て言ひ換へれば、律法主義信仰主義と云ふてよからう。此二主義を以てすれば今の聖道門淨土門難行道易行道は云ふに及ばず、古今のあらゆる宗敎の大問題は皆悉くこの式で解決が出來る。

釋尊も修行時代には當時の婆羅門敎の宗義に從つて、哲學をも學び苦行をも修し、色々と試みられたが、到底婆羅門敎の律法主義では安心が出來ぬ。其處でそれらをすてゝ尼連禪河に浴して、苦提樹下金剛寶座に端座して、心中より湧き出づる解脫涅槃の妙味を以て成道せられたのである。從來の律法主義をすてゝ自己が信仰の妙味から說き出されたのが、釋尊一代の敎法である。其以後龍樹菩薩の難行道易行道、道綽禪師の聖道門淨土門、皆此經路がずうつと貫いてある。廣く云へば佛敎に二種ありて、一には聖道門、二には淨土門であると云ひ得る、けれども、もう一つ之を極端に云ふならば、此二門が相對的に併び立つものに非ず、聖道門洵に尊き大聖の道なれども、それが律法的に陷つた爲に釋尊の眞意を失ふたものである。釋尊の本意は唯絕對無限の佛の惠を說いたので、つまり一佛名號に歸着するのである。換言すれば聖道門は佛敎の眞相にあらず、唯此念佛の信仰が眞の佛法である。要するに一代佛敎の眞髓は如來の本願である。これが抑親鸞聖人の腹である。聖人が此の如く極端まで來つたのはそこに大なる理由がある。即ち二十年來臺嶺に在りて試み試みて、終に之を見出さゞりし律法主義をすてゝ、法然上人の言下に他力信仰に入つたのである。それであるから親鸞聖人は、師の法然上人が斯う爲されたから、自分もかうせねばならぬと律法的に念佛を唱へたのでない、法然上人が此の如く念佛一つになつて居られる所以は、何の點にあるかといふことを全く實驗的に味はれた爲である。親鸞聖人の實驗それ自身が、全く法然上人の實驗と一致である。彼の法然上人は九歲の時父時國が仇の爲に殺されたが動機となつて佛門に入り、それより四十三歲に至るまで多年の間、行へるだけ行ひ一切經をば五遍までも讀んで種々修養を試みたが、如何にしても光を見出すことが出來なかつた。最後に於て善導大師の觀無量壽經の疏を讀み

一心に專ら彌陀の名號を念じて行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々に捨てざるものこれを正定の業と名く、彼の佛の願に順ずるが故に

といふ文に當つて、忽然として廣大の靈光に觸れて大安心を得られたのである。それより上人の一代は、南無阿彌陀佛と稱ふる一つで往生すべしといふ簡單なる言辭で敎化せられた。此の如く南無阿彌陀佛は上人に於ては眞の光であつた。上人と同じ經驗を有せる親鸞聖人は、また南無阿彌陀佛を以て眞の光とせられた、よりて一代佛敎は如來の本願の外なく南無阿彌陀佛の名號に結歸する、これが佛敎の眞髓であると確信せられたのであります。

前に云ふ如く佛敎は初からして、南無佛南無法南無僧の念三寶である。我國の敎主聖德法皇も二歲の時に南無佛と稱へられしを初めとして、一代の自行化他殊に念佛を主とせられた。其以後我邦には念佛の法は漸々盛んに行はれたれども、未だ充分に念佛一法とならず、種々の行法に伴つてあつた。然る所以のものは、法然上人がこれ程までに味はれた程の味が出て來なかつた爲である。如何に人生何物も賴るべきなしと知つて、一心に念佛に凝つて居つても、廣大の佛の惠に遭はずして空しく惠の源を求めつゝあるといふ念佛の稱へやうならば、眞の本願の念佛でない。歷史的に云へば慈覺大師が支那の五臺山に登りて、文殊菩薩の念佛を傳へ來つて、比叡山に於て頻りに念佛を稱へられた。其他天臺宗にも眞言宗にも既に念佛が傳へてあつたが、未だ法然上人の如き絕對他力の念佛でない。甚俗な譬へであるが彼の石童丸が悲しみ〳〵方々と親を尋ねあるいた如き心持で稱ふる念佛であつた。私が曾て自己の精神上に眞の惠の友は無きか、惠の親はあらざるか、慰めは無きか、光は無きかと日夜切に求めて泣いて〳〵涙出でざるに至つても、尙光を見出し得ざりしその時の心狀と同じ意味の念佛であると察する。法然上人以前の念佛は皆これである。唯こゝに一つ云ふべきとは横川の源信僧都である。僧都は一代念佛を修行なされ、其著往生要集には其信仰を委しく書いてあるが、一言以て之を云へば僧都の念佛は絕對他力の念佛である。法然上人は夙にこの往生要集を取りて、熟讀遊ばしたれど、其時分には未だ光を見出されなかつたが、善導大師の觀經疏の一心專念の文に當りて、一心と云へば、二心なく、專念と云へば餘事を雜へず、行住坐臥行儀の如何によらず、時節の久近、修行の長短に拘らず、念々不捨常に忘るゝことなきは是れ極樂界に往生すべき道である、これ此方より佛に向ふてかゝるに非ず、佛の至誠眞實の本願がある夫に從順するの他なしと氣附き來り、佛陀の我等を求め玉ふ强

き念力を見出して、猶豫躊躇の暇なく全く佛陀救濟の力強き御惠を喜ぶと同時に口を衝いて念佛が溢れ出でた。依之上人も順彼佛願故の文心肝に徹すと自語せられた。

我々も曾ては眞に同情者がほしいと求め乍ら、愈以て安心を得ざりし所以のものは、此佛願といふことに氣附かざりしからであつた。漫然聞くと佛願といふは書いた個條の如く聞へるが、決してそうでない、佛陀の大悲我々を常に眺めて居て下さる切なる念力が佛願である。石童丸が如何に親の名を呼び乍ら求め探しても、親が嘿して名乘を擧げざるが故に、現に親の前に立ち乍ら安心を得ぬのであるが、我如來の本願は然らず、親の方より求め玉ふところの、強き〳〵意志であつて、南無阿彌陀佛といふ名號は、親の方より名乘を擧げ玉ふ聲である。これを聞くところに如何で安心せざることのあるべき。勿論聖道を捨てゝ念佛を事としても、此方から向ふて居る計りでは安心が出來ぬ、人生の上に此廣大の惠が向ふから來て我々を救ふて下さるところで安心が出來るのである。この安心は全く佛願の賜である、南無阿彌陀佛の惠みである、其處でこの名號を稱へるのは我々の方から佛を求むる聲でなく、心切に胸裂くるの念佛でなしに、佛の方から「汝我名を持て、我迎へん」と喚び玉ふ聲に應ずる感謝の叫である。

此事は常に耳慣れて居る事であるが、輕々に聽き去つてはならぬ。法然上人は八歳已後求めて、四十三歳に及んで初めて氣附かれた。勿論それまでも念佛を稱へられたに違ひないし、又彌陀四十八願の文を眼にせられたに相違ないが、未だ彌陀の本願の意を讀んで居らぬ、未だ人生に此佛願のあることを氣附かぬ。然るに乃至十念若不生者不取正覺の本願の誓約にまかせて疑なく念佛せられた所以のものは、全く佛の親に過ふたのである。其處で法然上人は此自己の信仰の書に題するに、選擇本願念佛集といふ名を以てせられた。寔に上人の稱ふる念は選擇本願の念佛である。徒らに口を動かし聲を出す念佛でない、佛陀の手元から他の種々の敎法無量の行業によりては救はるべきにあらざる我等に向つて、持戒せよとも云はず、布施等の行を勸めよとも求めず、我々に最も與へ易く最も接し易きものを選んで以て、與へらるゝ念佛である。選擇集の題下に

南無阿彌陀佛　往生之業　念佛爲本

と標してある、是れ全く法然上人自己の實驗の披瀝である。此上人實驗の儘を表出したるが選擇集であるから、實驗の道

筋の痛快である如く、其著書も如何にも明快に書いてある。

「聖道を捨てゝ淨土に歸す」と云ひ、「雜行を捨てゝ正行に歸す」と云ひ、「當て知るべし隨他の前には暫らく定散の門を開くといへども、隨自の後には還て定散の門を閉づ、一開以後永く閉ぢざるものは唯是念佛の一門」と云ひ、「聖道門を閣きて選て淨土門に入れ、諸の雜行を拋て選て正行に歸すべし」と、實に明快な云ひ方である。悉く實驗の聲である。

こゝに注意すべきことは、こゝが三段になつてあることである。先づ第一は佛陀の敎門八萬四千であるか、其中に念佛が行し易いといふ云ひ方である。この云ひ方は極めて寛大のようであるが實驗の味は無いのである。第二段は信仰を律法主義に化して、切りに佛を求め佛に依らんとしてあり乍ら、傍にまた諸行を捨てずに居る。これは捨てんとしても未だ大に依るべき或る物を見出さぬから諸行が捨たらぬのである。終に敝履を棄つるが如く、蟬の殼を脱するが如く、全く諸行を捨てゝ唯一心に念佛する。此段に至らねば眞の絶對の念佛でない。法然上人の念佛はこの最後の念佛である。世人動もすれば云ふ、苟も向上の道を辿る以上は、座禪も可なり、念佛も可なり、佛敎も可なり、基督敎も可なりと。是れ可なるが如くにして而も實は大に然らずである。信仰問題のぎり〳〵は唯一でなければならぬ、其一つといふも自分がどれ丈つとめても安心がならぬが意外千萬に向ふから廣大の同情の惠の水を注がれたところで、あゝ難有いと心中に佛の惠に氣附いた一念にごろりつと安心して仕舞ふて、今まで便りて居つたところのすべてのものは何一つも用はない、世界は一佛名號を稱ふる外に何物も無いと一筋に惠を喜ぶことになつては、いやでも力强く云はざるを得ぬ、捨といひ、閉つと云ひ、閣くと云ひ、拋つと云ふ如く際利く出て來る意味がそこにある。こゝが實に淨土宗の開ける源泉である。かゝる勢であるから其當時の人に睨まれ罵られ、迫害せられたのである。若法然上人が聖道門も結構であると云ふて居たならば、上人の信仰がちつとも顯はれぬし、從て當時の人も佛の惠を知らしめて頂くことが出來なかつたのである。然るに上人が明快に一刀兩斷の言動に出てられたから、多くの人が救濟せられたのである、そしてまた一方の反對者からは惡魔の如く見られたのである。かくまで法然上人が最も明快に、唯一佛の名號を持念することを敎へ、其他は持戒破戒如何樣なりともそれに拘はらず、唯念佛するのみにて救はるべしと喝破したは、全く上人の實驗の泉源から迸つた聲である。

三　招喚勅命

法然上人は諸種の行法で助かるに非ず、唯從順なる念佛計りが助かるべき道であると云はれた。選擇本願念佛集は十六章と別れてあるが、其第一章は、道綽禪師の聖道門を捨てゝ淨土門に入られた文は此の如くであると、道綽禪師の安樂集の文を引いてある。第二章は善導大師が雜行を捨てゝ、正行即念佛の一行に歸せられた文を引てある。善導大師が念佛に歸したのは彼の佛の本願に順ずるのであるから、次に阿彌陀如來餘行を以て往生の本願と爲さず、唯念佛を以て往生の本願と爲すの文と題して、阿彌陀如來四十八願の中の第十八願文を引いてある。此佛の本願に從へば一切の人類根器に上中下の三種あつても、三輩何れも念佛の一つで往生を遂ぐべしとて、其次、即第四章に大無量壽經三輩念佛往生の文を引く。第五章は此念佛の功德の廣大なることを示し、第六章は此念佛は末世まで人を救ふことを說き、第七章は此の如き優勝の念佛であるから、釋尊も此念佛をば殊に將來の導師たる彌勒菩薩に附屬せられたることを揭げてある。第八章已下觀無量壽經及阿彌陀經によりて、釋尊の本意も十方諸佛の本意も皆共に此念佛に在ることを論定して、念佛の一門のみ縱に古今に亘り横に十方に通じて、人生救濟の道であることを示されたが選擇集一部である。而も其念佛を云ふにも偏に善導大師による、何故なれば大師は直接に阿彌陀佛から念佛を授かつたのであるから、獨りこの大師に依るのであるといふて居られる。こゝが信仰問題に於て極めて肝要なる點である。此の如く彌陀本願の念佛一つに依る故に、又善導大師に依るとまで云ひ放つて、最も極端に一佛名號の信仰を明快に唱說せられたが、法然上人である。此の如くならざれば信仰ではない。假令佛の惠が有り難いといふて居ても、是丈は自分がやらねばならぬ、其他は佛の惠を仰ぐといふのでは、未だ絕對の惠が顯れぬのである。法然上人は此念佛の爲には流罪にまで遭はれたが、其流罪に處せらるゝ當時にありても、われ假令死刑に行はるとも此念佛は止むべからず、とて、眞氣色尤も熾盛であつた。これ蓋人生此南無阿彌陀佛の他なしといふ信念よりして、身に行ひ口に述べられたのである。一世の人々は上人の信仰を理會すること能はざるが爲に、種々に上人を苦しめた、苦しめらるゝ度に益上人が喜ばれた、法然上人は善導大師の敎に從つて、無南阿彌陀佛の一心專念の信仰を以て

始終せられたのであるが、此法然上人の敎を其通りに受けて、一毫の私意を雜へず、唯師敎に從順なるが親鸞聖人である。もう一つ云ふならば、法然上人の念佛は彌陀の本願である、彌陀の本願は一代佛敎の精髓である、法然上人その儘が佛の惠である、佛の喚聲であると、斯くまでに法然上人をは偏に信ぜられたが親鸞聖人である。その斯の如く偏に法然上人を信ぜられるには、抑所由かある。

親鸞聖人は九歲の春出家し玉ひて、種々に修行し種々に研究して佛道を求められたが、十九歲の時に命終は僅に十年の後であると思ふて、一層切に求むるに至つた。二十九歲の時いよ〳〵死は眼前に迫つて居るが、胸中益安心が無い、三十年來聖道を辿り種々に求められて、而も一も得るところ無く、最後に六角堂に參籠しての歸途、聖覺法印に遇ひ法然上人のことを聞かれ、吉水の草庵に詣で、法然上人の實驗を聞いて、立どころに安心せられたのである。この時の法然上人は南無阿彌陀佛、即選擇本願の念佛が正しく往生の道であると云ふの他は無かつたに違ない。後の時に及んで法然上人より自著の選擇本願念佛集を親鸞聖人に附屬せられたときの事實を、親鸞聖人自ら敎行信證の大尾に記して曰く、

元久乙丑歲、恩恕を蒙りて選擇を書き、同じき年初夏中旬第四日に、選擇本願念佛集の內題の字、並に南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本と、釋の綽空の字とを空の眞筆を以て之を書かしめ玉ひき、

と。是等の事實を以て推するに、親鸞聖人多年の間道を求めて得ず、非常に苦しんで胸中一點の光なき、眞に無明の大夜に沈みつゝあつたところに、此如來の本願南無阿彌陀佛の廣大なる佛陀哀々の慈悲を聞きて、言下に、嗚呼實に如來の本願は有り難いと、心身に徹底して、速に律法主義の諸行即聖道門をすてて、かつきりと念佛の信仰に入られた。其態度が非常に著しく鮮やかであつたに違ない。其時法然上人より綽空といふ名を賜はりたのは、このことを證明して居る。選擇集の第一章に引いてある如く、斷然聖道門を捨てゝ淨土念佛の一門に歸入せられたる道綽禪師の態度と、及び法然上人が從來の佛敎をすてゝ、念佛一法に就かせられた態度と、全く一致したる信仰なりとの意味よりして、道綽の綽の字と、法然上人の諱の源空の空の字とを以て親鸞聖人に名けられたのである。

斯の如く親鸞聖人は偏に法然上人の敎のみが眼中にあつ

て、其他は何にも無い。若し律法主義を以て選擇集を讀むときは、念佛は稱へねばならぬといふことに陷る。念佛をば律法的に取るものは順彼佛願の文は見れども見えずの風情である。法然上人が力を盡して念佛より外に自己の力は一切駄目であると、明快に佛陀の惠を知らしめられたる言辭を耳にし乍ら、法然上人は念佛を唱へて居られる、我々も稱へる力で助かるのであると思ひ取つたならば、同時に佛願力が裏面に廻つて隱れて仕舞ふ。念佛して往生するといふのと、念佛した力で往生するといふと、僅かの相違であるようだが其實は非常なる相違である。例せば親の命に從ふて親の恩を喜ぶと、親の命令の儘に働くから親が色々と惠んで下さるのだといふとは、寔に幾微の間ではあるが、心に親の惠を頂いて喜ぶのと、自分の働きから親の惠を彼是と計らうとは、雲泥霄壤の相違であるが如くである。一筋に佛陀の恩惠を喜んで念佛する實驗の味を親しく懇に敎へられても、自分に此信仰の實驗の味が無いならば、空しく敎語の末に拘泥して、律法主義に陷つて仕舞ふ。法然上人の一向專修の念佛の敎を親しく聞いたものが矢張美辭なる獨り立ちの念佛でなくて、尙諸行を捨て兼て却て念佛に助けさせて居るものゝあるのは、皆この信仰の味が無いからである。親が道樂をしてはならぬといふから、道樂をせぬのだと云ふて居るならば、まだそれは頗る危險である。眞に親の惠が思はるゝときは、道樂をせぬ抔といふ如き餘地のある云ひ方で無くして、如何にしても道樂の出來ぬので無ければならぬ。同じやうに念佛を主にしても若しその念佛が眞に佛の惠を喜ぶ念佛でないならば、一たび捨てた諸行が再び復活して來る。それならば選擇本願の念佛では無い。法然上人の念佛は一筋に佛の惠を喜ぶ選擇本願の念佛である、佛の本願と別でない、佛願の通りの念佛である。この佛願の儘の敎を全く信じ全く受けられたのが親鸞聖人である。

抑此人生の上に下る大なる救濟が卽ち佛である。その佛力を見認めずして、唯この佛をたよりたゝ念じたりする自分の手元に力の入てある念佛ならば、迚も安心が無い。向ふからの喚聲に順ひ向ふからの惠みを受る計りで安心が出來るのである。それであるから親鸞聖人は南無といふ文字、我々の方から縋ることを意味するこの文字をば、佛陀の手元に引き上げて

歸命(南無)とは本願招喚の勅命なり

と云ふて仕舞はれた。親の方から自分の名を名乘りて我を憑め我に來れと云ふ喚聲が、南無の二文字の意味であると、本來の文字の意味を轉換して示されたる點が、信仰問題の要處である。常に云ふ如く我々が求むるによりて來る信仰でない、佛の惠みが常に我々に向つてあるが、それが我々の心に入り來つて、初めて佛の惠みの廣大なることを喜ぶが信仰である。其信仰の叫びが念佛である。之によりて念佛は全く如來の招喚に應ずる聲である。法然上人毎日幾萬の念佛はこの念佛である。親鸞聖人の「善き人の敎」と云はるゝ念佛はこの念佛である。此念佛は全く本願である佛陀それ自身である。南無阿彌陀佛である。此南無阿彌陀佛の本願を說くべく十方世界に現はれ給ふか、十方恒河沙數の佛陀で、釋尊も此十方諸佛中の一つである。釋尊は人生の上に絕對無限の顯れ來つたので、皆南無阿彌陀佛である。法然上人は大勢至菩薩の化身であり、聖德太子は復觀世音菩薩の垂迹であり、悉皆我々を如來の本願に導くべく現はれ給へる權化の人である。人生の上に現はれたる總ての敎も、一切の善知識も、皆南無阿彌陀佛以外のものなしと云ふことになる。敎行信證の行卷は一佛の名號を讃歎するのであるが、其處に十方諸佛の名號までを攝めてある。加之淨土門以外の諸宗の祖師の念佛まで然く揭げ來つて、之を結ぶに選擇集の「夫れ速に生死を離れんと欲はゞ、二種の勝法の中に、且く聖道門を閣きて選て淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲はゞ正雜二行の中に、且く諸の雜行を抛てゝ、選て正行に歸すべし。正助二業の中に猶、助業を傍にして選て正定を專らにすべし、正定の業とは卽これ佛の名を稱するなり、稱名は必ず往生を得、佛の本願に依るが故に」とある文を以てしてある。然る所以は唯一の南無阿彌陀佛、絕對の力の中に何もかも包含して殘るところなしといふ勢である。これが法然上人に遇ふて喜び給ひた南無阿彌陀佛の意義である。

此南無阿彌陀佛は勅命である。よりて聖人は德號の慈父と呼んで居る。而して同じ佛の光を光明の母といふてある。光明は母なり名號は父なりと云ふ云ひ方である。これは聖人信仰の實驗の味である。南無阿彌陀佛の六字は親の名である。親の惠は如何して知れたかといふに、佛の惠の光が心に屆いたときに、父の名の南無阿彌陀佛が屆いて、我々に於て信仰を起さしめた。信心といふ子は名號の父、光明の母で生れたのである。法然上人の說かれたる南無阿彌陀佛は七百年前のも

のでない。現に我々の上に働いて下されてある南無阿彌陀佛である。法然上人は善導大師の疏文を見て、彌陀の本願を發見したのである。發見して示されたのであつて、佛力そのものは千古我々の上に向つてある。其南無阿彌陀佛は永劫の惠である。其南無阿彌陀佛の內容が無ければならぬ。名あれば實あり、實に伴ふ義がある。名に伴ふ親の慈悲である。親が子に對して如何にしても捨てぬといふ願力である。南無阿彌陀佛は慈悲の父親の喚聲、義は光明の母の惠である。母の惠が屆くと同時に親の名、親の恩が知れて來る。私は永い間名號、本願、念佛といふ名辭は聞いて居つたが、其實の味が分らぬ。半年以上苦しんだ最後、心中に佛の惠の屆いたときに、人生に眞の大なる惠の親は佛陀なりと信知する。其佛陀は此方から求めて來つたのでなく、我は親なりといふ親の念力から顯れ來つた名前である。

私は諸方へ參つて親鸞聖人の事を尋ねて、種々の事蹟を聞き、種々のものを見せて貰ふが、その中に光明本といふがある。これは盛岡の本誓寺にあります。先づ中央に南無不可思議光佛と大書し、右方の少しく下れるところに、歸命盡十方無碍光如來と、釋迦牟尼佛の尊像とをあらはし、左の方には之に對せしめて、南無阿彌陀佛と彌陀の尊像とを書し、左邊には下より上に漸次に、龍樹菩薩、天親菩薩、大勢至菩薩、曇鸞和尙、慈愍三藏、善導和尙、道綽禪師、少康禪師、法照禪師を圖畫し、右邊には大勢至菩薩と相對する位置に、聖德太子を畫く。是或は觀世音菩薩の垂迹を示し玉へるならんか。其周圍に太子の眷屬とも云ふべき五德博士、阿佐太子、惠慈法師、日羅上人、曾我大臣、妹子大臣を畫き、上方には一圖欒を作りて、法然上人、釋聖覺、釋親鸞、釋眞佛、釋性信、釋是心を畫き玉へり。而してこの上下二圖の中間の少しく右傍に偏するところ、源信和尙を畫いてある。而して中央の南無不可思議光佛の文字より、大光明を放たして、全大幅を覆ふてある。これ十字六字の名號も、釋迦彌陀の二尊も三朝淨土の大師達も其他天地法界皆光明中の示現なることを表示せるもので、全く聖人の信念を圖畫せるものである。聖人の心中に如何に如來の大悲を味はれたかゞ、これで解ると思ふて喜んで居つた。而して南無不可思議光佛と文字で顯はしてあるから、光明名號の名義揃ふてあつて不足が無いと思ふて居つた。

然るに本年越中西岩瀨村淨光寺に於て、初めて名號本なるものを拜することを得た。これはまた中央に南無阿彌陀佛と大書し、之を覆ふに、天蓋を以てし、之を戴するに寶蓮を以てし、左右に復南無阿彌陀佛を稍小さく重ねて二つ書し、其外方に更に復南無阿彌陀佛を四重に小書してある。これ恐く十二光を表示したのであらう、而して寶蓮の下方に大勢至菩薩、龍樹菩薩、天親菩薩の形像を圖畫してある。これは彼の光明本の對てあつて、この二本を以て光明名號攝化十方の大慈悲を渴仰し給へる親鸞聖人の實驗の味が、遺憾なく顯はしてあるので、信界父母の圖であります。行卷に

良に知ぬ德號の慈父ましまさずば、能生の因闕けなん、光明の悲母ましまさずば所生の緣乖きなん、能所の因緣和合すべしといへども、信心の業識に非ずは光明土に到ることなし、眞實信の業識、これ即ち內因と爲す、光明名號の父母、斯れ則ち外因と爲す。內外因緣和合して報土の眞身を得證す、

と云はれてある。佛陀光明の照耀によりて漸くに導かれて信仰の門に入るが、いよ〳〵信仰に入りて後は、また光明の照護によりて信仰動退することなく、始終一貫して極樂無爲涅槃界に往生する。恰も子が父母によりて生れ、生れ出でゝは更にまた父母の愛護によりて生育するが如くである。淺草報恩寺所藏の聖人眞筆の敎行信證を拜するに、此光明名號因緣のところに澤山に雌黃を點じて、大に注意を與へてある。これ實に聖人の實驗的信仰の要處である爲である。

寶號經にのたまはく、彌陀の本願は行にあらず、善にあらず、たゞ佛名をたもつなり、名號はこれ善なり行なり、行といふは善をするについていふことばなり、本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには善にあらず行にあらざるなり、かるがゆへに他力とまふすなり、本願の名號は能生する因なり、能生の因といふはすなはちこれ父なり、大悲の光明はこれ所生の緣なり、所生の緣といふはすなはちこれ母なり。

《末燈鈔》

眞實淨信心（內因）攝取不捨（外緣）
信ニ受（スルハ）本願ヲ前念命終（ナリ）　卽入ニ正定衆ノ之數ニ文
卽得往生（ヘ）後念卽生（ナリ）　卽時入ニ必定ニ文　又名ニ必定菩薩ト也文
他力金剛心也（ト）應レ知（ル）　自力金剛心也（ト）應レ知（ル）
便（ナリ）同ニ彌勒菩薩ニ　大經ニ（ヘリ）言ニ　次如彌勒ト文

《愚秃鈔》

四　父母因緣

一佛の名號は佛の方から來るところの惠である。南無阿彌陀佛といふは佛の方から汝の親であるぞと自ら名乘りて我々を喚び玉ふ聲である。その名號を聖人は慈父と名けられた。名號を慈父とまで喻へられたは聖人が一と通りて持ち來るにあらず、それには大に味のあることである。先づ私の經驗に就て案じまするに、自分が此人生上に苦しんで、終に何處にも安ぜられず、世の中に眞に自分に對して同情して呉れるもの、眞の惠あるものは無きかと求めても得ざる時の有樣は、人の友を求め、孤兒の親を求めて得ざる有樣である。そこへ佛は惠しきものを惠む親なり、我等の父なりと光がさして來て、こゝに南無阿彌陀佛の父に遇ふたのである。此六字は眞の父ぢやと云はれた。たゞ漫然と父なりと云ひ去りても味はない、此味を聖人が申さるゝ具合は如何といふに、心中が一つ開け心中親に出遇ふた心地を慈父といふのである。又一方に光明の母といふことも、つまり一念同時であるから、父母前後は無けれども、成程佛こそ我を惠む親と分つたとき、云ふべからざる喜である。併し乍ら單に父なりといふ思想で無く、嗚呼父よと叫び出し、慈悲の光心に到つて心の開き來つた實驗である。六字は佛の勅命の聞へた方とでも云はうか、光明の母とは懷かしき溫かな光明の懷に攝められた味である。「金剛堅固の信心は、佛の相續より起るこで、常に相續して照して下さる光明が、我心の底に屆いて、名號の意義をあゝ有り難いといふ心が起りて來たといふ光明名號の因緣の味は信仰の一念の開發する當時の有樣を味ふにあらずんば知り得ることが出來ぬ。此光明名號因緣のことはその本は既に龍樹菩薩の上に於て、般舟三昧を父と爲し無生法忍を母と爲すとありて、念佛三昧と大悲光明の照して信心が顯れて來て、佛の惠こそ有り難いと、直に歡喜の心が起るのは、恰も菩薩の初歡喜地と同じことであつて、求道者が初めて佛の光を微塵許ど見認めたとき、眞に喜びの心の開發するところの光力なり名力なりである。

名號は親の心、佛陀の喚聲であると云ふて仕舞へば或は名號は稱へずともよいと云ふに似たれども、大に然らず。南無阿彌陀佛といふは親それ自身であつて、我等の口にかけるのでないと云ふてはならぬ。そう云ふて仕舞へば名號といふ値打がない。何故に名號を以て親を示したかといふに、親の名

を稱へさせて親の惠を知らしむべき名前である。もう一つ極端に云ひ放てば、信心の來らぬ前、親に遇はぬ時から、親の名前を呼んで居つたが、いよ〳〵親に出遇ふた時、あゝ親は有り難いと喜ぶことになるのである。名號は親の名なれども我々の口にかけずに向ふにのみ置いては何時までも我々に來らぬのである。法然上人は稱へよ〳〵と敎えられた。南無阿彌陀佛は我々の稱へるものである。併し親を探し求めつゝ稱ふると、親を見出してあゝ父よと縋る思から叫び出したとは大に味が違ふ。親の惠の知れたとき親の名を稱へる我々は之を忘れてはならぬ。親鸞聖人は行卷開首に

謹で往相の回向を案ずるに大行あり、大信あり、大行とは則ち無碍光如來の名を稱するなり

と云はれた。我々の身を離れた大行大信でない。我が口に稱ふる念佛、我が心に入る大信なりといへばとて、我々が拵へ來つた行信でない。佛の惠から來つた行信である。南無阿彌陀佛も佛の惠、難有いといふ信心も佛の惠、共に佛心佛力が我々に來るのである。これを先づ今日の言葉で云ふならば絕對と相對との合一が宗敎である。絕對がどこまでも絕對であるならば宗敎にはならぬ、又相對を云何に集合しても絕對にはならぬ。澤山の數知れぬ佛がありても宗敎にはならぬ。我々と佛陀、相對と絕待と相合して、我等と佛陀と切つても切れぬ關係が宗敎である。大行大信は我々の方に屬するが、それが佛陀光明名號の因緣から催さるゝところの佛陀の回向である。信心も我等の信心なれども、佛陀惠の信心、佛力の屆いたのが信心、稱名も力味んで稱ふる念佛でない。これは宗敎の極々眞味なる相對絕對の一致、佛凡一體の眞義があらはれてある。それはどうかといふに大行の佛名を稱するのがそれである。向の方にずらりつとある計りて、稱へずば我々の方にあらはれぬ。信も亦自ら力味んで空に信ずるのでなく、佛の偉大なるものを信ずるのだから一致になれるのです。此信心は佛の賜である。稱名も亦稱へぬばならぬといふ力味ならば絕對でない。又名號は佛それ自身ぢやと向ふに置くのならば、相對に關係が斷れる。親鸞聖人は南無阿彌陀佛は如來招喚の勅命德號の慈々であるが、大行といふは無碍光如來の名を稱するなりといふ、此稱ふるところで一致である。こゝが何とも云へぬ理屈で渡られぬ妙味である。

嘆異鈔には、

親鸞にをきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべ

しと、よき人のおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり

とある。「念佛して彌陀に助けられまいらすべし」といふ善き人の仰は大行である。「信ずる」は聖人の信仰である。私は初にこの「信」の方に目が附いた。聖人は「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず」何でもかまはぬ信じたのであるといふ、こゝに大に力を入れて居つた。念佛の語を信て受けた。如何にも偉大なる佛の慈悲が難有いと信じたのである。併し乍ら信ぜにやならぬといふ力味ならば。手足に力を入れたので信の立場がない。人生若此念佛無くば何を信ずるぞ、唯この念佛の偉大なるものを信ずるところで安心が來るのである。然れども若しそれゆへ念佛が大切なりと、念佛に滯るならば誤りである。然らば如何にすべきかといふに、信ずるも眞に信じ、稱ふるも眞に稱ふる、此二つの圓滿に結びついて、無暗と信ずるにあらず、力味んで稱ふるに非ず、師敎に從ひ佛願に順ふて、その通りに信ずるのであるから、佛陀本願の內容と、此方の信心と違はずに、信じた通りに唯念佛するのである。これで一致といふことをよく味はねばならぬ。若此の如くならずして、念佛せよといふ師敎であるから念佛するといふならばそれは律法主義に取つたのである。念佛せよ助かるぞとの敎を聞いて、あゝ難有いと受けるこれが信仰主義である。親鸞聖人の『愚禿鈔』上下二卷、其上卷は南無阿彌陀佛の偉大なることを說き、下卷は信心を詳細に說いたのである。この兩卷は敎行信證で云へば行卷信卷に當る。行卷は師法然上人の敎られた念佛の意義を述べ信卷は聖人自己の信心を示されたのである。而してその愚禿抄の兩卷の開卷第一に題下に、各、

賢者の信を聞て、　愚禿が心をあらはす、

賢者の信は、　內は賢にして外は愚なり、

愚禿が心は、　內は愚にして外は賢なり、

と標示してある。賢者の信といふは法然上人の敎示で、如來の本願廣大の佛の惠である。愚禿の心はそれを頂いた聖人の心中である。

以上に述るところにて名號の意味は明らかになつたであらう。信仰に入る前、未だ親に遇はざる以前に稱ふる念佛も、親の名前を呼ぶのではあるが、親に疎い念佛である。かく稱ふる間に親の惠が我心に屆いたとき、親に初めて出遇ふた嬉しさのあまり、嗚呼父よと叫んだ念佛が眞の念佛である。親に初めて出遇ふて喜びの叫を出さんと思ひ立つ心の起るとき、此時早く已に光明の懷に攝取せらるゝ。其處に至る所以のものは大悲の切なる催しよりして、迷を亡し惱を取らんと常に念し給ふ光明の母の賜である。聖人の和讃に

盡十方の無碍光は、
無明のやみをてらしつゝ、
一念歡喜するひとを、
必ず滅度にいたらしむ。

無碍光の利益より、
威德廣大の信をえて、
かならず煩惱の氷とけ、
すなはち菩提の水となる。

罪障功德の躰となる、
氷と水のごとくにて、
氷多きに水おほし、
障多きに德おほし、

と云ふてある、皆是れ光明の方から云ふてある、光明が圓融して我等の心に入る。又

名號不思議の海水は、
逆謗の屍骸もとゞまらず、
衆惡の萬川きしぬれば、
功德のうしほに一味なり、

盡十方無碍光の、
大悲大願の海水に、
煩惱の衆流きしぬれば、
智慧のうしほに一味なり。

これらは光明名號で云ふてある。名號の因に溫き光が心にさしそい、無明の黑暗を破つて下さる、これによりて信心を生ずる。此信心が又光明名號の外緣相續によりて、報土の眞身を得證する。初め一念の時計りの念佛でなく、一期の間稱へる念佛である。初一念の時照破の利益を與へられし光明は、一生の間攝取し護念して下さるゝ光明である。換言すれば父母は子を養育するのである、始終守られて報土に入るのである、此を行卷には嘆咏して次の如く云ふて置かれた。

然れば大悲の願船に乘じて、光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜に衆禍の波轉ず、即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到つて、大般涅槃を證し、普賢の德に遵ふなり。

此の如く常に念佛しつゝ光明の懷に在りての生活である。念

佛は親そのものゝあらわれてある。此念佛の大行は非常の功德無上大利である。此光明は八萬四千の大光明にして如何にしても我等を捨て玉はぬ攝取の光明である、此信仰生活で未來眞身を證するのである。

最後に些細の經驗を加へて申しますれば、私は最初念佛に來ずに、先づ光明の方に氣が附いた。其時の經驗とは佛は慈悲の塊であると書いて置いた。これは念佛を稱へる味を知らずに、佛の惠をのみ喜んだ。これは寧ろ光明の方である。而るに慈悲は光明である、光明は名號によりて顯はれ、名號は念佛によりて顯はれる。近頃は始終念佛を唱へることが非常に有り難く感じさせて頂きます。私一身上の道行で申せば信じて稱ふるが有り難いことであります。昨秋筑前博多の萬行寺に詣した。萬行寺は彼の有名なる七里恒順師の寺である。師は博多にあつて寸暇をば疎にせず、來訪の人を一々引見して、信仰を說くに精勵せられた。百人内外の求道者が常に同寺に宿してあつたといふことである。師或年京都へ上られたとき、一人の同行が同じく上京して同じ旅宿に投じ、師の隣室に在り。寢に就くに方つて何氣なしに「彌陀大悲の誓願を、深く信せん人は皆、寢てもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛を稱ふべし」とある。ねてもとあるは只伏して居ることか、ねて入て居ることですかと問ひしに、師答て曰く、さめてもとある對だからね入て居ることであると。此人又問ふ、寢入つて在り乍ら能く念佛すべきや。師曰く、然り能く念佛し得べし又問ふて曰く、如何にして爲し得べきか。師曰く、それには秘傳がある。望みならば敎へてよいが、併し汝は寢ねて居る間稱名し得るか。汝之を爲し得たらんには、寢ねて稱名することを敎へんと。此人慚懼して云ふところ無かつた。夜半眠り醒む、師念佛の聲絶ゆることなし、怪しんで之を覗ふに師熟睡の中に在り、而も念佛して曉に達して止まざりしといふ。この人この事を我に語つて曰く、此事心肝に徹し今猶忘るゝ能はず、實に尊きことなりと。右の和讃は七里恒順師晩年に至つて、毎々諷誦して人に聞かせられたるものであつて、師が信仰を最もよく述べたものであらう。これと同時に播州の最勝寺後藤祐護師は明治十九年頃から、日課念佛三萬を勸められた。其後宗敎問題の爲に非常に奔走せられた爲に、日課念佛の數を滿たすことが出來なかつたて、事治まつて後之を補はれた。師は非常に罪惡感が強くして常に、「極惡深重の衆生は、他の方便さらになし、偏に彌陀を稱してぞ、淨土に生ると述べ玉ふ」といふ和讃を誦しつゝ、「我は罪惡僧なり、かゝるものを助け玉ふこと辱なし」と獨語しつゝ、念佛せられたといふことである。この和讃はまた後藤師の信念をよくあらはしたものであらう。此二首の讃文一は機一は法相對して兩師の面目を發揮して居るといふべきである。

濟度衆生の願は、平等にして、差別有事なけれども、無緣の衆生は利益を蒙る事あたはず、此故に彌陀善逝、平等の慈悲に偖されて、十方世界にあまねく光明を照して、一切衆生に悉く緣を結ばんがために、光明無量の願をたてたまへり、第十二の願是なり、名號を以て因として、衆生を引接し給ふ事を、一切衆生にあまねく聞かしめんが爲に第十七の願に、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずと云はゞ、正覺を取らじと云ふ願を建給ひて、次に十八の願に乃至十念若不生者不取正覺と立給へり、是に於て釋迦如來、此土に說き給ふが如く、十方にも各々恒河沙の佛ましまして同く是を示し給へる也、然ば光明の緣は普く十方世界を照して、漏す事なく、又十方世界無量の諸佛、皆名號を稱讃し給へばことゝずと云ふ處なし、我至レ成二佛道一、名聲超二十方一、究竟ノ陞レ所レ聞、誓不レ成二正覺一と誓ひ給しは此故なり、然らば光明の緣と、名號の因と和合せば攝取不捨の益ム蒙らんこと疑ふべからず、此故に、往生和讃の序に云く諸佛所讃ハ平等ニノ是一ナレトモ以二願行一ヲ來タシ收ムレハ非レ無二因緣一、然彌陀如來、發二深重ノ誓願一ヲ、以二光明名號一ヲ攝二化十方一と云へり

（和語燈錄）

五　利他願海

念佛爲本の師敎は即彌陀の本願である、法然上人の念佛は即南無阿彌陀佛の佛名である、法然上人と一處に在るが即彌陀と一處に在るといふことである。親鸞聖人は「彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說敎虛言なるべからず、佛說まことにおはしまさば善導の御釋虛言し玉ふべからず、善導の御釋まことならば法然の仰そらことならんや」と云ふて居られる。本願も佛敎も師敎も、皆唯一念佛である。之を信ずる聖人は一節に念佛して居られた。嘆異鈔に「持ち易く稱へ易き名號を按じ出し給ひて、此名字を稱へんものを迎へとらんと御約束あることなれば、先づ彌陀の大悲大願の不思議に助けられ參らせて、生死を出づべしと信じて念佛まうす」といふてあるも、又自然法爾章に

南無阿彌陀佛とたのませ給ひて、迎へんと計らはせ給ひたるによりて、行者のよからんともあしからんとも思はぬを自然とは申すぞときゝてさふらふ、

といふてある。之を更に逆に云へば

彌陀の名號となへつゝ

信心まことにうるひとは、
憶念の心つねにして、
佛恩報ずるおもひあり。

といふことになる。この念佛は彼の佛の本願に順するところの道である。佛の本願は即南無阿彌陀佛の大行で、之を說き廣げたが一代佛敎である、其處で一代佛敎は佛の本願に出でずである。十方諸佛の隨自意として說くところの法である、十方の諸佛といふは、彌陀佛の第十七願から顯れ出て玉ふので釋尊も亦第十七願に乘して人生に形をあらはし玉ひたのである、其根本たる彌陀大悲の誓願を今利他の願海と嘆美するのである。

行卷に曰く
他力といふは如來の本願力なり

如何にも力强い言辭である。動もすれば佛敎には數多の門戸がある、之を大別すれば自力と他力である、自力で進み行くは寔に立派な道であるが、我々は力及ばねば據なく他力に就くのであると、思ふものもあるが、今の他力はそういふ相對的の他力でない。今の他力といふは、偉大なる絕對力を知らした言辭である。前にも云ふた如く他力と云ふ言辭を誤解して、次の如く思ふて居るものがある。自力ではとても駄目であると行き詰つて苦しさの餘り投げやりにして、どうなりと成るように成るであろうといふて居るのが他力であると、だがそれは半途で疲て坐り込んで居ると同樣である、他力どころか無力である。其樣に何時迄坐つて居ても力が出て來ぬから何時か又起つて自力でやつて行かうとする、何事も佛の御計らひである他力であるといふは甚力ない、そういふ他力は活動がない、そこで此次は他力によりて活動せんと試みるやうになる、多くは向ふの方に物を見ておいて、それを目的として、こちらから、自己の力でやる、神なら神の意志に從つて自分が實行していく、目當に從つて眞劍にやつて行く、大に倫理力行に出づる。それは他力の杖によりて實行していくので、坐り込んで居るよりは力あるか如く見えるのであるが、向ふは目當で實はこつちで運ぶのであるから、純粹の他力でない。そういふ人の考では自力の宗の中にも他力なきに非す、他力宗にも全く他力のみといふとは有るべき筈がない、既に信仰といふも自己の心に信ずるのである、何ぞ純他力といふことあるべきやとこういふ理由から云ふのである。此の如き他力は半自力半他力である。然らばそれで成し遂けられる

かといふに、目的の理想は愈高くして實行の力が愈伴はぬ。他は益高く力は益不足するから、如何にしても及ぶことが出來ない。譬へは左足を船に右足を陸に置いて、船を行らんとするが如くである、倒れざるを得ない。今親鸞聖人の他力といふは、無力にもあらず、力を自力にして他を向ふに置くにもあらず、全く船に乘り込んで、船の力で行くのである、佛の願力に全托して願力自然の運ふにまかせて、此人生を實際に送つて行くのである。だから順境にも逆境にも從容として常に佛の惠の難有いことを喜びつゝ、人生百年の後彼涅槃界に到らせて頂くのである。佛陀を理想にして歩を運ぶ代りに、願力の船に托してどん〳〵進んで行く。孝行は親を目當に此方から運ぶてなしに、親の惠で自然に出來るが孝行であるから孝行は全く親の念力である、他力は絕對の本願力である、到るところ佛陀の惠のみである。小さい人間の計らいを以て、一個人が眞劍でやるとは同日の論でない。

其他力のことを今こゝに利他といふは抑何故であるか。この言辭に就ては大に味ふべきことがある。親鸞聖人は證卷大尾に

宗師は大悲往還の回向を顯示して慇懃に他利利他の深義を弘宣し給へり、

と嘆咏せられた。其他利々他といふは如何なることぞといふに、聖人の製作せられた入出二門偈に、

願力成就を五念と名く。佛よりして言へは利他といふべし。衆生より言へば他利といふべし、當に知るべし、今將に佛力を談せんとす、

と云ふてある。これから見れば、佛陀自ら行へる佛の慈悲の持ちものを、人に與へるのが利他である。佛から云へば利他といふべきである、他の衆生を利樂するのであるから。それを利樂せらるゝ吾人の方から云ふと他利といふべきである。他の佛に利せらるゝのであるから。其處で他利といふも利他といふも、內容は同じことではあるが、言辭の立て方に左右がある。今こゝに物あり、之を引上るに、物から云へば他に引上られたといふべく、力から云へば引上げたといはねばならぬと同じことである。今此處は佛願力を云はんとするところであるから、利他といふが大に明確である。彼の他力といふ言辭を誤解して無力と同一視したり、或は半自力半他力に陷る所以のものは、自己を本位として居て、佛陀の偉大なる力が見えぬからである。若し他力の力が願力であると氣附けば

直に翻然と自力を捨てゝ、全然佛願力に乘托することが出來る。佛の方から引上げて下さる利他の力を知らずに、口には他力を言ひながら自力の回向發願が離れぬゆへ、半半自力半他力に陷るのである。此の如き理由があるから、他利の言よりは利他の言を用ゐたのである。勿論他利といふも他力といふも正當にその意味を取れば惡いことはないが、利他といふ方が一層力强く、且つ明確である。譬ば云ふ如く信仰の極致は一大轉換であつて、他力回向の眞味はこゝに在るのである。之をよくあらはすは利他の二字であるから、親鸞聖人は大に嘆美して、他利々他の深義といはれた。此の如く天下を覆ふの光大空を覆ふの雨の如き偉大なる利他の本願、これを海の如く譬へて利他の願海と云ふたのであります。

親鸞聖人は更に之に嘆じて一乘海といふ、善人でも惡人でも悉く入れて仕舞ふ、光は何物をも照す、海の水を簡ばぬ如く、諸有るものを皆入れて仕舞ふが、利他の本願の海である。佛一代の說法は此海を說く爲に顯はれ來たのである。利他の願海一佛の名號、この偉大なるもの即ち佛陀である、即ち大行である。それであるから行卷には聖道萬行自力諸善は皆小なる凡夫の計らひである、この南無阿彌陀佛は絕對の善であると澤山の對を出してある。曰く、

然るに敎に就て、念佛諸善比校對論するに、難易對　頓漸對　橫竪對　超涉對　順逆對　大小對　多少對　勝劣對　親疎對　近遠對　深淺對　弼弱對　重輕對　廣狹對　純雜對　徑迂對　捷遲對　通別對　退不退對　眞辨因明對　名號定散對　理盡非理盡對　勸無勸對　無間々對　斷不斷對　相續不續對　無上有上對　上々下々對　思不思議對　因行果德對　百說他說對　回不回向對　護不護對　證不證對　讚不讚對　付囑不付囑對　了不了敎對　機堪不堪對　選不選對　眞假對　佛滅不滅對　利不利對　自力他力對　有願無願對　攝不攝對　入定聚不入對　報化對あり。斯の義斯の如し。然る本願一乘海を按するに圓融滿足極速無碍絕對不二の敎なり。

此の如く利他の願海を絕對のものであると云ひ切つて仕舞ふて之を受け來つたる機、即ち凡夫の信心は、亦從つて絕對不二の信仰であるといふを次に

亦機に就て對論するに、信疑對　善惡對　正邪對　是非對　實虛對　眞僞對　淨穢對　利鈍對　奢促對　豪賤對　明闇對あり、この義かくの如し。然るに一乘海の機を按

ずるに金剛の信心は絕對不二の機なり、知るべし

とある。佛陀の惠の有り難いと喜ぶ信仰は、如何なることを爲すよりも勝れてある、比較すべきものが無い、絕對の大善である、大功德である。歎異鈔にも

しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛に勝るべき善なきが故に

といふてある。行卷にも色々の譬を以て嘆美してある。曰く、

喩へば大虛空の如し、諸の妙德、廣大無邊なるが故に。猶ほ大車の如し、普く能く諸の凡靈を運載するが故に。猶ほ妙蓮華の如し、一切世間の法に染せられざるが故に。善見藥王の如し、能く一切煩惱の病を破るが故に。猶ほ利劍の如し、能く一切憍慢の鎧を斷つが故に。（已下之ヲ省略ス）皆利他の方から出て來てある。

斯く云へばとて人生を飛離れた如く思ふてはならぬ、此偉大なる力は始終我々に向つてある。行卷に我々の信仰を表したる歸命の二字を、聖人は如來利他の手元に於て釋して、本願招喚の勅命なりと云ふに臨んで、先づ字訓を以て釋義を施す中に、命の字訓に「計也」とある。これ他なし信仰上のことは云ふまでもなく、人生の善事、兇事、皆廣大なる佛の方から計らはれるのである。親鸞聖人晩年に及んで益この事を深く感ぜられて、常の法語皆此義を盛んに語られた。これは運命論とは違ふて物事を捨てやることでない、佛は種々無量に善巧方便して我々を育てゝ居て下さる。彼の自然法爾の章にも、

彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、迎へんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とは申すぞときゝてさふらふ

と云ふてある。然れば此如來の御計らひは我々を淨土へ迎へ取らんとの不可思議の御計らひである。我々に佛陀の惠みを屆けようといふ廣大の御計らひである、此如來の廣大の計らひが即ち利他の願海である。これに對して我等が善からんとも惡しからんとも思はぬをば、自然とも他力とも云ふのである。斯の如く絕對の御力が我々の上にうつゝて來るところは何とも云ふて見ようなき有り難き點であつて、親鸞聖人も云ふても〳〵云ひきれぬから、終に嘆咏の言葉となつて顯れ來つた。これが彼の正信念佛偈であります。

そこで正信偈の前に彼の天親菩薩の法土論の初にある世尊

我一心歸命盡十方無碍光如來とある啓白を釋されたる曇鸞大師論註の文句を引用したまひてある、前にも一度引用した文である、即ち天親菩薩先づ世尊の父を呼び上げて、其自督を告白したまふは、恰も孝子が父母に歸し、忠臣が君后に事へるに、一擧一動、出處進退、一として私を交へず、何事も皆君父の計ひに從ひ奉るが如く、天親菩薩も全く盡十方無碍光如來の極まりなき大悲の母の光明の懷に攝取せられて、信心歡喜の胸中を披瀝して如來の下に告げたまはずには居られぬのである、即ち恩を知りて德を報ず、理宜しく先づ啓すべしとは、いかにもよく其情を言ひあらはされた。又所願輕からず、若し威神を加へたまふにあらずんは、將た何を以てか達せん、神力を乞加す、所以に仰で告ぐと、いかにも如來直々に威神力を加へたまふことを適切にしめしたまひた、聖人が信卷に如來の加威力に由るが故に大悲廣惠の力によるが故にと申されたも畢竟此直々の加威力である、今天親菩薩の歸命盡十方無碍光如來と申されたはかくの如き忠愛至孝の至情より溢れたる感謝の啓白、加威力を歡喜讃仰したまへる告白である、聖人が歸命といふは釋迦彌陀二尊の仰に從ひ、召に叶ふと申す言なりと申されたがこの點である、天親菩薩がかく如來の下に啓白したまふ如く親鸞も佛恩の深遠なるを讃仰して默するあたはず、先づ口を開きて啓白したまひたるが、歸命無量壽如來、南無不可思議光の御言である、而して願生偈に天親菩薩が淨土莊嚴を讃嘆したまふ如く、聖人は其讃仰したまへる大聖の眞言、大祖の解釋の骨目を諷詠して、自己の信念を告白したまひ、最後に道俗時衆共同心、唯可信斯高僧說と結びたまひしが六十行、一百二十句の正信念佛偈である。

（以下次號へ續く）

近角常觀著（第九版）
信仰之餘瀝
定價拾五錢
郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中）
人生と信仰
定價貳拾錢
郵稅壹錢

近角常觀校訂（再版）
冠頭 歎異鈔
一冊郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）
但三冊までは郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著（第四版準備中）
懺悔錄
定價貳拾錢
郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區眷木町二丁目二十一番地 森江分店
賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

明治四十年十月廿七日印刷
明治四十年十一月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所 求道發行所
東京市神田區神保町

賣捌所 東京堂

規定

一、本誌は毎月一回一日發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

前號要目

求道

◎佛教之眞髓　近角常觀

一　人生と自覺
二　絶對の大悲
三　罪惡の救濟
四　涅槃の靈境
五　光明の人生

講話

◎人生と信仰　近角常觀

告白

◎入信前後の回想　小澤一

◎父を失ひ大悲の親を得　自在丸　伊惠子

講義

◎歎異鈔—第四章　近角常觀

嘆咏

◎雪子　左千夫

◎短詩　甲之

紹介

◎哲學と人生◎信仰と修養◎三度の願◎自然の妙趣

時報

◎本年の夏期傳道

（本號に限り定價金二十錢）

求道第四卷第六號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十年十一月一日發行（毎月一回一日發行）